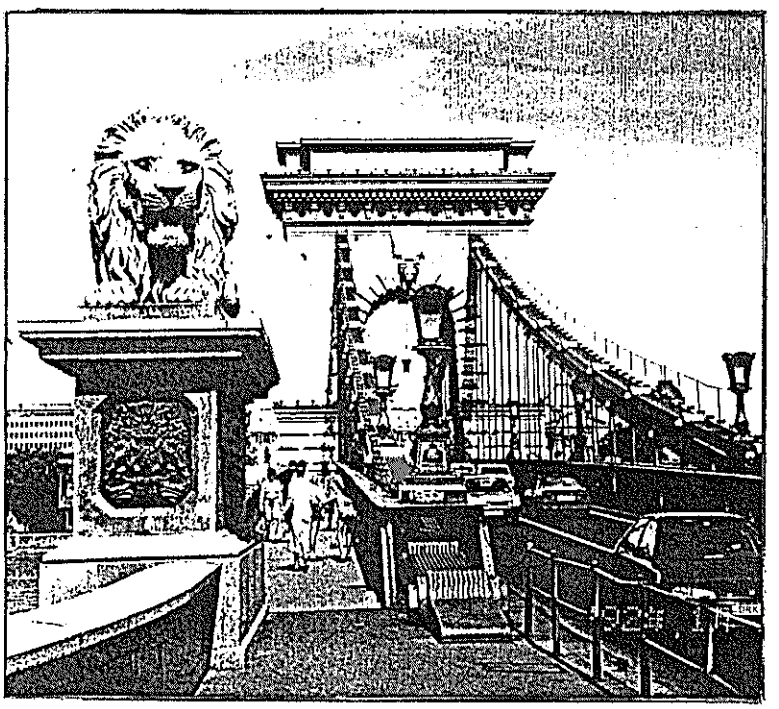
東ヨーロッパ７ケ国の旅

旧東ドイツ～ポーランド～チェコ～ルーマニア
～ブルガリア～スロバキア～ハンガリー

（下はハンガリーの首都ブダペストのくさり橋）



平成５年７月５日～１７日　１３日間

（１９９４年）

寺　前　信　次

「東ヨーロッパ７ケ国の旅１３日間」　目次

まえがき　・・・　１
7月5日　・・・　３
東欧への旅が始まる　・・・　３
7月6日　・・・　６
東ベルリン観光　・・・　７
ポツダム　・・・１０
ポツダムと私　・・・１０
サン・スーシ宮殿　・・・１１
ツェツイリエンホフ宮殿　・・・１４
7月7日　・・・１８
ポーランドへ　・・・１８
ワルシャワ市内観光　・・・１９
古都クラコフへ　・・・２５
7月8日　・・・２６
クラコフ市内観光　・・・２６
ユダヤ人を大量虐殺した
　アウシュヴィッツ強制収容所・・・２９
ビルケナウ第２収容所　・・・３６
東欧のユダヤ人に就いて　・・・３８
7月9日　・・・４０
カトビッツエ～プラハ　・・・４０
チェコの歴史の概要　・・・４１
東欧民族の歴史の概要　・・・４２
プラハの概要　・・・４３
プラハ市内観光　・・・４４
ハプスブルク家（帝国）　・・・５０
7月10日　・・・５２
ルーマニアの首都ブカレストへ・・５４
ブカレスト市内観光　・・・５４
7月11日　・・・５８
ブルガリアの首都ソフィアへ・・・５８
ブルガリアの概要　・・・５８
リラの僧院の見学　・・・５９
7月12日　・・・６２
ソフィアの歴史と市内観光　・・・６２
スロバキアの首都
　　プラチスラヴァへ　・・・６５
7月13日　・・・６７
プラチスラヴァ市内観光　・・・６７
ハンガリーの首都ブダペストへ・・７０
7月14日　・・・７４
ブダペスト市内観光　・・・７４
7月15日　・・・８３
ドナウ・ベンドの見学　・・・８３
ブダペストの夜景ドナウの真珠・・８８
7月16日～17日　・・・８８
帰途につく　・・・８８
あとがき　・・・８９

まえがき

発憤忘食　楽以忘憂　不知老之将至」（発憤して食を忘れ、楽しみと憂いを忘れ、老いのまさに至らんとするを知らず）と論語に書かれている。人間は何事かに打ち込んでいると、老いることも忘れてしまうという意味である。即ち自分が心から楽しめるものを持ち、年などを忘れることが美しく老いることだと言うのである。

花は散ってるまた咲くが、人間の若さは肉体的には戻ることがない。大事なことは心の若さであり、その秘訣は今日を思う存分に生きることである。そのために私は旅を活気を取り戻す蘇生術だと考えている。

７０の坂を越して早や半ばに達し、足腰の痛みに耐えながら「一日快活敵千年」（一日快活なるは千年にあたる）と嫌なことは忘れ、「犬も生きておれば死んだ獅子よりましだ」、と旅を続けて楽しく生きてきた積りである。

「莫道桑楡晩　為霞尚満天」〔道（イ）うなかれ、桑楡（ソウユ、日ぐれ）の晩（ク）るるを、霞となってなお天に満つ〕という辞もまた、私を最も勇気づけてくれる好む訓であった。

自分は心から年老いてしまったと思ってはいけない。まさに沈もうとしている太陽は、空一面を照らし出すような強い力を持っている。年をとっても変に老いを意識することなく、勇気をもって旅をせよと励ます言葉だと解釈している。

春秋に富んだ時のように世界に飛躍する志をもてない今は、想像の彼方の世界を見て歩く楽しみだけが若返りの方法だと思い、今年も既に２回も外遊した。そして旅先で「お若く見えますね」と言われるが、それは若くない証拠だとも自覚している。

「賢者は歴史を学び愚者は体験を学ぶ」と言われているが、旅は歴史探訪の絶好の機会であるから私は学問だと心得ている。学問には年齢は関係せず、大切なことは好奇心と向上心ではないだろうか。今さら賢者、学問云々ではないが、「晩学といえども碩学に昇る」と旅先の選定に取り掛かった。

５０年に一度という冷夏に見舞われた昨夏を裏返したように、本年の夏は空梅雨と猛暑だという予報を耳にすると、私は自然に焦熱地獄のようであった酷熱下のビルマ（現ミャンマ）の死斗が、思い出されるのであった。

そして終戦記念日が近づくにつれて毎年のように私の脳裏に去来するのは、中部ビルマ戦線で聞いたポツダム宣言であった。取り寄せた旅行各社のパンフレットの中で目に止まったポツダムの地名は、私にとっては「金不換」、金に換えられないものであり、否応なしに私の心は引き付けられてしまった。

ポーランドの名はまた、軍国主義時代に学生が歌った歴史的な軍歌、「波蘭（ポーランド）懐古」を懐かしく思い出させ、栄枯盛衰、存亡興廃を繰り返したポーランドへの夢は、弥が上にも高まってきた。

東欧、中欧８ケ国を流れる２９００㎞の大河ドナウの流域は、さまざまな民族が複雑に入り組み、征服と隷属、栄光と屈辱、妥協と共存という過去があり、世界の火薬庫と言われた悲劇の流域こそ、歴史探訪に相応しい地域であった。

第２次世界大戦後の東欧は強制的にソ連の支配下に入れられ、チェコの「プラハの春」や「ハンガリー動乱」は我々の記憶に新しいことである。そして冷戦構造崩壊後のベルレンの壁の撤去と共に、ルーマニアのチャウシュスク大統領に対する生々しい革命の映像が、彷彿として瞼に浮かんでくるのであった。

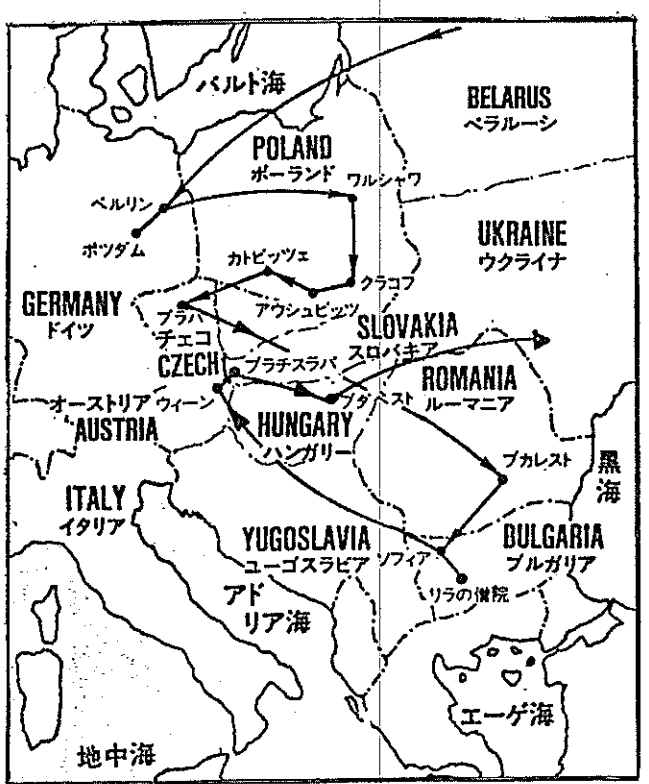
一方、旧ユーゴスラビアのボスニア・ヘルツェゴビナの内戦の報道は、連日の新聞記事からその活字が消えることはない。このことが今日まで私の足を東欧に向けさせなかった最大の要因でもあった。

世界を股に掛けて飛び廻り７０ケ国以上の国々を訪れた私は、ＮＡＴＯ軍のボスニア・ヘルツェコビナ派遣によって戦争の危惧は解消したと判断した。そして今に生ることが人生の醍醐味であり、旅は晴耕雨読のようなものだと参加を決意した。

古代ローマ時代の植民地から、オスマントルコやオーストリアのハプスブルク家の支配時代、東西冷戦期を経て現在に至る歴史を織り込みながら、多種多様な民族や宗教を軸に揺れ動いた東欧の歴史は、興味津々として尽きることがないのであった。

【「東欧」という一つのまとまった実体が存在する訳ではない。東欧はソ連と西欧諸国の中間にあって、第２次大戦後に社会主義になった国々を東欧と言うのではないだろうか。
これはヨーロッパ人が日本、朝鮮、中国などを一まとめにして、東アジアと呼ぶようなものであろう。
上記のような定義を下せば、ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、（旧ユーゴスラビア）、アルバニアが東欧諸国で、旧東ドイツは西ドイツとともに東欧に入れないこともあるようだ】

今次旅行の経路図



7月5日　(火) 晴　東欧への旅が始まる

１９８９年、東欧諸国は歴史の大きな曲がり角に遭遇し、ベルリンの壁は取り除かれ、西側に接した国々は完全に国境を開放したのであった。

それ以降、地理的概念というよりは、むしろ政治的概念から東欧と称されてきた。西欧の東に位置する東欧諸国は、私にとってブルガリアを除いては初対面の国々で、ポーランド、チェコ、ルーマニア、ブルガリア、チェコ、ハンガリーの順に訪れることになった。

これらの国は紀元前の昔から東西の交流路となり、様々な民族が複雑に交差しながら多くの興亡を繰り返してきた。その歴史の中で守り抜かれてきた華やかな独自の文化は、これまでは我々の前に姿を見せる機会は少なかった。

しかしベルリンの壁の崩壊以降、東欧の映像がたび繁く送り込まれ、ニュースとして流される物不足のための長い行列や暴動騒ぎは、暗い危険な東欧のイメージとなっていた。

ヨーロッパの一角にありながら、どこかに置き忘れたような国々だからこそ魅力があるのであった。天命に従いながら旅を楽しむ私の旅心は死して後止むのだと、明鏡止水の心境で成田に集合した。

一行１４名の旅人は中年の人が多く、今回も私が最高年齢のようであった。１２：００に飛び立ったアエロフロート・ロシア国際航空５７６便は、大陸を横断してモスクワに向かった。

ヨーロッパへの直行便が多い中で、ドイツに行くのにモスクワで乗り継ぐ便が敬遠されるのは当然で、乗客は定員の５分の１にも満たない状態であった。ロシア航空を利用する格安の旅行代金で客を募集した苦肉の策は、空席のために返って横臥できる利を生み、足腰の痛い私にとっては幸いとなったのである。

成田～モスクワ間の飛行時間は約１０時間で、時差が５時間のモスクワまでは陽光を浴びる空の旅であった。冷房のきき過ぎた機内から眺める下界は、燦々と太陽が降り注ぐ下に眠ったような大陸の佇だけが展開していた。

ゴビの砂漠であろうか、集落が一つも見えない赤茶げた砂の世界に微かな薄い緑が見えていた。そして砂の世界にはまた、地球が生きている証拠のように蛇行した川がくっきりと流れていた。

機内で読書に耽ったり冥想したりする安楽な生活も意外に退屈となり、遂に苦痛を覚えてきた。これが「楽隠居、楽に苦しむ」と言うのであろうかと思うと、人生もこのように掻き消える夢に過ぎないと思えるのであった。

成田を発って８時間を経過したが時差のため未だ陽は高く、自然の試練に耐えてきた屏風のような山並みが立ちはだかっては去って行った。その山肌の皺の中に残雪が皓々と光っていた光景は、強く私の網膜に残っている。

乗客は殆ど日本人だがロシアは今でも大国意識が強いのか、機内のアナウンスはロシア語だけで、何処を通過しているのか分からない。時間的に恐らくウラル山脈であろうと判断していた。

機は少しずつ高度を下げたのか森林が明瞭に姿を現わし始め、区画整理されたグリ

ーンベルトの中にロシア式の建物が見え出すと、搭乗機は征服者のように滑走して白樺に囲まれた空港に着陸した。現地時間は午後５時３０分で飛行時間は１０時間半であった。

駐機場には数え切れない航空機が並列していた。何年ぶりだろうかと空港ビル内を進んだが歩く歩道もエスカレーターもない。薄暗いビルの中には小さな免税店があるだけで、発展途上国よりも劣悪な環境の中で３時間の待機となった。

モスクワには幾つの空港があるのだろうか。私がモスクワを訪れたのは２０年も前のことで、記憶が薄れて思い出せない。こんなに劣悪な薄汚い空港だったのかと外に目をやると小雨が降り出し、気温は日本の３月頃の寒さであった。

経済力を無視した軍事万能政策は終結を見たが、その付けは簡単に回復はできないばかりか、政治の権力闘争だけが旧態依然として残った感じであった。ロシアの将来はこの空港一つだけを見詰めてみても答えは簡単で、前途は暗闇のようである。

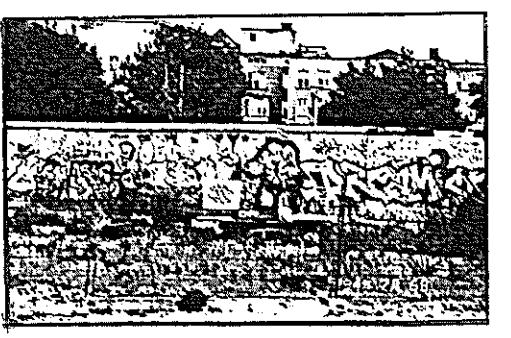
国家は戦争に負けた時だけ滅びるものではなく、国民の不満が爆発して内側から何時でも崩壊するのである。太平の世に慣れた日本の政治家諸君も世界の興亡の歴史を学び、洞察力を涵養しなければならないと思いながら、居心地の芳しくない空港ビルで待機を続けていた。

小雨の降る暮色蒼然となった２０：４０、搭乗機のＳＵ５９６便は離陸して東ベルリンに向かった。共産圏が崩壊した今では東ベルリンとの交流が少ないと見えて、機も５０人乗りの窮屈なポンコツの小型機であった。

国際線とは名称だけで便器はブリキ製で水も出ない状態である。これは疲弊しきったロシアの経済状態を如実に物語り、人道を無視したソ連・ロシアの傲慢な征服者の遺物が、我々の罵詈雑言を浴びながら飛行しているような姿であった。

アフリカの貧しい国にも劣る搭乗機はサンマタイムの午後１０：２０、不安を感じながらベルリンの小さな空港に無事に到着した。白夜現象の影響もあるのか空は未だ明るく、成田から１５時間の旅は漸く終わりを告げて、いよいよ東欧の旅の第一歩を踏み出したのであった。

日本に留学したことのある明眸皓歯の女性ガイドのビルギットさんの出迎えを受けた。彼女の説明によるとベルリンには３つの国際空港があり、我々が着陸した空港は旧東ベルリンのシューネフェルト空港であった。モスクワと同じく旧共産圏の空港は実にお粗末である。

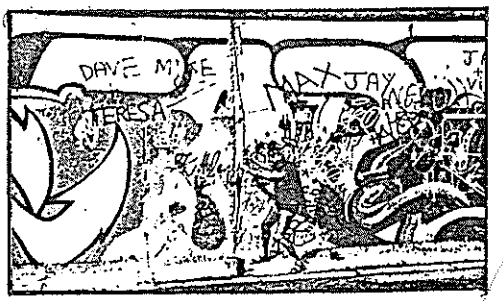


私にとっては２１年ぶりに訪れたドイツだが、旧東ベルリンは処女地であった。美しい花畑に囲まれた空港から市内までの２５㎞の街道を目を皿にして進むと、高さ３６５ｍのテレビ塔とロシア戦勝記念公園が見えてきた。

幅員が狭くなって曲がりくねった道路は戦前のものだろうかと思っていると、都市計画が進まない雑草の伸びた市街地の中に、所謂「ベルリンの壁」の一部が見えてきた。（上の写真はベルリンの壁の一部）

間髪を入れず素早くシャッターを切って凝視しつづけ、ベルリンの壁を眺めながら第２次大戦後の歴史を回顧していた。

終戦後の１９４７年３月にトルーマン・ドクトリンにおいて宣言され、アメリカのマーシャル・プランの実施によって開始された米ソの「冷戦」は、４８年２月のチェコスロバキアでの政変によって激化した。



（右は数１００ｍもつづくベルリンの壁の拡大した図柄と落書きの一部）

更に同年６月、ドイツの西側占領地区における通貨改革（占領政策をめぐる西側３国とソ連の対立から、ソ連は管理理事会を脱退したため西側は通貨改革をした）に対して、ソ連が強行した「ベルリン封鎖」によって頂点に達した。

ベルリンの壁

ポツダム会議の合意に反して、ドイツに対する連合国の共同管理はその実を失い、ソ連占領地区と西側占領地区との間の分裂が深まり、４９年９月のドイツ連邦共和国（西ドイツ）の成立によって、それは決定的なものとなった。

そして同年１０月、ソ連占領地区にドイツ民主共和国（東ドイツ）が成立したが、アジアの朝鮮半島の分断とともに、ドイツ民族もまた戦勝国の勝手によって悲劇の運命を辿ることになった。

１９５０年以降、東ドイツは社会主義の基礎建設の名のもとに、重工業生産の優先的発展が強行された。これは鉄・石炭などの重要資源を欠き、見るべき重工業をもたず、しかもソ連への戦争賠償支払を余儀なくされた東ドイツが、奇跡と呼ばれた戦後経済復興に成功した西ドイツに対抗するため、避けがたい過程であった。

しかしこの間に言論・政治活動の自由の制限、消費財の欠乏、官僚主義の横行などから、東ドイツ政府とソ連占領軍に対する市民の不満は高まり、ベルリンや他の都市でストライキや暴動が起った。

また西ドイツとの生活水準の格差は広がるばかりで、知識人、技師、医者、農民ばかりでなく、勤労者までも大量に東ドイツから西ドイツへと流れていった。

このため６１年８月、ついに東ドイツ政府は、それまで往来の自由であったベルリンの東西間の境界を遮断した。ここに生まれた「ベルリンの壁」は西側の反ソ、反東ドイツの宣伝を激化させ、東西間の緊張は益々高まった。

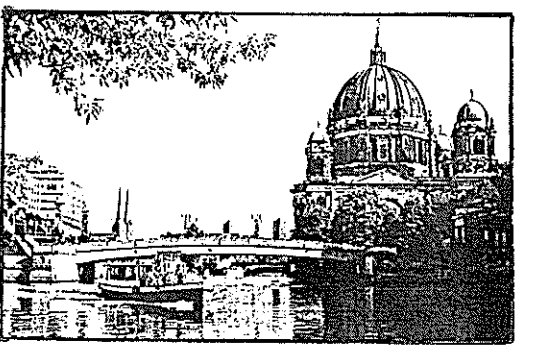
これより先、１９５５年の西ドイツの「北大西洋機構」（ＮＡＴＯ）への加盟と、これに対抗する東ドイツの「ワルシャワ条約機構」への加入によって、遠のいていたドイツ再統一は絶望的　となった。

ベルリンの壁を眺めながら、当時のアデナウア西ドイツ首相や、東ドイツのホーネッカ議長の名前を懐かしく思い出すと同時に、戦後の日本の分割占領案が蒋介石の強硬な反対に遇って葬られた歴史の経過などが、私の脳細胞の中を駈け巡っていた。

世界を引っ張っていく秘訣は只一つしかないのではないだろうか、と車窓から東ベルリンの市街を見詰めていた。それは強くなると言うことに過ぎない。何故なら力には錯覚も誤謬もなく、力は裸にされた真実だと思うのである。

一行を乗せたバスは東ベルリン中心部にある「ラディソン・プラザ・ホテル」に午後の１０時４５分に到着した。

7月6日　（水）晴



５時に起床して朝風呂を浴び、十分に膝のリハビリーをする習慣は旅先でも同様であった。北樺太と同緯度のベルリンの夜明けは早く、部屋の窓一杯に映っていたのはベルリン・ドームと称される大聖堂で、イタリア・ルネサンス様式の威容は東ベルリンの歴史的な建造物の一つと言われていた。（右の写真は部屋から眺めたベルリン大聖堂とシュプレー川の景観）

プロイセン王国（１７０１年成立）の王都からドイツ帝国の首都となり、引き続きナチス時代にも首都であったベルリンの過去を脳裏に浮かべながら、早速、一人でホテルの屋上に脚を運び、悲劇の時代を生き抜いてきた東ベルリンの様相を興味深く眺めていた。

７月の月間平均気温が１８°という稍々寒く感じる眼下にはシュプレー川が緩やかに流れ、河畔には各種の博物館が立ち並び、赤くて渋い市庁舎の塔とニコセイ教会の屹立した尖塔が天空に聳え、蒼暗な宇宙を目指してテレビ塔も伸びていた。

私等の年齢で知っている世界都市ベルリンの知識は、第１次大戦の敗戦後のワイマール共和国の成立（１９１８年、ドイツ共和国）からのことで、目覚ましい復興から黄金の２０年代を迎えた歴史は、微かに記憶の中にあった。

しかしその繁栄も長続きせず、世界恐慌の中の３３年１月３０日、ヒトラーが帝国の宰相に任命され、これを祝う行進がブランデンブルグ門で行われた。

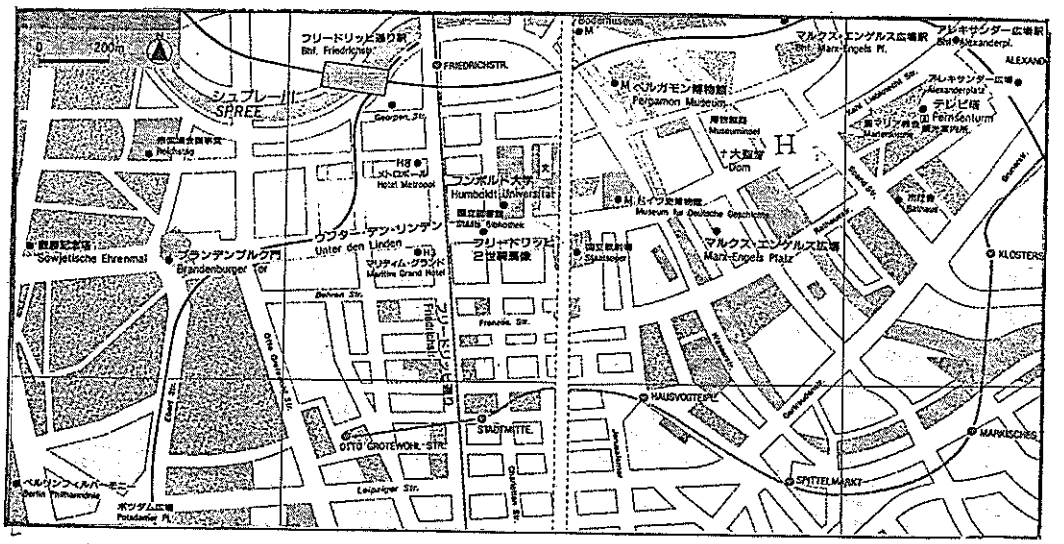
同年２月末の帝国議会議事堂の炎上事件などを利用して、ヒトラー政権はナチス一党支配への道を進み、１９３６年のベルリン・オリンピックを頂点とする絶頂期を迎えた。その記憶は昨日のように明瞭に残っている。

３９年に第２次大戦に突入して４５年５月の敗戦まで、度重なる爆撃と砲火にさらされたベルリンは、全建造物の５分の１が完全に破壊された。これは枢軸関係にあった日本と同じ運命である。

しかし屋上から展望する眺めの中には戦争の生々しい傷跡は見えず、これは日本の各地の戦禍が消滅しているのと同様であった。そして地図と照らし合わせながら観光の要点を頭に刻み込んでいると、今まで生きてきた私にも、計り知れない重みがあるように感じられるのであった。

盛りを過ぎた野菜や果物が、初物のように珍重されることは人間社会も同様で、若い人達がいくら頑張っても我々が感じるような重みを得ることはできないのだ、と考えながら個室に戻ったのであった。

東ベルリン観光（下図参照）



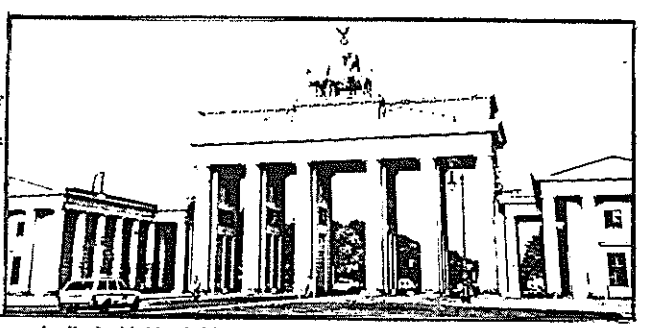
私の東ドイツ観光の主目的はポツダムで、東ベルリン観光は従であった。

旧東ドイツ時代の栄えていた頃の１９８０年に建てられたホテル「ラディソン・プラザ」を８時に出発し、ドイツ・ルネサンス様式の市庁舎から聖マリア教会を廻り、プロイセン国王の教会であったベルリン大聖堂の前に再び戻り、菩提樹並木の美しい「ウンター・デン・リンデン」の大通りを西に進んだ。（上図中央東西の線）

ベルリン随一の繁華街であり、旧東ベルリンの顔であった大通りには豪華で壮麗な建物が立ち並んでいた。かってはプロイセン（１７０１～１９１８）や、ドイツ帝国（１８７１～１９１８）の皇帝、そしてヒトラーがこの街道を行進する軍隊を閲兵した通りであった。我々が幾度となく見たヒトラーの姿を重ね合わせていると、なぜか表現できない懐かしさを感じてくるのであった。

「ブランデンブルグ門」

大通りに立っていたフリードリッヒ２世（大王）の騎馬像を過ぎると、直ぐブランデンブルグ門であった。

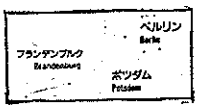


ブランデンブルグ門は１７８８～９１年にかけて建てられたプロイセンの凱旋門である。

ギリシア風の柱が列をなすドイツ古典主義的建築の代表作で、門の上には女神に乗った古代ローマの四頭立ての二輪馬車が飾られている。（上はブランデンブルグ門）

１９６１年8月１３日以降、２８年間も東西二つに分断したこの門は、壁や衛兵に阻まれて接近することさえ出来なかった。しかし１９８９年１１月の壁の廃止から、９０年１０月３日の国家統一へと進展し、今は自由に行き来できるのであった。

観光名所となった門の大通りには屋台が並び、観光記念に「壁のかけら」や写真などを売っていた。またブランデンブルグ門から少し離れた所に行くと、壁を乗り越えて越境を図り命を落とした人々の十字架が、フエンスに囲まれた中に寂しく立っていた。今となっては彼らの死が無念でならないと、外国人の我々さえも憐れみを感じるのであった。



「ブランデンブルグ」はベルリンの西方約８０kmの所にあり、プロイセン王国（プロシア）時代には王国の中核であった１州である。（王都はベルリン）（位置は右の地図参照）

プロイセン（プロシア・または普）は１３世紀までポーランドの支配下にあったが、１３世紀末にはドイツの騎士団が支配した。１５２５年にプロイセン公国が建設され、１７０１年には大選帝侯フリードリヒ３世がフリードリヒ１世として王位につき、プロイセン王国を建設した。

フリードリヒ１世及びフリードリヒ２世（大王と称す）の下に軍・官僚を基礎とする絶対主義国家が確立され、欧州の大強国に発展した。

ブランデンブルグ門が作られた時代（１７９１年完成）は、フランス文化の影響を脱してドイツ古典主義の誕生を告げる時代で、門は国民意識の高揚のための一つであったのである。

しかし第２次大戦後はポーランド領、ソ連領と新規のドイツの州に分割され、プロイセンの名称は過去の歴史となってしまった。

上記はベルリンがブランデンブルグ（のちプロイセン）の首都となった歴史の一端だが、当時、世界で最も美しい都市と言われたベルリンは、この門の他にローゼンタール門、インブルグ門、シュジエン門、ヒトブス門などがある城砦都市であったことは有名である。

ドイツ帝国はなお連邦体制を維持したものの、フロイセン王が世襲の皇帝として君臨し、ビスマルクが帝国の宰相に任ぜられたことが示すように、全くプロイセン主導の国家であった。

皇帝ウイルヘルム２世のもとで第１次大戦に突入したが、大戦末期に勃発したドイツ革命により、プロイセンにおけるホーエンツォレルン家（独の伯爵家）の支配は終わりを告げた。

１９１９年に結成されたドイツ国家社会主義（ナチス）は、ヴェルサイユ体制に対する国民の不満と中産階級の窮乏を利用して、国粋主義と擬似社会主義を掲げて人心を獲得し、ヒットラーの下で１９３３年に政権を掌握した。そして全体主義国家（第３帝国）をつくり第２次大戦に突入したのである。

１８０６年、ナポレオンはこのブランデンブルグ門からベルリンに入り、ナチス時代にはヒットラーがドイツ軍の行進を閲兵し、第２次大戦後は陸の孤島となってしまった。ベルリンの壁などと共に悲劇の時代を生き抜いてきたブランデンブルグ門は、これからは平和の門として発展することを祈願して、辞去したのであった。

バスは旧帝国議会議事堂や大統領官邸となっているベルヴェー城を眺め、黄金の女神が微笑む戦勝記念塔の広場で一時停車した。これは１８６４年デンマークに、１８

６６年オーストリア（普墺戦争）に、１８７１年フランス（普仏戦争、ビスマルクとナポレオンの戦い）に勝利した記念に建立したものであった。

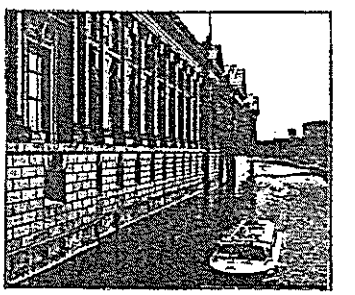
南に進んだバスは１９４５年、第２次大戦後のドイツ降伏後に発表した米・英・ソによる対日共同宣言、即ちポツダム宣言が出されたポツダム広場を通り、ここから一路ベルリン西南方約６０㎞のポツダム市へと快走した。（７頁地図の左下）

『ポツダム市の記事は後記する』

ポツダムからベルリンに戻ったバスはフリードリッヒ通りを北上し、フンボルト大学を見ながら東に向かった。この大学は言語学者で政治家でもあり、プロイセンの文部大臣として教育制度を改革したフンボルト（１７６７～１８３５）によって創設され、ドイツのアカデミズムの新しい中心となった大学である。（７頁地図中央）

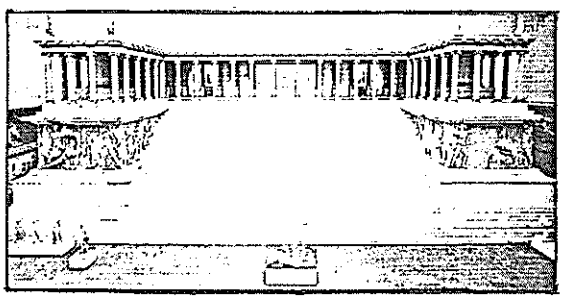
一行は各種の博物館が集まった「博物館島」と呼ばれるシュプレー川の中州に進み、遊覧船の往き交う運河に面したベルガモン博物館前で下車した。（７頁地図右上）

「ベルガモン博物館」



ベルガモンはヘレニズム期（アレクサンダー大王以後、ローマの地中海地域統一までの約３００年間）に栄えた都市で、ベルガモン王国の首都であった。ローマ支配下にも繁栄をつづけ、７１６年にアラブに破壊されてからは衰微の一途をたどった。

博物館島でも特に名高い考古学博物館であるベルガモン博物館は、トルコの小アジアにあるベルガモン遺跡を訪れた私にとっては懐かしく、丘の上に立った周囲を圧するような城砦遺跡が思い出されるのであった。（上の写真はベルガモン博物館と遊覧船）



訪れたベルガモンのゼウス大祭壇の基段の跡には、寂しく３本の松の木だけが遺り、過ぎ去った時間の長きを物語っていた。そして栄華を極めたベルガモンのアクロポリスは、ローマのアジア県の一部となった歴史が回顧されてきた。これがローマの世界進出を決定付けたのであった。

ゼウスの大祭壇の前半部はほぼ創建当初のまま、東ベルリンの博物館に収められていると現地のガイドから聞いた記憶が蘇り、胸の鼓動の高まりを覚えてきた。

館内に入ると紀元前１８０～１６０年に作られた古代ギリシアのベルガモン神殿が、広大な建物の中に再現されており、これに注視する私の眼は爛々として火を発するように燃えていた。（上の写真はベルガモンのゼウスの大祭壇の威容）

見る者に迫る柱廊で囲んだ祭壇の総延長は１２０ｍにも達し、その規模の壮大美麗は前代未聞でであった。胸壁に施された浮き彫り（レリーフ）群は神々と巨人族との戦闘を現わし、ベルガモンの支配者の神々に対する感謝と誇りを表現していた。

大祭壇を通り過ぎた部屋には、瀕死のガリア人や自殺をするガリア人などのローマ

時代の模像が立ち並んでいた。創意と工夫に満ちた館内を注意深く見て歩きながら、トルコのベルガモン遺跡の丘と重ね合わせ、栄華を極めた遠い古代都市を想像していたのであった。

博物館島にある４つの博物館の中で唯一戦争による破壊から免れ、貴重な作品を所蔵しているベルガモン博物館を去り、アレキサンダー広場へと進んだ。（７頁地図）
１８０５年、時のロシア皇帝アレキサンドル１世を記念して命名したこの広場は、旧東ベルリン地区随一の繁華街で都市交通の要衝でもある。しかし現在の日本以上に経済の低迷しているドイツは活気がなく、失業率世界一のベルリンの様相が窺えるのであった。
東欧紀行の第１日目の観光は以上で終了した。しかし陽は未だ高く、アレキサンダー広場に聳えるテレビ塔（３６５ｍ）に昇って市街を俯瞰する時間もあつたが、老齢と膝痛を考慮した私は独り個室に戻り、明日からの旅に備えて休養に努めたのである。

ポツダム（位置は８頁地図参照）

ポツダムはベルリン西南方約６０㎞のハーフェル川に臨む人口１０万の古都である。ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ・ウィルヘルムはここに兵営を置き、プロイセン国王フリードリヒ２世（大王）は離宮をかまえ、以後この町はプロイセン軍国主義の牙城となった。
１９３３年３月、ドイツ帝国の宰相となったばかりのヒットラーは、この町のガルニゾン教会で国会を開き、軍国主義の伝承を印象付けている。
第２次大戦中、爆撃によって破壊されたが、由緒ある建物の多くは戦禍を免れ、現在の市街は戦後に復興したものであった。
第２次大戦末期の連合国首脳の会談場所は当初ベルリンが挙げられた。しかしベルリン市街は徹底的に破壊されたため、米英ソはベルリンに近いポツダムのツェツィリエン邸で開催することに合意したのである。

「私とポツダム」

ポツダムという固有名詞を私が　初めて耳にしたのは、昭和２０年７月下旬、中部ビルマ（現ミャンマー）のシャン高原の古都・タウンギー（タウンジーとも発音）の南方約１０㎞付近の戦場であった。
昭和２０年５月下旬、米支連合軍（米と中国）と死闘を交えた中国・雲南省から、ビルマ東北部戦線に後退して激戦を続けていた私の指揮する歩兵大隊は、急遽タウンギー～ヘイホ飛行場方面に転進を命じられた。
その目的はインパール戦線から敗走中の第１５軍を収容し、且つビルマ方面軍のシッタン河及びサルウイン河の退却援護で、派遣軍の死活を制する重大任務であった。
優勢な航空機、戦車、火砲を擁す英印軍と我が大隊との戦力比は１００倍を超えていた。方面軍の渡河の時間的余裕を確保するために如何にして持久戦を敢行するか、

私の深謀遠慮の妙を発揮するところとなった。

徹底して我が方の損害を避けるため、敵に面した斜面の反対斜面に布陣し、或いは偽装陣地と複雑な地形を利用した挺身攻撃（ゲリラ）などが功を奏し、２ケ月近くも寡兵でもって大軍の英軍の猛攻を阻止して、その目的を達成することが出来た。

あらゆる詭計をこらして敵に痛打を浴びせた結果、師団長から賞詞を受領したばかりか、戦後の英軍戦史でも、私の卓越した戦闘指揮と将兵の勇猛果敢が絶賛を受けたのであった。

この方面の戦闘の末期、我が部隊の敵の意表をつく巧妙な不意急襲により、英軍の優秀な無線機を捕獲した。以後この無線機は大隊長専用として私は、毎夜７時から始まる流暢な日本語放送のデリー・ニュースを聞いていた。

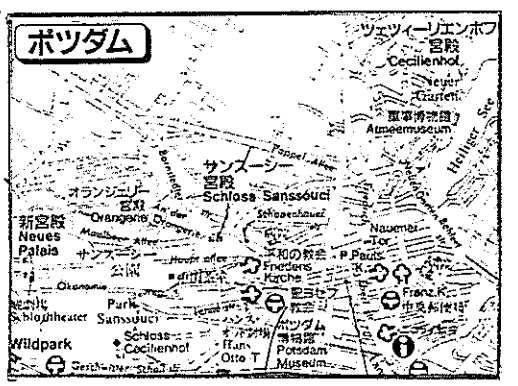
デリー・ニュースは連合軍が日本の各都市を爆撃する予告や、その成果を放送する他、我々に投降を勧告する宣伝放送が主であった。しかしながら７月下旬ころから「ポツダム宣言」の要旨が連日連夜、繰り返して放送し始めた。これが私とポツダムとの初めての出会いであった。

世界の情報から聾桟敷に置かれていた第一線部隊長の私が、初めて沖縄の玉砕や日本各地の被爆状況、そしてドイツの降伏を知ったのも捕獲無線機のデリー・ニュースからであった。

明治以来からの神州不滅の教育を叩き込まれた日本軍将兵は、弾丸雨飛の戦場でも対日降伏要求のポツダム宣言を信用する筈はない。デリー・ニュースを聞いた私だけの極秘として部下には絶対に秘し、後日の８月１６日に戦闘停止の命を受けるまでは、信じることは出来なかった。

正式に終戦の大命を受領したのは数日後のことで、天皇陛下の玉音放送を聞いたのは翌年復員してからである。そして祖国の土を踏んだものの私を待ち受けていたのは、昭和２１年１月４日にポツダム勅令として公布された、「公職追放」の占領軍指令であった。私にとってポツダムの名は因縁浅からぬものがある。

「サン・スーシー宮殿」（下図参照）



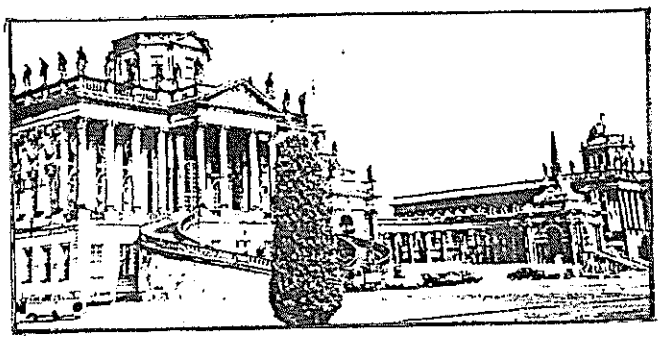
ベルリン市街を離れてアウトバンを疾走すること１時間足らず、バスはポツダム市内に入った。

森の都のポツダムは復興して戦争の傷跡は見えず、細長い形の市電が走る街道を進むと旧市庁舎やニコライ教会が見えていた。

プロイセンのフリードリヒ２世（大王）によって名付けられた「サン・スーシー」とは無憂宮、即ち「憂いのないくつろぎの舘」という意味で、バスは豊かな緑に囲まれた広大な公園の中に入って行った。（右上の地図の中央の左下一帯）

２９０ヘクタールにも及ぶ閑静な公園には２０に近い宮殿や劇場、美術館などの歴史的な建造物が点在し、我々は先ず公園の西にある「新宮殿」に案内された。

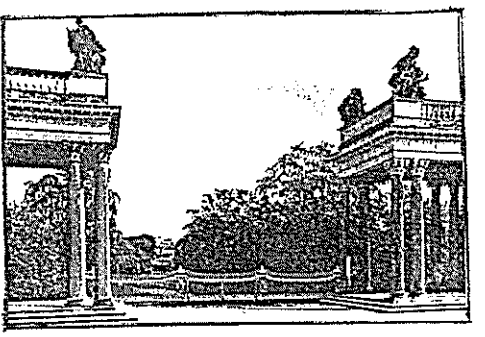
見る人を威圧するような豪華なバロック建築群が、威風堂々と道の両側に向い合って立ち並び、迫力に溢れた空間を展開していた。



（右は新宮殿の一部）

２１３ｍの長さをもつ新宮殿は、１７６３～６９年のわずか６年の歳月で造ったもので、３２２に及ぶ窓、２３０本の支柱、４２８の彫像はサン・スーシー随一の威容を誇り、その荘厳さは筆舌に尽くすことは出来ない。国王一家の起居したこの建物は、フリードリヒ大王の好みを反映した自然と調和する佇いのようであった。

時間の制限のある一行は新宮殿の外観だけを眺めて辞去し、造園施設の多種多様な園内の長い道路を走り、サン・スーシー宮殿に向かった。



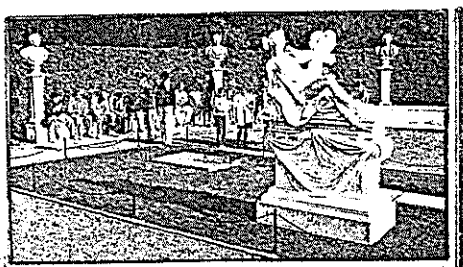
そこには半円形のエーレンホーフ（中庭の意）と、４２本の柱廊が歓迎アーチのように立っていた。（右はサン・スーシー宮殿の柱廊）

この宮殿は第２次シュレージェン戦争（オーストリア継承戦争中に普・墺間に行われたシュレージェン争奪戦）中に作ったもので、この緊張した時代に、矛盾に満ちた王はどのような憧れを抱いていたのだろうか。

大王は宮廷での雑事に煩わされることなく、自然を取り入れて芸術を享受し、哲学的な思索のできる場所を求めて建造したと言われている。だから目に映る各所に、王の好みの芸術作品や創作物が配置されていた。

長期にわたる戦争ですっかり国力を消耗し尽くしたからこそ、敢えてプロイセンの強大さを誇示するために、建造したようなものであった。

半環状の柱廊を前にした黄色い壁の宮殿を左に廻り、裏側に進むと景観は一変し、広々とした風光明媚な眺望が開けて、陽気で愉快な雰囲気を醸し出していた。



そのような庭園の一隅にフリードリヒ２世（大王）を祀る墓が安置されていた。

（上の写真の中央にある低い四角な石板が墓）

１９９１年８月１７日はフリードリヒ大王の没後２０５周年に当たり、紆余曲折を経た後、王の石棺は彼の遺言に従って、この日にサン・スーシーに埋

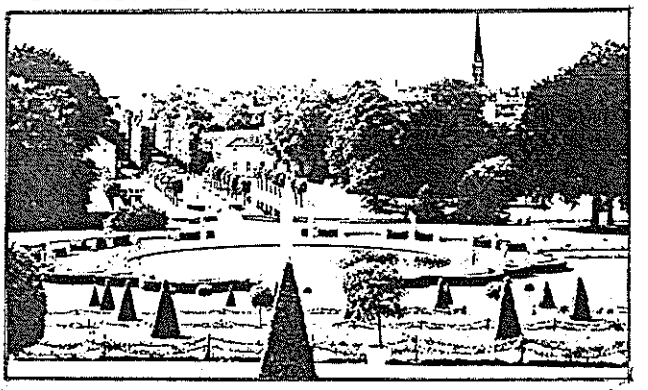
葬されたという。（前頁の下の右の写真はフリードリヒ大王の肖像画）

戦争の準備で忙殺されていた１７４４年、王がこよなく愛したサン・スーシーに礎石する前年、当時３２歳のフリードリヒ２世は自分のための墓を、この地ワインベルグ（ベルグは山の意）の段丘に造営した。

哲人王フリードリヒは熟慮の末に、平穏で思索を深めることができる恰好の場所として、この地を選らんだのであった。

美しい生け垣に囲まれた中にローマ皇帝の６つの胸像が飾られ、その中の芝生の横たわる上に置かれた白大理石の石棺は、全ヨーロッパに轟かせた哲人王のフリードリヒ２世を偲ばせていた。（前頁の下の左の写真参照）

石棺が安置された墓所には生前、彼が可愛がった犬の名前も刻み込まれている他、白大理石で出来た女神の像も見え、彼の最後の憩いの場らしい空気が漂っていた。



ヴェルサイユ宮殿を語るときにはルイ１４世を切り離せないのと同様、ポツダムを語るときには、ドイツの近代化を推進したフリードリヒ２世を切り離せないと思いながら、静かに丘の上を歩いた。

丘の下には王の夏の宮殿らしく天まで届く勢いの大噴水が設けられ、我々はその池に吸い込まれるように１３２段の丘の階段を下った。（右上の写真は噴水を中心にした庭園の景観、手前に宮殿の建物が建っている）

落下してくる水の流れを受け止める大理石の水盤のような池、その周りに古典神話をモデルにした各種の彫刻が並び、楕円形のベンチが巧みに配置されていた。

庭園の中心をなす円形花壇はギリシヤ神話の神々が集う場所として作られ、そこに立つ４つの大理石製の彫像は高さ１０ｍほどもあり、人々は思わず足を止めて勇壮な彫像に見惚れるのであった。

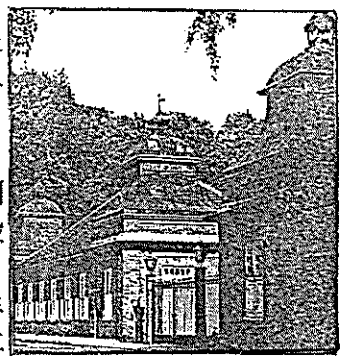
ヴェルサイユ宮殿を思わせる庭園の下から丘の上を見上げると、王の嗜好に沿って段々になっていて、各段丘には葡萄の木が植えられ、ワインベルク（葡萄の山）に相応しい景観を造り出していた。

文化の香りが高いサン・スーシー庭園を散策していると、美麗極まるサン・スーシーの虜になってしまうようで、「喜びの宮殿」として知られていることが理解できるのであった。

サン・スーシー宮殿内の見学に移ったが、大王の執務室がある他は、欧州各国の宮殿と同じであった。（右の写真は庭園の彫像の一つ）

「ツェツィリエンホフ宮殿」（１１頁地図の右上）

「金不換」と「まえがき」に書いたが、私にとつてツェツィリエンホフ宮殿は、我が人生を一変させた金に換えられない因縁の地と言わなければならず、今次紀行の最大の目的地であった。



サン・スーシー公園に対して「新庭園」と名付けられた園内に建つ宮殿は、ドイツ皇帝ウィルヘルム２世（オーエンツォレルン家の最後の人）の命により、１９１３～１９１７年にかけて建てられた。

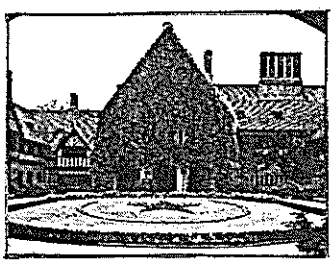
その時々の皇太子の住居、また帝国皇帝一家の狩猟用別荘として建てられた、オーエンツォレルン家の最後の宮殿建築である。

第１次大戦勃発の数ケ月前に着工されたが、１９１４年８月の大戦勃発と共に中断された。しかし１９１５年に再開され、１８０もの部屋のある宮殿は１９１７年に完成した。この宮殿は当時の皇太子妃の「ツェツィリエンホフ」の名にちなんで名付けられた。

戦争後の１９１８年１１月に皇帝は退位し、長男とともにドイツを去った。１９２３年の終わりに皇太子ウィルヘルムは帰国し、家族とともにこの宮殿に１９４５年の初めまで住んでいた。そして第２次大戦の終結直前に皇太子夫妻は逃亡した。

我々一行はサン・スーシー宮殿から閑静なハイリゲンゼー湖畔を通り、７５ヘクタールもある大庭園の中に建つ、ツェツィリエンホフ宮殿の前で下車した。豪華絢爛な宮殿を予想していたところ、案に相違してシンプルな外観であった。

（上の写真は新庭園の入口で、この中に米英ソ首脳が会議した宮殿がある）



ドイツの戦後処理とヨーロッパの再建の会議、それ以上に日本の全面降伏を要求するポツダム会談の場所だと思うと、自然に明治以来の軍の歴史が私の脳裏を駈け巡り、終戦前後のビルマの死闘が想い出されるのであった。（上は正面玄関で★の花壇がある）

「歳月は忘却の良薬」で、どのような苦しみも悲しみも嘆きも、時間の経過とともに風化すると言われている。しかし終戦時に私が風化させてはならないと決意したことは、亡き戦死した将兵のことを筆頭に、ポツダム宣言を受諾した時の落胆と、日本民族の盛衰に関わる戦争と平和の問題であった。（右上の写真は赤い星のマークの花壇と正面玄関を前にした感慨無量の私）

それが奇なる運命の縁によって今日まで生かされ、僥倖と偶然が重なり合い、今このツェツィリエンホフに足を踏み入れることになった。

先ず私の網膜に映ったのは、中央に赤い星のマークを設けた花壇であった。これは

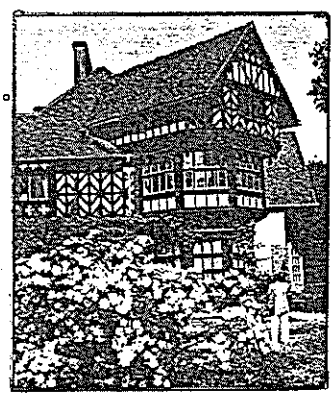
以前に交わされた手紙の中で、米英ソ首脳たちが邸宅の前庭の花壇に、ゼラニウムとバラで形作った星を置くことで意見が一致していたからであった。

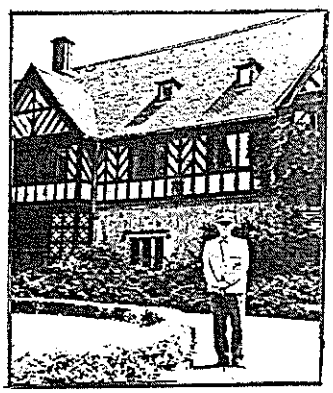
１９４５年の初夏、米英ソの反ヒットラー連合戦勝国は、チャーチル英首相の提案したドイツの未来と戦後処理、及び日本の全面降伏を要求する会談を開催することに合意した。

その前に既にルーズベルト、チャーチル、スターリンはテヘランで第１回会談、クリミア半島のヤルタで第２回会談が行い、米英ソは共同戦線を張っていた。

１９４５年４月２５日、エルベ河で米ソ両軍が出会い、４月３０日にベルリンが陥落、５月８日にドイツ軍は無条件降伏して、５年８ケ月と９日をついやした戦争は終わりを告げた。

米英ソの三国は会談地として最初ベルリンを選んだが、街が徹底的に破壊されたため、ベルリンに近いポツダムのツェツィリエンホフ邸で開催することに合意した。

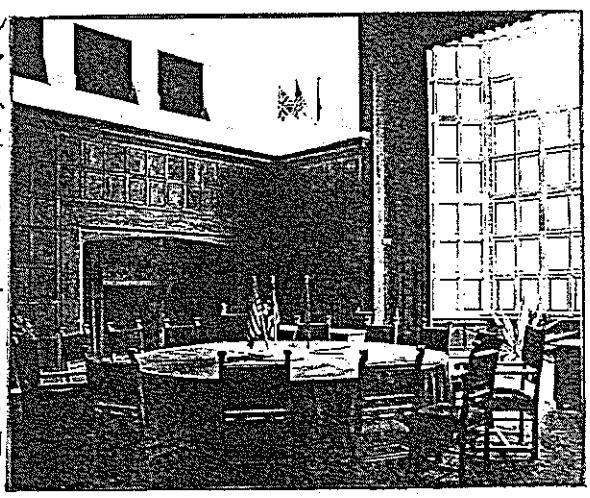




当時の状況を生き字引のように記憶している私は、興奮しながら蔦で覆われた玄関を通った。（前頁下の写真参照）

邸内は外観と違って木組模様が美しい、重量感の溢れる建物が軒を連ね、流石にオーエンツォレルン家の宮殿であった。

アメリカ大統領トルーマン、イギリス首相チャーチル、ソ連人民議会議長スターリンの三巨頭が会談したツェツィリエンホフ宮殿を背景にして、一行は思い思いの感懐を抱いてシャッターを切った。（上は花の咲き乱れる宮殿と、宮殿を背景にした私）



１９４５年４月１２日のルーズベルト米大統領の死後、６１歳のトルーマンが大統領に就任し、外相バイルネスらの側近と共に７月１５日、この邸に到着した。

スターリンも当時３６歳の外相モロトフらを帯同して７月１６日に到着。

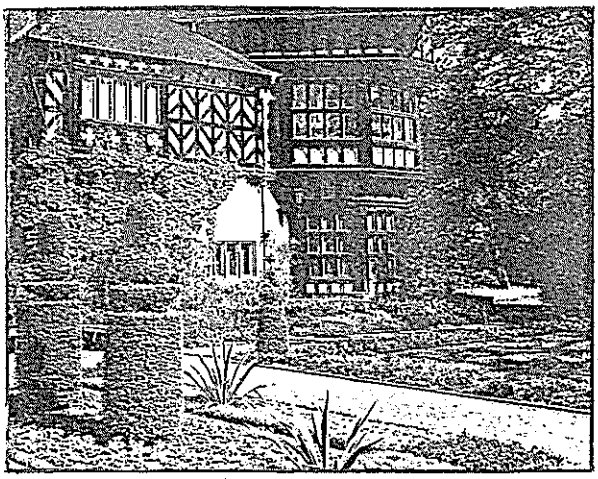
７０歳のチャーチルはトレードマークの葉巻をくわえ、野党党首のアトリーを連れて７月１６日に到着した。これは「英国の政策は完全に継続されるという保証」のためであった。（英国は政権交替でアトリーが代表となる）

我々は先ず日本の運命を決定したばかりでなく、私自身の人生まで変えてしまった歴史的な会議場に導かれた。（上の写真が三巨頭会談の場所で国旗が見える）

ここは邸内の代表的なホールで、１９４５年７月１７日から８月２日まで会談が開

かれ、当時は公式に「ベルリン三大国会談」と名付けられ、後に「ポツダム会談」と歴史に記載された場所であった。

（右は会談場所の外観風景）



円いテーブルはモスクワで作られた直径３、０５ｍ、テーブルの周りの樫の椅子は１９００年のオランダ新バロック調のもの、金箔の天使の頭のついた肘掛椅子は代表団の団長用、他のすべての椅子はベルリンのオランダ宮殿のものであった。

テーブルの上に置かれた米英ソの国旗に沿って、三国の代表団が座った。中央の肘掛椅子には会議議長の米大統領・トルーマンと米国代表団、右側にスターリンとソ連代表団、左側にチャヘチルと英国代表団（のちアトリーと交替）が着席した。（前頁の下の写真参照）

米英ソ三国巨頭会談で決定された内容は、中華民国総統の蔣介石の同意を得て、１９４５年７月２６日に米英中三国首脳の名で共同宣言が発表された。

しかしこの時、スターリンはヨーロッパ戦争終了の３ケ月後に、ソ連が日本に対し参戦することに同意させている。ソ連は日ソ中立条約が有効期間中であったために署名せず、４５年８月８日の対日戦線布告ののち、このポツダム宣言に署名した。（誠に老獪と言わなければならない）

連合国首脳が太平洋戦争の終結条件と、戦後の対日処理方針を決定したポツダム宣言の大要は、次の通りであった。

①日本軍国主義の駆逐および軍国主義指導者の権力と勢力の永久除去
（これに私のような現役将校が該当したのであろうか）

②平和、安全、正義の新秩序が建設されるまで連合国による日本占領

③日本国の主権は本州、北海道、九州、四国および連合国が決定する諸小島

④日本国軍隊の完全武装解除と兵士の復員（ソ連のシベリア抑留は宣言を無視）

⑤戦争犯罪人の処罰と日本国内における言論、宗教、思想の自由および基本的人権の尊重

⑥軍需生産の禁止

⑦前記の諸目的が達成され、日本国民の自由意思による平和的政府が樹立された後における占領軍の撤退

⑧日本国軍隊の無条件降伏

７月２８日、当時の首相の鈴木貫太郎は主戦派の圧力に屈し、ポツダム宣言を黙殺すると言明した。（宣言文にソ連の名がないことを頼りに、なおソ連に停戦の斡旋を期待したのであろうか）

その後、８月６日に広島、８月９日に長崎に原子爆弾が投下され、８月８日のソ連の参戦を経たのち、８月１４日、日本は御前会議における天皇の聖断によってポツダム宣言の受諾を決定した。これらは日本国民の熟知するところである。

私の心に強く刻まれていたポツダム、私の頭の中を占め、私の思いを奪っていたポツダムの会議場を前にすると、中部ビルマ戦線で捕獲した英軍無線機でポツダム宣言を聞いていた、純真無垢な青年将校時代が懐かしく想い出される。

今まで思っても見ないことだったが、自分が生きていたと云う実感が込み上げてくると同時に、時の流れに身を任せて生きてきた老人にも、精神的に実りの多い時があったのだと感慨無量であった。

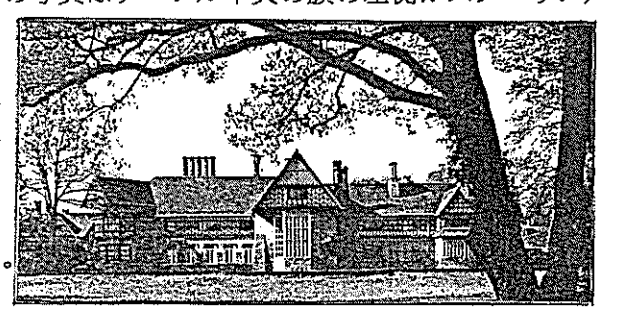
若いとき万里の道を疾走したいと思っていた名馬が、年老いて馬小屋につながれてもなお往時の草を思うのと同様に、４９年前に我が国が受けた開闢以来の屈辱は、忘却の彼方へ追いやることはできない。それに又、満身創痍となって死を賭けて戦ったことが、昨日のように思われるのであった。

日本の運命を決定した会議場を目捷の間に見つめながら、邸内をさらに奥へ奥へと進んだ。このツェツィリエンホフの記念館と云うべき建物は、どこまでも昔のままの形で遺されていた。

アメリカ代表団の執務室はかっての喫煙室兼居間が使用され、ソ連代表団の執務室は赤いサロンとともに皇太子妃の書斎であった。

しかし、これらの歴史的遺産以外の他の宮殿建物は、現在高級ホテルとして使用されており、静かな湖畔に臨んだ宮殿の参観は約１時間弱で終わった。

（上の写真は左よりチャーチル、ルーズベルト、スターリン。中の写真は左よりスターリン、トルーマン、チャーチル。下の写真はテーブル中央の旗の左側がスターリン）



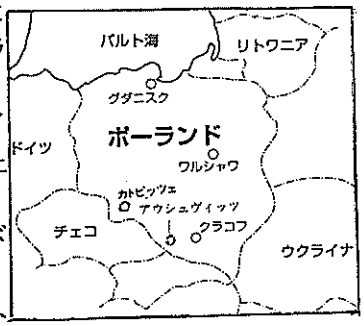
歴史的な記念館のツェツィリエンホフ邸を辞したバスの中で、ポツダム宣言に述べている彼らの正義も万有流転の鉄則に従い、常に一定ではないと考えながら、更に我が国民の自虐思想の蔓延を憂い、我が国にのみに戦争責任があるという思想に憤りを感じていた。

（右は裏側より見た会議場の建物）

7月7日　（木）晴　ポーランドへ（下図参照）

８時にベルリンの空港を舞い上がった搭乗機は、延々と続いている黄金色の麦畑を下に見て、１時間後にはポーランドの首都・ワルシャワ空港に着いていた。

地上に降り立つと、昭和１４年９月１日、ナチス・ドイツ軍のポーランド進攻によって第２次世界大戦が開幕したことが、昨日のことのように想い出されるのであった。



現在、九州・四国を除いた日本の面積ほどのポーランドは、人口約３８３０万、ワルシャワの人口は１６７万で、ローマ法王ヨハネ・パウロ２世の出身地だけあって、カトリック教徒は人口の９７％を占めていると言われている。（上はポーランドの位置図）

ポーランドの９０％以上は海抜３００ｍ以下の平地で、地形的に自然の障壁がない。だからそれが原因となって、悲劇的な歴史を経験することになったのであろう。

東と西の強大な国にはさまれたポーランドは興亡を繰り返し、その複雑怪奇な歴史を理解するのは容易ではない。

１５、６世紀にはポーランドは隣国のリトワニアとの連合王国をつくり、ヨーロッパ北辺の一大勢力にのしあがった。「黄金のポーランド」と呼ばれたこの時代の版図はバルト海から黒海、アドリア海にまで及び、豊かな穀倉地帯はヨーロッパの食料倉庫であった。

しかし１７世紀に入ると、東からピョートル大帝の率いるロシアがバルト海への野心を現わし始めた。広大な陸の大国のロシアにとって、海への出口の獲得は不可欠であったからである。

更に西には新興の強大国のプロイセン、南にはハプスブルク家のオーストリア帝国が虎視眈眈とうかがい、１８世紀には周辺勢力は遂にポーランドの地を引き裂いた。

しかし私の知っている歴史は１８世紀後半の３回に及ぶ分割と外国干渉からである。（１７７２年、９３年、９５年の３回にわたってロシア、プロイセン、オーストリアが行ったポーランドの分割）

第１次大戦後のヴェルサイユ条約で漸くポーランドは独立を果たしたが、それも束の間のことで、第２次大戦ではナチス・ドイツに占領され、戦後は東部をソ連に割譲して強制的に社会主義の国家へと進むことになった。

１９８９年の東西冷戦構造の崩壊後は、一労働運動家だった自由管理労組「連帯」のワレサ議長が大統領の地位につき、西ヨーロッパ諸国に最も重視され優遇される国となったのである。

日本との関係では古くは、フビライ・ハンが北条時宗にあてた国書の中に、ポーランド征服について触れた箇所があったという記録があり、ポーランド人宣教師「メンチンスキ」が長崎で殉教している。しかしこれらは殆ど意味を持たないことである。

日本人にとってポーランドが意味をもつ国として登場してくるのは、明治維新以後のことで、何よりもポーランドは他山の石とすべき国だと考えられたのである。

それは福島正安中佐（後の大将）のユーラシア大陸単独横断をたたえて、落合直文

が作った長編詩「騎馬旅行」（１８９３年）の一部、「波蘭（ポーランド）懐古」（のちに軍歌として愛唱される）に、それを窺うことが出来る。

明治２６年２月１１日、ベルリン公使館附武官の任を終わった福島中佐は、単騎で当時の未開のシベリア大陸を横断し、途次、蒙古～満州まで踏査してウラジオストックに出て、６月２９日に東京に帰還した。

この大壮図を全国民あげて熱狂して迎えた絶賛の歌は、私が陸軍士官学校在校時代に熱唱したものである。この歌詞を見れば当時の荒廃したポーランドが想像されるだろう。そのために歌詞を下記する。

『波蘭懐古』

①一日二日は晴れたれど　三日四日五日は雨に風　路の悪しさに乗る駒も踏み煩いぬ野路山路

②雪こそ降らぬ冴えかえる　嵐や如何に寒からん　氷こそ張れ、このあした霜こそ置けれ、この夕

③ドイツの国を行き過ぎて　ロシアの境に入りにしが　寒さは、いよよ勝りつつ降らぬ日もなし雪あられ

④淋しき里に出でたれば　ここは、何処と尋ねしに　聞くも哀れや、その昔亡ぼされたるポーランド

⑤かしこに見ゆる城の跡　ここに残れる石の垣　照らす夕日は色寒く飛ぶも淋しや鵠鴣（シャコ）の影

⑥栄枯盛衰、世の習い　そのことわりは知れれども　かくまで荒るるものとかは誰か知らん夢にだも

⑦存亡興廃、世の習い　その理（コトワリ）を疑わん　人は一たび来ても見よあわれ果敢（ハカ）なき、このところ

⑧咲きて栄えし古の　色よ匂いよ、今いずこ　花の都の、その春もまこと一時の夢にして

ワルシャワ市内観光

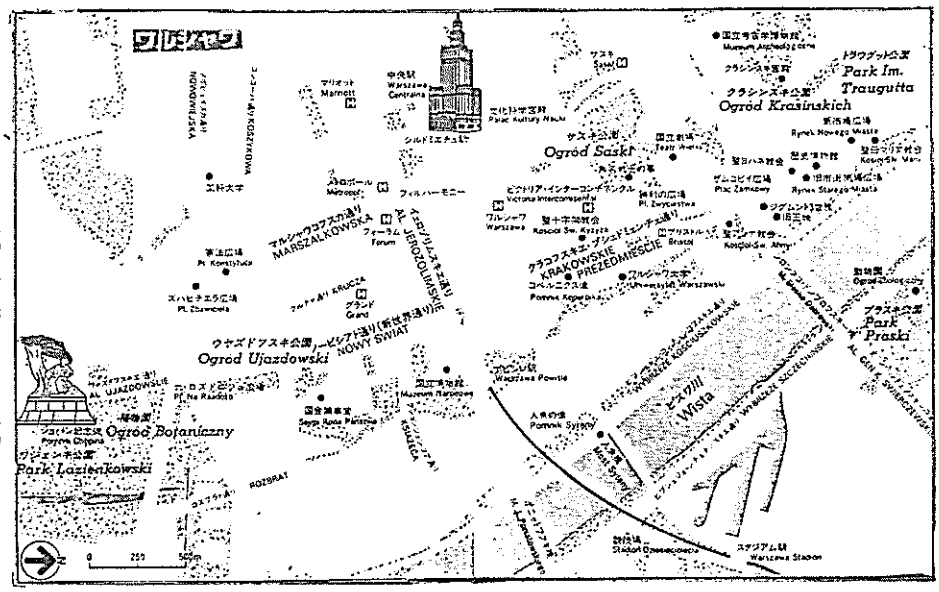
数年前、連帯の委員長から大統領になったワレサ氏が連日のニースに大きく報道されたポーランドは、その後、東欧、旧ソ連が激動する中で今は如何なっているのかと、空港からドイツに通じる街道を快走するバスの中から注目していた。

ロシアのように物不足のために行列をつくる光景はなく、第２次大戦で市街の８０％まで壊滅したワルシャワは完全に復興し、「北のパリ」と呼ばれた昔の姿を再現していた。

不死鳥のような民族意識と愛国心の旺盛なポーランド人は、古い写真や絵、地図を頼りにして煉瓦や壁石の一つ一つ、壁のひび割れ一本に至るまで正確に再現し、戦前の街の姿に復元したのであった。

配布された一枚の市街図を広げて見ると、わずかに蛇行しながら南東から流れ込むヴィスワ川が地図を斜めに横ぎり、北西の方に流れている。一行の乗車したバスは廃虚から蘇った市街地に向い、広大な森の中に入って停車した。

「ワジェンスキ公園」

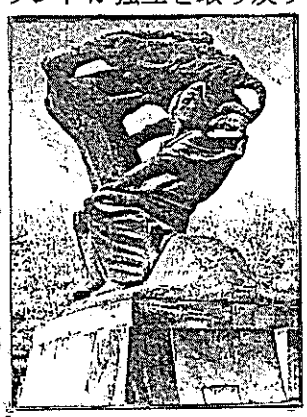


停車した所がワジェンスキ公園で、１６００年、ヴァザ王が郊外の住居として狩場を庭園にし、その中に城を建造したことに始まったと言われている。（上の地図の左下にあるのがワジェンスキ公園）

しかし城は１６５６年、スエーデン軍によって内部が破壊され、ポーランド最後の王だったボニャトフスキに買い取られた。当時は二つの建物があり、その一つが池の中央の小島に建った岩屋式浴室の舘であった。これがワジェンスキ（浴場の意）公園という名称の由来である。

ポーランドがロシア、オーストリア、プロイセンに分割されてゆくのを、押し留めることが出来なかった最後の王は政治の世界から逃れるように、ワジェンスキ公園の宮殿や劇場の建造に熱中した。

王の死後、ロシア皇帝に売却されたが、１９１８年にポーランドが独立を取り戻すと、国有財産となった。



園内に進むと鬱蒼とした森の一隅が広闊として開け、バラの花が一面に咲き乱れてベンチも整然と並んでいた。奥まったところにあった円形の池は赤いバラを映し、その向こうに「ショパン」の巨像が立っていた。（右はショパンの像）

ポーランドの生んだ偉大な作曲家のフレデリック・ショパンは、１８１０年、フランス人の父とポーランド人の母との間にワルシャワ郊外で生まれた。

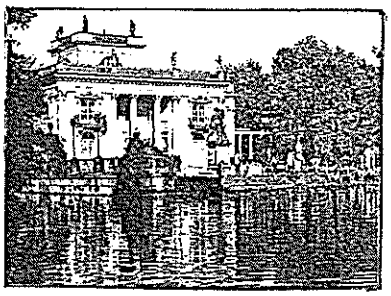
ロシア支配に対する蜂起、ワルシャワの陥落、国家の消滅など、時代に翻弄される祖国を異国の地で見つめなければならなかった彼は、後悔と孤独の中で数々の名曲を作り出した。

メロディーのすべてがポーランドへの夢であったという彼の像は、柳の木もピアノに見えると言われているが、私にも彼の心が見えるような気がしていた。（上の像の曲がった木は柳の木を現わしている）

夏の日曜日の正午から、この像のもとでショパンコンサートが開かれる光景を想像

しながら、公園の中を先へと進んだ。

このワジェンスキ公園には１２の宮殿と、イギリス式やフランス式、ギリシヤ式などの庭園があり、一行はフランス式庭園の中に建っていたゲストハウスを眺め、王の離宮であったワジェンキ宮殿の前に出た。

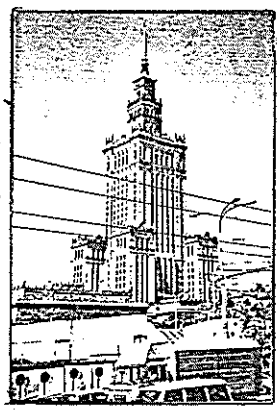


この宮殿はイギリス式庭園の中に建ち、公式用に使用されていた関係から他の宮殿よりも大きく、宮殿の前には美麗な湖水が広がっていた。水鳥の戯れる水面は優雅な宮殿の影を写し出し、「水上宮殿」と呼ばれている。

ナチス・ドイツの占領時代に宮殿の美術品がドイツ人に持ち去られ、１９４４年には火を放たれて内部は完全に破壊されてしまった。（右上の写真は水上宮殿と呼ばれるワジェンキ宮殿と湖）

しかしこの水上宮殿も美術家や学者の努力によって原形に復元されたのである。歴史を刻んだ文化遺産を昔の姿に再現しようとするポーランド人に、国家の滅亡と外国の占領によって培われた、執念のようなものを感じるのであった。

「市の中心街と王の道」



ワジェンスキ公園から西北に伸びる王の道と呼ばれる通りは市の中心街であった。走行する車は閑散として小型車が目立ち、ロシア式の四角い共産党本部の建物は、時代が移り変わって現在は証券取引所となっていた。

そこを過ぎると、モスクワ大学を思わせる高さ２３４ｍのビルが天空に聳え、３２８９の部屋のあるこの建物はスターリンが寄贈した文化科学宮殿であった。（右は文化科学宮殿）

破壊されて昔の面影を全く留めない文化科学宮殿の周辺は、ワルシャワ・ゲット（ゲットはユダヤ人居住街のこと）であった。３５万人を超えるユダヤ人がゲットにいたと推定され、食料の配給はポーランド人の半分、ドイツ人の４分の１だったと言われている。

ユダヤ人問題の最終的な解決を実行に移したナチス・ドイツは、１９４２年７月２０日から、１ケ月に４５００人の割合でユダヤ人を収容所に送り始めた。

明日、訪れる予定のアウシュヴィッツなどの殺人的な収容所が、ポーランド各地に作られて、銃殺、毒殺などの殺人手段が研究され、ついにチクロン・ガスによる大量殺人方法が編み出されたのであった。

収容所に送られたユダヤ人は労働に使用可能な者、医学実験用などを除いて老人、女性、子供は直ちに殺され、金歯は剥ぎ取られ、髪の毛は毛布に、骨は肥料の原料として扱われた。

１９４３年４月、ワルシャワ・ゲットの生存者が出頭を命じられた時、ユダヤ人はこれを拒否した。するとドイツの警察と親衛隊がゲットを襲撃し、ゲットの抵抗が止んだのは５月末のことであったと言われている。

２万人ほどの生存者は死の収容所に送られ、ユダヤ人は凡てワルシャワから撤収された。ぎっしり家屋が建ち並んでいたゲットもまた徹底的に破壊され、だだっぴろい平地となってしまった。

現在は大住宅団地が建設され、ゲット蜂起の記念碑とユダヤ人墓地があると言われているが、我々はそれらを見学する機会は残念ながら与えられなかった。

王の道の街道に建ちならぶ官庁、大学、劇場、博物館、デパートなどを眺め、サスキ公園（２０頁地図の中央やや右上）に向かった所で、バスは警察官に停車を命じられた。

これはナポリ・サミットに出席するクリントン米大統領がワルシャワを訪れ、サスキ公園内にある無名戦士の墓に参拝するためで、我々は丁度その時間に出会したのである。

クリントンの車が目前を通過して交通遮断が約２０分で解除されると、バスはサスキ公園の裏手にある聖十字架教会の前で停った。ここはショパンの心臓が教会の柱に納められていることで有名であった。

教会の前には十字架を背負った銅像が立っていたが、よく注意して眺めると像の台座には無数の弾痕が見えていた。このように悲しい時代の犠牲になって一度は死んだ街も、市民の記憶や戦前の写真等によって傷跡の一つまでも復元したのであった。（右は弾痕が見える十字架の台座）

祖国愛に燃えるポーランド人の情熱に感激しながら、ショパン縁の教会の見学に移った。ピアノを通して祖国への愛と悲しみを語ったショパンの調べは、聖十字架教会を通じて何時までもあの想いを起こさせ、今を忘れさせるようであった。

教会を辞去したバスは再びサスキ公園に戻った。広大な公園の奥には数々の戦争で犠牲となった人々の霊を祀る無名戦士の墓があり、毎日、１２時に衛兵交替が行われていた。我々はその光景を拝観する丁度よい時間に訪れたのである。

爛々と目を輝かして三角の軍帽をかぶった３名の兵士は、軍靴の音を響かせながら整然と墓前に進み、煌々として燃えつづける墓に祈りを捧げて交替していた。（右は無名戦士の墓と衛兵）

これは世界中のどの国でも見馴れた光景だが、日本では全く見られないことは残念でならない。慰霊の精神は理屈抜きの問題で、国家のために身命を賭して犠牲になった霊を敬わない国民は、必ず滅びると言わなければならない。

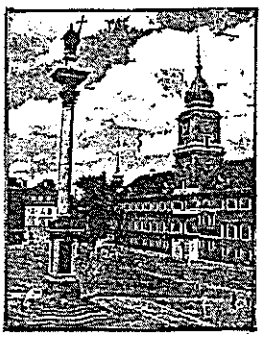
無名戦士の墓を祀ったサスキ公園の東側に勝利の広場が続いていた。この広場はいろいろな政治的デモンストレーションの舞台となった所で、軍を背景にして政権を掌握したヤルゼンスキや、連帯のワレサ議長（現大統領）の姿が瞼に浮かんできた。

「旧市街」（２０頁地図の右側上部一帯）

サスキ公園や勝利の広場から道路２本へだてた北側一帯が旧市街となつており、車窓から屹立した教会の尖塔や赤い屋根の光景が見え出して、恰も中世を思わせる景観を呈してきた。これがワルシャワの発祥の地で、スタレ・ミアスタと呼ばれるところであった。

旧市街市場広場に立つ聖ヨハネ教会が創建されたのは１３世紀から１４世紀にかけ

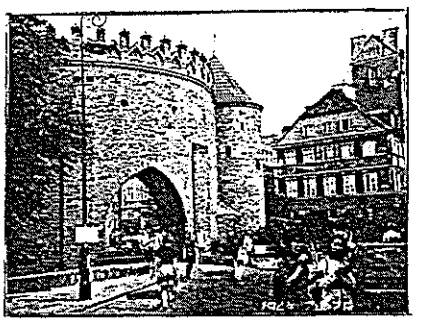
てだと言われ、１４世紀半ばから初め木造であった建物が、石や煉瓦の建物に変わっていったと伝えられている。



ワルシャワが本格的に発展し始めるのは１５９５年で、スエーデン王家からポーランド王に選ばれたジグムント３世ヴァザが、クラフクの町からワルシャワに遷都を開始した時からであった。

１６１９年に王城が完成し、以来１７９５年のポーランド国家の没落まで王の居城となり、議会も亦ここで開かれた。

旧王城前の広場には、王冠をかぶって刀と十字架を手にした高さ３ｍほどのジグムント王の像が、２０ｍもあろうかと思われる台座と円柱の上に聳えていた。（右上の写真は円柱上の王の像と王城の景観）



１６４４年に建立されたワルシャワの古い記念塔は、１９４４年のワルシャワ蜂起のときのドイツ軍との戦闘で倒壊し、戦後になって再建されたという歴史がある。

すでに１９３９年の空襲によって一部焼失していた王城もすっかり焼け落ち、今我々が目にする典雅な姿は戦後の７０年代になってからで、世界中の人々からの基金で再建されたものであった。

現在は首都としてポーランドの政治・経済・文化の中心地だが、歴史を振り返ってみると、その当初から「痛みと誉れ」を書いた忘備録のような運命を背負わされたと言えるだろう。

〔右上の写真は王城から伸びるバルバカン（煉瓦造りの頑強な馬蹄型の要塞）〕

旧王城前に拡がる「旧市街広場」もドイツ軍によって破壊されたが復元され、城壁の中では中世さながらの面影を色濃く残す、ワルシャワで最も美しい景観を呈していた。

広場には喫茶店、レストランや御土産品店が軒を連ね、観光客を相手にした似顔絵を描く画家の姿も見えていた。

しかし新聞報道によると、最近マフィアが横行して武装兵が巡回しているということだったが、我々が訪れた時は平穏で平和な広場であった。（上の写真は旧市街広場の景観）

広場の一角に歴史博物館もあり、１時間の自由時間を利用して単独で見学に入った。中にはワルシャワの誕生から現在に至る歴史が、絵画や写真、模型などで展示され、言葉が通じない私でも理解することが出来た。

廃虚という言葉がこれほど相応しい街はないと思うほど、果てしなく続く崩れ落ちた建物や瓦礫の山の写真に驚きの眼を向けつづけた。ここは１９４４年、ナチス・ドイツ占領軍に対して立ち上がった「ワルシャワ蜂起」の拠点の一つだったのである。

１９４４年８月１日、亡命政府はドイツ軍に対する武装蜂起を指令した。このワルシャワ蜂起も６３日間の戦闘ののち１０月２日に力尽きて降伏し、死者２０万という

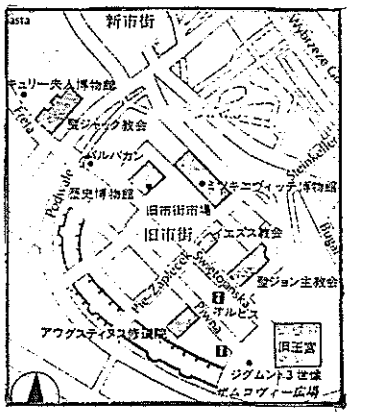
犠牲を出して町は徹底的に破壊された。

王城やジグムント王の像だけではなく、目に見える旧市街全体が戦後に再建されたもので、ポーランド人は瓦礫の山の上に旧市街を復元したのであった。

彼等は近代的なビルや広い道路ではなく、狭苦しい石畳の道路と昔ながらの街並みを、写真や絵と人々の記憶にもとずき再現する方を選らんだのである。誠に感服の至りであった。

「新市街」（右下の地図と、２０頁地図の右上参照）

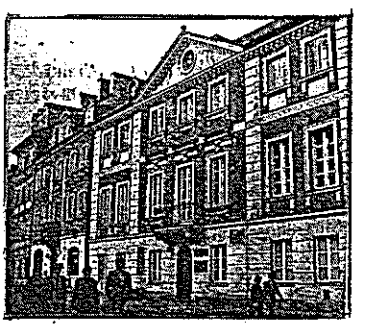
旧市街を守る煉瓦造りのバルバカン（前頁参照）の要塞をくぐると、そこは新市街であった。新市街というと近代的なビルが立ち並ぶ町を想像しがちだが、この新市街はあくまでも中世の呼び名である。即ち城壁の外側にできた街をこのように呼んだのであった。



バルバカンを出たところにノーベル物理学賞、ノーベル化学賞を受賞したキューリ夫人の生家が建っていた。（位置は右の地図の左上）

キューリ夫人の生家の少し先が新市街広場で、クラシンスキ公園とつづいている。この公園で行われた「ワルシャワ蜂起５０周年式典」で、ドイツのヘルツォーク大統領は、第２次大戦でドイツがポーランドに対して加えた残虐行為を謝罪している。

これに対してワレサ大統領は、「我々はワルシャワの殺人者の罪を許しはしないが、この気持をドイツ国民に移し替えることはない。我々はあなたたちと友好的に暮らすことを望んでいる」と述べ、過去の憎しみを捨てるよう訴えた。



村山首相がマレーシアを訪問したとき、マハティール・モハマド首相は、「日本が５０年も前に起きたことを謝り続けることは理解できない。過去は教訓とすべきだが、現在から更に将来に向かって歩むべきだ」と指摘した。

（上はキューリ夫人の生家）

これらのことを思うと、韓国や中国の日本に対する態度は大人気なく、何時までも過去に恨みを持ち続けることは、日本人に反感情を起こさすものと断言しておきたい。

「人魚の像」（２０頁地図の中央下）

新市街を去ったバスはヴィスワ河に沿って南下し、河川敷に下って進むとそこに勇ましく剣を振りかざした「人魚の像」がぽつんと立っていた。（右は人魚の像）

１９３９年に立てられたこの人魚の像のモデルになった若い女性は、ワルシャワ蜂起の第１日目に戦死した看護兵であった。彼女は「さあ若者よ、銃に剣をつけよ」と言ったバルチザン歌の作者でもあった。

ワルシャワの紋章は昔から剣と盾を持った人魚で、外国の侵略に抵抗してきた歴史を物語っていた。

古都クラコフへ（位置は１８頁地図参照）

ワルシャワの観光は終った。私が今まで想像していたワルシャワのイメージは一昔前のもので、現在のワルシャワからは新しい時代を築く足音が聞こえてくるような感じを強く受けたのであった。

ワルシャワは死んだと言われるほど都市の８０％は灰燼に帰し、８５万人の人命が失われた。しかし偉大なる市民は絶望的な状況に追い込まれると、民族の不屈の精神を新ためて認識し、奮い起ったのである。

人それぞれの感想を抱いてワルシャワ発１６：４０の列車に乗車し、ポーランドの古都クラコフに向かった。車窓からワルシャワの町を振り返って眺めると、ヴィスワ河中流の農業地域にあるこの都市は、経済的には後進地域の真中にある島のような感じがしていた。

平均高度が海抜１７３ｍという大平野が延々とつづき、農業に恵まれた穀倉地帯は黄金色の麦畑が絨毯のように敷き詰められていた。ポーランドの語源の「ポール」はスラブ語で「平原」を意味し、そのことがよく理解できるのであった。

これから訪れるクラコフは、１４世紀から３００年にわたってポーランドの首都として栄え、第２次対戦中にも戦禍を免れたため、古い文化遺産を多く遺している歴史的な都市である。

古い歴史をたどると８～９世紀にはスラブ族が集落を形成し、古代ロシアとの結び付きを強めるとクラコフの重要性が高まり、首都的な地位が確立していった。

クラコフが現在のような形に整えるのは、３回にも及ぶモンゴル軍の襲来（１３世紀中ごろ）後に始まった。そして１４～１５世紀に最盛期を迎え、ヤギエウォ大学の創設、織物館やマリア教会、バルバカン要塞の建設などが行われた。

１６世紀に入ってポーランドがリトアニア（１８頁気地図参照）との結び付きを強めると、首都の地位はワルシャワに移るようになり、１６１１年にジグムント１世によって正式に遷都が実現した。こうしてクラコフは衰退期を迎えることになった。特に大打撃となったのは１７世紀中ごろの対スウェーデン戦争と、１８世紀初めの北方戦争による戦禍であった。

１８世紀末のオーストリア、ドイツ、ロシアの３国によるポーランド分割により、クラコフはオーストリア領となったが、１８６６年の普墺戦争でオーストリアが敗北すると、ポーランド化が認められるようになり、クラコフは全ポーランドの知的な中心として栄えることになった。

日本の京都のような歴史を持つクラコフは、ワルシャワの南方約２５０㎞の位置にあるポーランド第３の都市で、素朴な景色を眺める３時間の列車の旅を終えた一行は、１９：３５にクラコフ駅に到着した。

駅前一帯は戦災を免れた古都らしく、鬱蒼とした茂みの中に古い建物が並んでいたが、薄汚い露天商の並ぶ光景は観光都市には不似合いな感じであった。

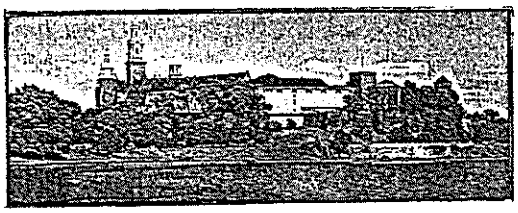
バスがおんぼろタクシーの走る市街の中を進んで行くと、そこにコペルニスクが学んだヤギエウォ大学が見えてきた。天文学者でイタリアに遊学して神学・医学・数学を学び、地動説で従来のキリスト教的宇宙観を覆した彼が偲ばれるのであった。

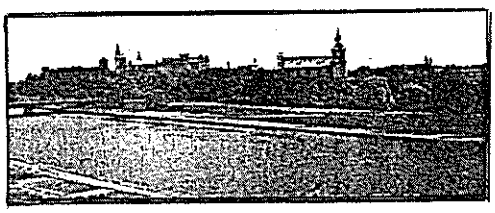
中世さながらの古都は交易都市として栄えたことを物語り、大きな広場の周りには

放射線状に道路が伸び、ルネッサンス、バロック、古典主義様式のポーチを備えた貴族や豪商の舘が並んでいる。

京都、奈良のような魅力的な古都の街は大戦中、この町に対するモスコワからの爆撃命令を中止した旧ソ連の司令官は、今もクラコフばかりでなく全ポーランド人の尊敬する、唯一のロシア人だと言われている。

小さな町の通過には余り時間はかからず、中世の都市を包み込むように大きく蛇行するヴィスワ河畔にある丘に、ヴァヴェル城の壮麗な姿が見えてきた。



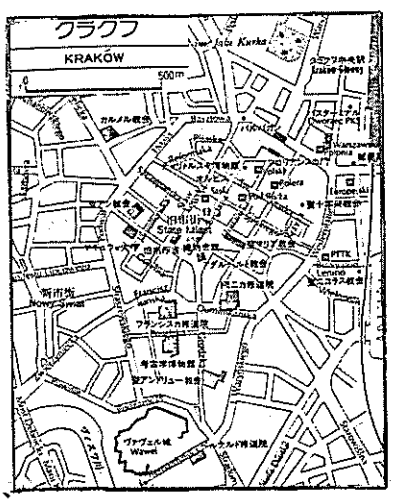


宿泊することになったフォーラム・ホテルの私の部屋から、郷愁をそそるような古都の全景が展望され、旅好きな私のクラコフへの興味が一段と高くなったのである。
（上の写真はヴァヴェル城の全景）

7月8日　（金）晴　クラコフ市内観光

「ヴァヴェル城」

ユネコスの歴史保存都市に指定され中世の姿を遺す古都クラクフの観光は、ヴィスワ川に影を落とす王城のヴァヴェル城の見学から始まった。



歴代の王たちの栄華の象徴ともいうべき城は、その時そのものには内容はないが、時の経過の中で王が如何に生きたかが問題だと、ヴィスワ川を眺めながら市の南へとバスは進んだ。

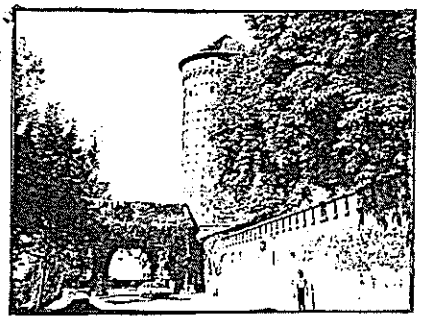
市内の至る所が修羅場と化して凄惨を極め、殷々とした砲声が鳴り響いたワルシャワと違い、目に映る古めかしい都は何となく、私の心に休息を与えるような感じである。

ヴィスワ川の淵に立つ、赤煉瓦の堂々とした城壁のある丘の麓で下車し、なだらかな坂道を登っていくと、左側の崖下に龍の像が立っていた。そして像の傍らの洞窟は城の丘の中に通じていた。

その昔、村の美しい娘たちを食べていた龍がヴァヴェルに棲息し、龍を退治したという伝説上の人物がクラク公であった。（右は龍の像）

クラコフの名の由来はこの伝説によるもので、明君をたたえる昔話は、何処の国でも天下太平につながったと思うと面白い。

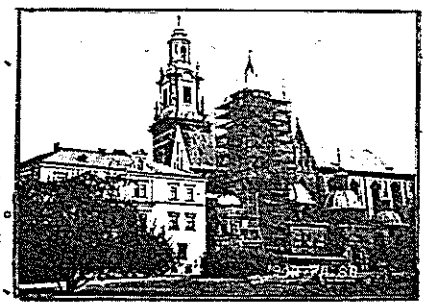
龍の像を過ぎると偉容を誇示するような見張塔と、蔦で覆われた城門が見え、門の傍にポーランドの英雄らしい人物の馬に跨った像が立っていた。



（右は城門と見張塔で、道路左下に龍の像がある）

１９世紀にオーストリアのハプスベルク家が造った城壁の門をくぐると、そこには四階建ての牢屋だった塔が立ち、それに続く広々とした大庭園の向うには、１４世紀に建立されたゴシック様式の大聖堂が建っていた。

大聖堂は目下修理中であったため、さまざまな建物が組み合わさった複雑な構造がよく見えた。聖堂の前には金のドームと銀のドームがあり、３つの礼拝堂をもつ巨大なゴシック建築は、ヴァヴェル城内で最大の建物であった。



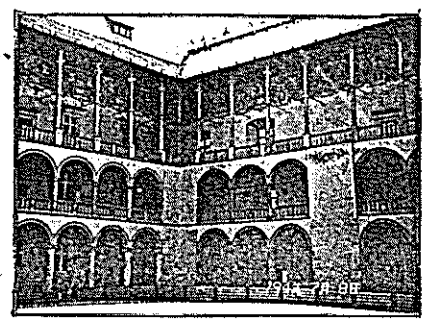
（右の写真は修理中の大聖堂の全景）

庭園には１７世紀にスウェーデン軍に攻撃された時のスウェーデンの大砲が、十数門ほど並んでいた。

ヴィスワ川を眼下に見おろす城砦はクラコフ市街を睥睨し、そこで永遠不朽を願った歴代の王たちは、我れを忘れて最高の人生に陶酔していたことだろうと思いながら、私も明鏡止水の景観に見惚れていた。

王の教会でもあったこの礼拝堂では、中世のポーランドの王たちの戴冠式が行われ、地下もまた歴代の王の墓所となっている一方、列強による国土分割に対して勇敢に戦った英雄の霊も眠っている。

大聖堂を象徴するように聳え立つ塔の最上部には、周囲８ｍというポーランド最大の鐘が吊るされていたが、私にはこの鐘の響が魂の休息となり、或いは不幸な人々の頼みの音であったように感じるのであった。



続いて王たちが実際に生活していた場所である王宮に足を踏み入れると、入口に３００年前の鯨の骨が飾られ、内部にはゴシックとルネッサンスがミックスされた様式の、７１ものホールがあった。内部の壁にはフレスコ画が描かれおり、現在は王宮博物館として公開されていたが、我々は時間の関係から中庭から絢爛豪華な外観を眺めるだけで立ち去ったのである。（上は王宮の中庭の景観）

万有は流転して世に常住なく、栄える者は必ず衰えるのは歴史が示す鉄則だと思いながら、ヴァヴェル城の見学は終った。そして民族の盛衰に関する最大のテーマは、戦争と平和だと新ためて知らされるのであった。

「旧市街」（前頁地図の中央）

ヴァヴェル城を去った一行は市街を北上して、旧市街の真中に広がる４万㎡にも及ぶ中央広場へと進行して行った。

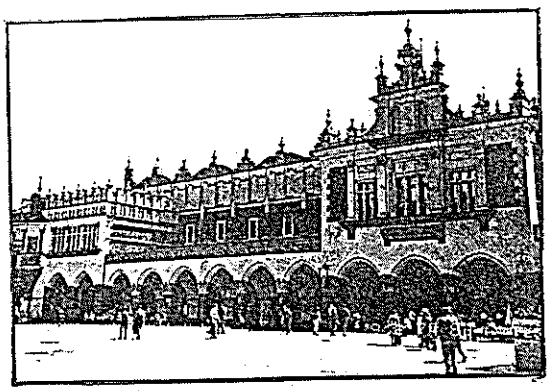
中世のヨーロッパでは最も美しいと言われるこの広場は、何世紀ものあいだ人々が

行き交い、さまざまな歴史が繰り広げられてきた由緒ある広場であった。

広場周辺には聖マリア教会を筆頭にして、１００に及ぶ教会があると言われている。我々は先ずこの国の英雄コシチェコの馬上の像を始め、無数の石像の立ち並ぶ古めかしい教会を見学し、ローマ法王ヨハネ・パウロ２世の生家を訪れた。（右は現ローマ法王パウロ２世の生家）

彼はクラコフの教会の司教を努め、今ではポーランドが誇る第１人者である。

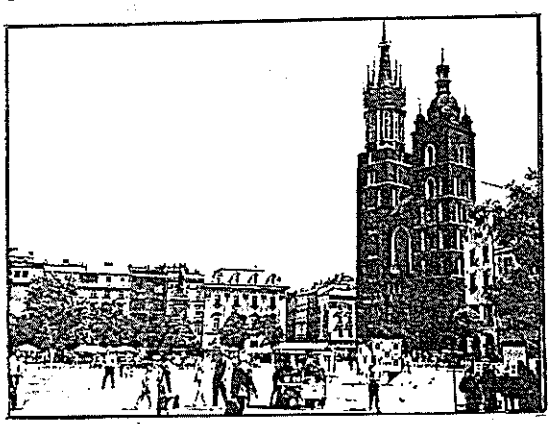
ポーランドがローマ・カトリックの洗礼を受けたのは１０世紀末であつた。９６６年、１５０年ほど前からこの地を支配統治していた豪族の長ミシェコが洗礼を受け、住民たちもこれを受け入れた。以後、ポーランドは一貫してカトリックの国で、社会主義の時代を通じて人々は敬虔な信仰を心の拠り所とした。そして法王が誕生したのであった。



徒歩で広場周辺を見学して旧市街市場に戻ると、長さ１００ｍにも及ぶ大きな建物の織物会館が建っていた。この会館の創建は１４世紀であったが、その後、火災に遭い、目にしている現在のルネサンス建築は１６世紀のものである。

（右は織物会館と旧市街市場）

中世から布地を中心とした市場としてポーランドのみならず、ヨーロッパ中からの商人で賑わっていたという。館内に入ると１階の両側には数え切れない土産品の店が並び、２階はポーランド絵画のギャラリーであった。記念の土産品として私も琥珀の製品を買い求めた。



織物会館を中心とした広場の西側には１３世紀に建てられた市庁舎の塔が、ぽつんと立っていた。建物の主要部分は１８２０年にオーストリア軍の攻撃で破壊され、現在の塔の最上部はクラコフ市博物館として公開されていた。

（右は旧市街市場と聖マリア教会）

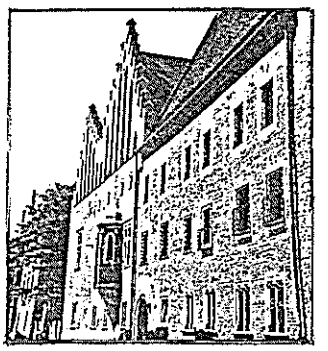
広場の東側に見えている３つの本堂と、２本の非対照的な尖塔が聳える見事なゴシック様式教会は、聖マリア教会であった。（２６頁地図の中央）

この見上げなければならない教会の尖塔から毎時、時報として鳴らされるラッパの音が旅行者の人気を呼んでいた。昔、タタール人（蒙古）がクラコフに攻め込んだ時、敵の来襲を告げようとしたラッパ手が敵の矢に射抜かれてしまった。以来、彼を悼んでこの時報が続けられ、日露戦争時の日本兵ラッパ手「木口公平」に似た話である。

群衆で混雑する市場広場で我々は１時間半の自由行動時間が与えられた。広場の周囲に広がるカフェテラスでは、地元の人々がのんびりとお茶を楽しんでいた。それに釣られるように私等もコーヒを注文し、疲れを癒して一時を過ごしていた。

一行の人たちは織物会館の御土産品店街へと姿を消して行った。私も孫娘の就職祝を物色する目的で会館のなかに再び足を運ぶと、各商店とも御祭りのような賑わいで商品を探すのも容易ではない状態である。ポーランドはバルト海に面している関係か琥珀製品が多く、数点を購入して市庁舎に面した方の広場に出てみた。

そこの戸外にも数え切れない露天商がひしめきあい、その中に肖像画を描く画家連中も屯していた。膝関節が痛む私は自由行動の時間を持て余し、早速一人の画家を選んで肖像画を描かせることにした。



珍しい東洋人の顔を見る群衆の注視の中で約３０分も椅子に腰掛ていたが、このようなことは数多い旅を経験した私にも初めてのことであった。

自由行動が終わった一行は、広場西方にあるヨーロッパで二番目に古い歴史をもつ「ヤギェウォ大学」に向った。（位置は２６頁地図の中央のやや左側）

１３６４年創立のこの大学は、昔は神学校であった名残を遺し、本部の建物には多くの尖塔が立っていた。しかし現在は総合大学として広い地域に分散拡張していた。

（上の写真はヤギェウォ大学校舎の一部）

煉瓦造りのゴシック式建築のこの大学は、天文学者であり地動説を唱えた彼の有名なコペルニクスや、ヨハネ・パウロ２世も学び、緑の生い茂ったキャンバスの片隅にコペルニクスの像も見えていた。

東ヨーロッパでも有数な観光地であるクラコフの見学も大急ぎで終わり、広場の片隅にあった煉瓦造りの珍しい地下レストランで、昼食を摂ることになった。

戦乱の続いた国の古都に相応しい地下食堂はクラコフの印象を更に深め、３００年間も続いた古い都とも別れなければならない時を迎えた。

（上は地下レストランの風景）

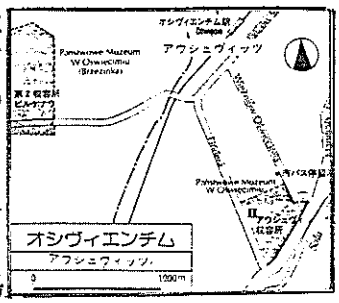
ユダヤ人を大量虐殺した「アウシュヴィッツ」強制収容所

（位置は１８頁地図参照）

バスはクラコフ西方５４㎞にあるナチス・ドイツがユダヤ人を始めとして大量虐殺した「アウシュヴィッツ」（これはドイツ名で、ポーランド語ではオシヴィエンチム）強制収容所へと、ポーランドの穀倉地帯を疾走した。

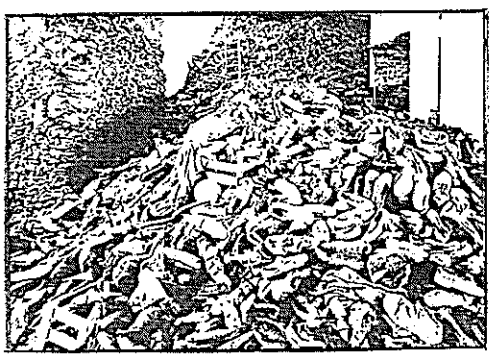
アウシュヴィッツの駅前を通過して一直線に伸びる道路を南進すると、そこにはこの収容所を見学に訪れた団体客のバスで駐車場は一杯であった。

ヨーロッパでナチスが作った収容所、刑務所、銃殺所は１１、５００ケ所にものぼり、その半数以上がポーランド国内に集中し、強制収容所はこのアウシュヴィッツを始め９ケ所に設置された。



１９４０年に建設されたアウシュヴィッツ収容所には、政治犯、ユダヤ人、ジプシーなどが次々と送り込まれ、そして殺された大収容所であった。

ナチスの戦況の悪化にともない収容所は大量殺人の工場へと変化し、毒ガス、銃殺、人体実験など、その殺人の方法は数え上げれば切りがない。ここで殺された数は４００万とも言われ、現在は博物館として公開されていた。



アウシュヴィッツ収容所に到着した我々は先ず、当時の収容所内の様子や死体を焼却する光景、開放時の人々の表情などを映した記録映画の見学から開始された。（約１５分）

収容所建設の構想が生まれた発端は、刑務所の囚人が溢れていたこと共に、ポーランド住民の大量逮捕の必要性が生じてきたからであった。

この地に収容所の建設が決定した理由は、ポーランド軍の撤退した跡地があったことに加え、ここは町の人口密集地から離れた所にあって増設が可能であり、交通の便が良好であったからである。（上の写真は遺品の靴類の山）

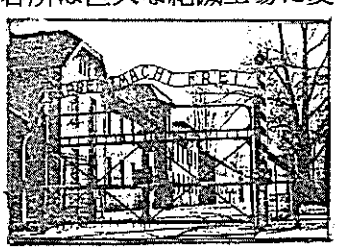
ナチスは収容所の姿が世界に知られることを怖れ、ドイツ人であっても親衛隊以外は撮影は禁止であつた。上の写真は連合軍が攻めて来たときに焼却できず、慌てて置き忘れたものであった。

収容所の設立命令は１９４０年４月で、設立当時は１４棟の１階建と６棟の２階建てであった。それからは囚人の労働力を使って全てを２階建てに改築し、新しく８棟を増築して２８棟とした。

１９４２年には一時、２８、０００人の囚人が同時に収容されたことがあったが、平均の収容者数は１３、０００～１６、０００人で、囚人たちは地下室と屋根裏を利用したブロック（囚人棟）に入れられていた。

（上は屋外での死体焼却）

囚人の数が増大すると同時に収容所の地域も拡大し、収容所は巨大な絶滅工場に変化していった。１９４１年にはここから３㎞離れた地点の「ビルケナウ」（後刻見学）に収容所の建設が始まった。



記録映画の見学が終わり、ガイドは博物館となっている強制収容所を次頁の見取図の点線に従って誘導を始めると我々は幽明を異にする世界に入るような感じであった。

先ず我々の目を引き付けた鉄製の門の扉や、有刺鉄線で囲まれたブロック（囚人棟）は、血腥（ナマグサ）い霊魂が今なお寂しく漂っているような感じを与え、萬斛の同情を誘っていた。

正面ゲートの鉄扉の上には「働けば自由になれる」（ＡＲＢＥＩＴ　ＭＡＣＨＴ　ＦＲＥＩ）という、皮肉なプレートが掲げられていた。家畜用の貨車で送り込まれ、この門を潜った囚人で自由になった人は皆無であった。

（前頁の下の写真は、「働けば自由になれる」というプレーシのある扉）

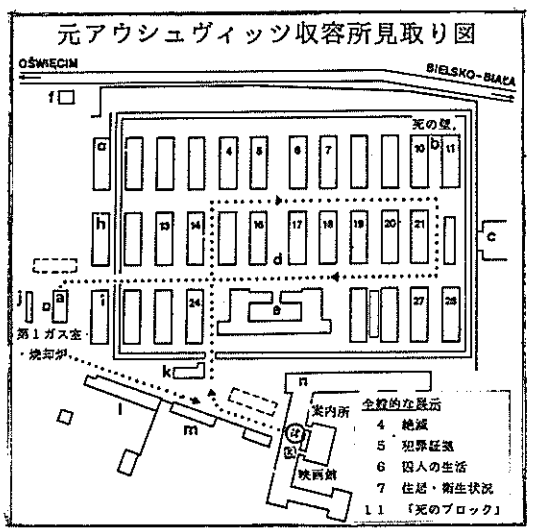
強力な電流が流されている有刺鉄線の透き間から眺める収容所内には、死のブロックの囚人棟や監視塔、鉄道引込線などが見え、哀れを誘うように高く伸びたポプラの木が並んでいた。（右は電流鉄条網に囲まれた囚人棟）

「第４ブロック」（下の見取図の４号の絶滅）

電流鉄条網に囲まれた収容所内に入った我々は、第４ブロック（囚人棟）からの見学となった。

ナチスによって作られた収容所は、諸国民を収容するための最大の収容所で、収容された人々は監禁され、飢え、重労働、医学実験、死刑執行の手段で虐殺され、１９４２年からこの収容所はユダヤ人の最大の絶滅センターとなった。

死を宣告されたユダヤ人は、到着すると殆どガス室に送られて殺された。その数を突き止めることは困難で、約１５０万人と推定され、これらのことを説明した写真や記録を展示してあるのが、「１階１号室」であった。



この収容所は１９４０年にポーランド人の政治犯を収容するために、又ポーランド民族に対して恐怖と絶滅の場として設立された。しかし時の経過とともにナチスは欧州各国からユダヤ人、そしてソ連軍捕虜を送り込むようになり、ポーランド人は終戦時まで送り続けられた。

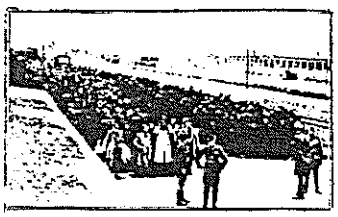
この収容所をユダヤ民族の絶滅センターに選んだのは、この地域を周囲から隔離して遮断することが可能であったからである。

またナチス・ドイツがソ連を攻撃して間もなく、ソ連軍捕虜がここに収容され、１３、７５５人の捕虜は５ケ月のうちに８、３２０人が命を奪われた。死因は毒殺、銃殺、衰弱死で、それらのことが展示されているのが「１階２号室」であった。

この収容所に殺害されるために送られてきた人々の殆どは、東ヨーロッパに移住させられるだけだと信じていた。そしてこの人たちは、しばしば密閉された貨車で食料なしで旅をさせられた。

貨車に押し合いへし合いするほどまで押し込まれ、収容所に着くまで７日間から１０日間も旅をさせられている。列車はアウシュヴィッツの貨物駅、そして１９４４年からは第２収容所の「ビルケナウ」（３０頁地図の左上）の鉄道引込線の積卸し場に

着いた。



そこで収容所の将校と軍医が選別を行い、労働できそうな者は収容所に入れられ、仕事ができないと判断された人たちはガス室に行かされた。送り込まれてきた人間の約７０％はガス室へ送られたと言う。

ユダヤ人に対する虐殺行為の時には写真が写され、今日まで残っている約２００枚の写真のうちから、数十枚のドキュメンタリー写真が展示されていた。以上が「１階３号室」での説明の要旨である。

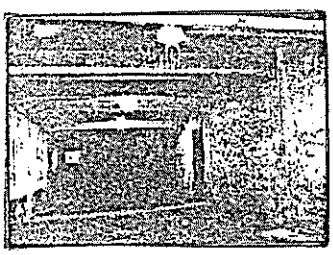
（上の左の写真は駅に着いたユダヤ人、右は髪を切られて点呼を受ける女性たち）

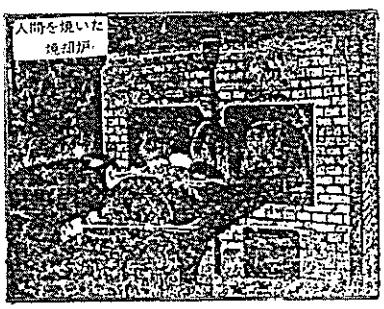
世界の人々に戦争は血も涙もない非人間的なことが起きるということを、認識して欲しいと祈りながら「２階４号室」に移動した。

この室の焼却炉、ガス室（前頁の図の左側）の模型を見ると、地下の脱衣所に入る人々が見えていた。シャワーを浴びるのだと隊員にだまされているから、囚人はみんな落ち着いている。洋服を脱がされ、シャワー室に見せかけた地下室まで歩かされた。

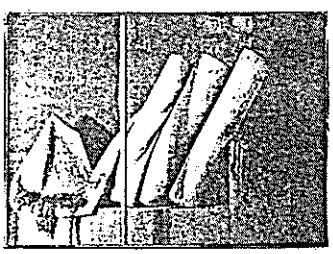
約６３３坪の部屋に約２０００人が押し込まれ、扉を閉じると天井の穴から「チクロンＢ」が投入され、１５分から２０分の間に人間は窒息して死んだ。

死体から金歯が抜かれ、髪の毛が切られ、指輪やピヤスが取られ、そして死体は１階にあった焼却炉へと運ばれた。





部屋の壁には、或る囚人が１９４４年に密かに撮影した写真が展示されていた。これはガス室に向かう女性たちと、積み上げた死体を焼く場面であった。又、陳列棚にはチクロンの結晶のほか、何枚もの毒ガスを取りに行かせた命令書も展示されていた。正視できない数々の悲劇に哀悼の情を注ぐだけであった。（上の写真の左側は暗室のガス室、右側は死体焼却炉）



この収容所が開放された時、ソ連軍が倉庫で袋に入っていた約７トンの髪の毛を発見した。これらの髪の毛はドイツの工場に送られ、マットレスや布地などを着く作っていたのである。この「２階５号室」の写真を唇を噛む思いで眺めていた。（右は人間の髪の毛で作った布地）

又、殺された人々の死体から抜かれた金歯は、金の延べ棒の形にしてドイツ中央衛生局に運ばれた。そして人間の灰は肥料として使用したり、近くの川や池に投げ捨てられていた。

収容所に送られてきた人々が持参してきた持物や、毒殺された人のものは分類され、収容所の隊員や国防軍、一般市民が利用するためにドイツ本国に運ばれた。奪った荷

物を積んだ列車が次々とドイツ本国に運ばれたに拘らず、倉庫はいつも満杯で、分別しきれない荷物の山が出来ていたという。

この収容所にソ連軍が接近すると、倉庫から価値の高い物が運び出されるペースが早まり、開放数日前になると犯罪を消す目的で倉庫は焼かれた。３５棟の倉庫のブロックから６棟だけが焼け残り、その中から何万個の靴、ブラシ、洋服、眼鏡などが発見され、その一部が展示されていた。

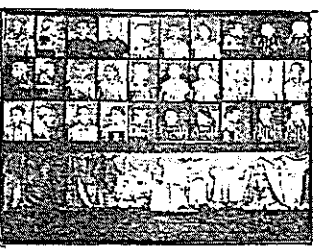
「第５ブロック」（３１頁の見取図の５）

このブロック（囚人棟）には、開放後に発見された被害者の所持品が展示されていた。ブラシ類、靴、所有者の名前が書いてあるトランク、身体障害者の義手、義足などであった。

（右上の写真の左側は名前の書いたトランク、右側は義手義足や松葉杖の山）

「第６ブロック」（３１頁見取図の６）

囚人たちは収容所に送られてきた日に、「お前たちに出口は一つしかない。それは焼却炉の煙突だ」と宣言された。新しく到着した囚人たちは洋服その他のものは取り上げられ、消毒を受けて登録された。



各囚人たちは写真を撮られて左腕に刺青（イレズミ）を入れられた。縞模様の囚人服は生地が薄く、寒さから囚人を守ることは出来なかった。

（右上の写真は写真を撮られた囚人たちの顔写真と、洋服などが吊るされている）

この収容所のファイルには、男女合わせて４０５、０００人の囚人のデータが入れられていた。そして３４０、０００人の命が奪われた。また囚人たちにとって一番の苦しみは、囚人数を確認するための点呼であったと言われている。

点呼は数時間、または十数時間も続いた。懲罰のための点呼も行われ、数時間も手を上げさせられたまま、点呼を受けなければならなかった。この１階２号室には、これらのことが展示されていた。

死刑執行とガス室に次いで効果的な虐殺方法は労働であった。最初は収容所の増築作業であったが、次第に囚人たちの労働はドイツ帝国の産業が利用し始めた。

仕事は休息なしで行われ、仕事のテンポの速さ、食料不足、そして拷問が死亡率を高めた。労働班が収容所に戻る時、手押し車には囚人の死体が積まれ、スコップで殴られた負傷者も中に混じっていた。

特に重労働であったのは地ならし作業で、その模型が展示されていた。又、石炭採掘や軍事工場、火薬工場などの建設作業などを含めて、約３万人の囚人が死亡している。以上は１階３号室での説明である。

囚人の一日の食事量は１３００～１７００カロリーで、朝食として５００ccのコーヒと呼ばれた液体、昼食として１ℓの水のような腐った野菜のスープしか与えられなかった。夕食は３００～３５０ｇの黒パン、３０ｇのマガリンと薬草の飲物であった。

重労働と飢えによって身体は完全に衰弱し、栄養失調になって最後は死んだ。この１階４号室に展示されていた写真は、開放後に撮られた２３～３５ｇにまで痩せ衰えた女性囚人の写真であった。その幽鬼のような姿に目頭が熱くなり部屋を出た。

現在では収容所に毎日起こっていた悲惨な場面を想像することは難しいが、囚人の中にいた画家たちは、当時の雰囲気を作品に現わそうとした。それらの作品は彼等の残した証言であり、１階５号室にその生活を生々しく表現していた。

収容所で最も大変な運命に遭ったのは妊婦と子供であった。彼等は最初は直接ガス室行きであったが、その後は子供だけが収容されることもあった。

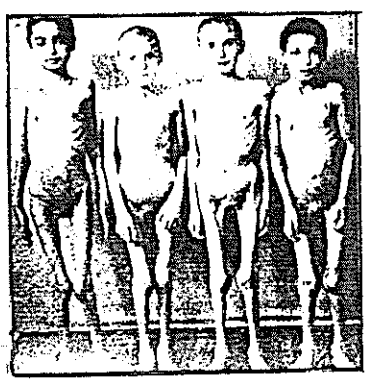
ある種の子供（例えば双子）は犯罪的な医学の実験材料にされ、他の子供たちは重労働に駆り出された。収容所の医師が子供たちの選別を行い、子供の心臓へフェノル注射をして殺害したケースを見ると、百雷の衝撃を受けるようであった。

「第７ブロック」（３１頁見取図の７）

この収容所の住まいの状況は悲劇であった。最初の囚人たちはコンクリートの上に置いてあった藁の上に寝たが、その後マットレスが配給された。

４０～５０人用の部屋には通常２００人の囚人が押し込まれ、その後に作られた３段ベッドも１段ごとに２人の囚人が寝ていた。そして掛布団は汚れた穴だらけの廃品の毛布であった。

この収容所は２階建ての煉瓦造りの建物だが、のちに訪れた「ビルケナウ」（第２収容所）は沼地に建てた基礎のないバラックで、その模型が展示されていた。以上が第７ブロックの一階の展示と説明であった。



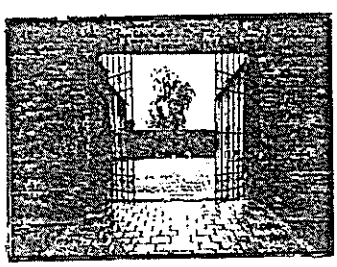
この収容所一帯は湿度の高い気候、劣悪な住居環境、飢え、防寒の役目を果たさず洗濯もできない囚人服、鼠と虫、これらは伝染病の原因となり、多くの囚人を死に至らしめた。

囚人で衰弱した者、回復の見込のない者はガス室に送られたり、病院で心臓へフェノル注射を打たれて殺された。そして囚人たちは医師の犯罪的な医学実験の材料として使われたのである。

男女の断種実験、遺伝学や人類学の研究の対象、新しい薬の投与実験など、私の耳にいつまでも今わの悲痛な叫びが聞こえてくるようであった。これらは２階７号室の展示と説明である。

（右上の写真は遺伝理論研究のため人体実験された子供たち。押収した資料から発見）

「第１０、１１ブロック」（３１頁見取図参照）



第１０と第１１ブロックの中庭は両側から高い壁で区切られていた。第１０ブロックの窓に付けてある木の板は、そこで行われていた死刑執行を見られないためであった。

高いコンクリート製の「死の壁」の前では収容所の隊員が約２万人もの囚人を銃殺し、第１１ブロックの中庭では鞭打ちなどの刑罰も執行された。

（右は銃殺の場所で、鉄扉の向うに「死の壁」が見える）

第１１ブロックは収容所から隔離された収容所内の刑務所で、その１階と地下はそ

のまま残されていた。

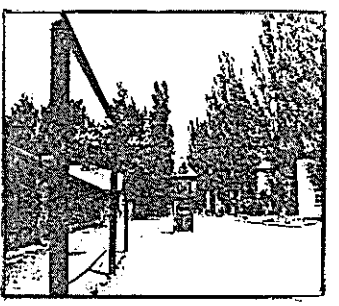
このブロックの１階は、囚人たちが２～３時間の間に２００人から３００人の死刑判決が下された所である。判決を受けた囚人たちは「死の壁」の前へ連行されて行った。銃殺される前には廊下の真中にある脱衣所で裸にならなければならなかった。

囚人たちの組織的虐殺には懲罰制度も関係していた。懲罰には鞭打ち、杭に吊す、移動絞首台、食糧の減量などがあり、一階にこれらの資料が展示されていた。

地下では１９４１年９月にチクロンＢを使って集団毒殺の実験を行い、約６００人のソ連軍捕虜と、収容所内の病院に入院中の２５０人の患者が殺された。

地下では３種類の監房を見ることができる。１８号室は餓死を宣告された囚人の監房で、２１号室の壁には監禁中の囚人が残した痛ましい落書きが残っていた。２２号室には９０×９０㎝の「立ち牢」があり、ここには一度に４人が収容され、死を待たされたのであった。

「点呼広場」

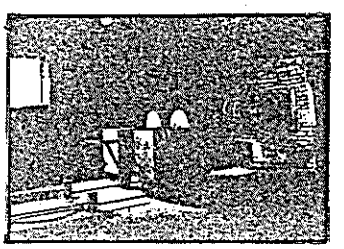


点呼の時には収容所の隊員が囚人の数を確認すると同時に、移動絞首台または集団絞首台を置き、見せしめのための死刑執行も行われた。

集団絞首台では１９４３年７月１９日、３人の脱走者を助けたという疑いを受けて、１２人のポーランド人が吊るされた。

（右の写真の左側の木の枠組は絞首台で、道路の向こうの中央に立っているのは見張り塔である）

「焼却炉とガス室」（３１頁見取図の左側）



焼却炉は収容所を取り囲む鉄条網の外側に位置しておりその前には絞首台があった。

焼却炉の中の最も大きい部屋は、初めは遺体安置所であったが、その後、ガス室に改造された。

ここでは各地から運ばれてきたユダヤ人やソ連軍捕虜が毒殺されている。

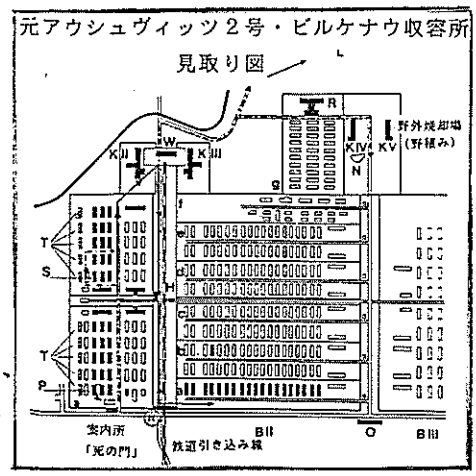
（右の写真は焼却炉の一つでレールが敷かれている）

奥の部屋には３台あったうちの２台の焼却炉が残っていた。ここでは１日に３５０人の死体が焼かれていた。１台の炉には同時に２～３人の死体が入れられたと言う。

以上で「アウシュヴィッツ」強制収容所の見学は終了したが、展示されていた数々の遺品や写真、そして収容所の残酷な設備から、犠牲となった多くの人たちの死の叫びが聞こえてくるようであった。

生々しい戦争の悲劇は正視することはできず、空気を抜かれたようになった私は、込み上げてくる嗚咽を抑えながら収容所を辞去したのである。

ビルケナウ第２収容所（位置は３０頁地図左上）

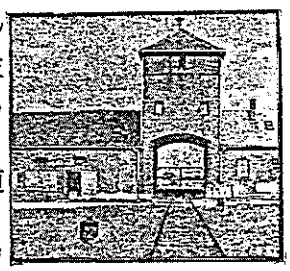


戦争の愚行や悲劇を永遠に訴える収容所は、アウシュヴィッツだけでなく、その北西３kmにもあり、それが第２収容所の「ビルケナウ」であった。

その面積は約５３万坪で、３００棟以上のバラックが建っていた。しかしそのバラックは今も残っているわけではない。

現在、完全な形で残っているのは４５棟の煉瓦造りと、２２棟の木造の囚人棟だけである。

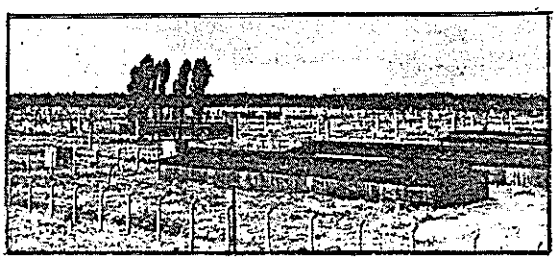
焼かれたか又は破壊されたバラックの跡には、煉瓦造りの煙突しか残っていない。その数を見ると収容所が如何に大きかったかを物語っているのであった。



アウシュヴィッツ収容所を去った我々を乗せたバスが、ビルケナウ収容所の案内所であった「死の門」（右上の見取図の左下）に到着すると、天は悲しみの涙をさそうように小雨を降らしてきたのであった。

（右の写真は収容所の「死の門」と呼ばれた衛兵所と、鉄道引込線が収容所内に通じている光景）

一行はまず煉瓦造りの「死の門」の屋上に昇り、ビルケナウ収容所の全景を眺めた。今は雑草が生い茂って一見すると牧場のように見えていたが、５０年前には家畜ではなく、人間が住んでいた絶滅収容所であった。



今日あって明日はなかった囚人棟の数百本の煙突だけが、今も延々と伸びる膨大な敷地の中に林立していた。殺伐なその強制収容所の当時を想像するだけでも、鳥肌が立つような思いがする。

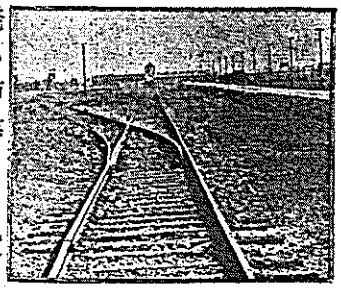
（右の写真は広大な収容所跡に林立する煙突群と、僅かに残っているバラック）

死の門を通っている鉄道引込線は収容所の奥まで伸びていた。ヨーロッパ各地から、東ヨーロッパに移住するだけと信じて貨車に乗った無数の人々が、この死の門をくぐったのである。そして彼等を待っていたのは死であった。

我々は引込線の線路上を降雨の中を傘もささず、木造のバラックの囚人棟まで歩いた。基礎なしで立てられたバラックには床はなく、板張りで壁もない隙間だらけであった。

その中に傾いた木製の簡素な３段ベッドが延々と並び、正しく死臭を感じる家畜小屋であった。

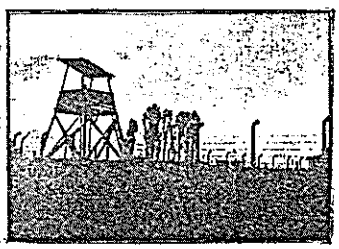
（右の写真は土間に並んだ貧弱な３段ベッド群）



湿地に建設したバラックは非衛生的で、更に鼠の大量発生が囚人の生活環境を悪化させ、それに加えて寒冷地にも拘らず板壁は隙間だらけで、僅かなコンクリート製の暖炉で暖をとることは出来なかった。もちろん収容所側は彼等を生かすためでなく、殺す目的であったからである。

泥濘化した土地に立ったバラツクに収容された囚人は、３段ベッドの腐った藁の上に寝かされていた。それも１段ごとに２人が寝かされたのであった。

（右上の写真は収容所内に通じる鉄道引込線で、如何に大量の囚人を輸送したかが想像される）



木造の囚人棟の一つは、もともと５２頭用の馬小屋であったが、多少の改造を加えて約１０００人の囚人を収容したと言われている。私の眼底には囚人たちの最後の哀れな姿が浮かぶようであった。

１９４４年８月現在の囚人の数は、男女合わせて約１０万人に達していたという記録がある。しかし殺害された人の累計は４００万人に及び、その虐殺設備は４棟の焼却炉・ガス室では足らず、死体を焼く野外焼却場（前頁見取図の右上）まで設けたのであった。

（上の写真は囚人の逃亡を監視する見張台と電流鉄条網を巡らした柵）

残念なガラ時間の関係上、犠牲者の国際記念碑（１９６７年除幕）の参観は出来なかった。しかし両収容所は後世の人々に対し、悲劇と惨禍をもたらす戦争の無意味と、本当に熱い血潮の通った世界平和の尊さを訴えていた。

私の戦陣生活の体験から回顧すると、死闘戦場では人間は獣類化して、自己の生命保持のため手段を選ばない心理状態に陥ることは事実であった。

しかしながら激戦場とはいえ、一旦戦火が止み次の準備に入る時期には心の平静を取り戻し、残虐な精神状態は自然に消滅した。この繰り返しが第一線の戦場心理で、これが人間本来の姿であつたと思っている。

それに拘らず剣電弾雨の死闘戦場でもないこのような収容所で、獣類に等しい血も涙もない殺害・虐殺は、人間のする行為ではなく許すことはできない。

私は戦後、関東軍防疫給水部第７３１部隊（石井部隊）の跡地（ハルビン郊外）や、カンボジアのプノンペン監獄博物館、サイゴン（ホーチンミン市）の戦争・歴史博物館を見学した。しかし、このアウシュヴィッツ及びビルケナウ強制収容所の大量虐殺は、他と比較できないほど凄惨で、何時までも幽鬼のような呻きが聞こえていた。

世界には二つの力しか存在しない。それは即ち剣と精神である。しかし、剣は常に精神によって打ち破られるものだ。私も剣の運命にあった悲劇の時代に生きてきたが、この両収容所を見学した感想として言えることは、人間の心情は到底一代や二代で消えるものではないと言うことであった。

死者に対する何よりの供養は、加害者への非難や罵詈雑言よりも哀悼の情だと、心の中で冥福を祈り辞去したのであった。

東欧のユダヤ人に就いて

アウシュヴィッツ及びビルケナウの両強制収容所で殺害されたユダヤ人のことを思うと、ここにユダヤ人に就いての一項を設けなければならない心境になった。

ヨーロッパの地で幾千年もの長い歳月を離散の民として生きてきたユダヤ人の歴史の中で、東欧は特別な位置を占めている。

中でもポーランドは、かって西欧から追放されたユダヤ人の最後の避難場所で、ユダヤ人の「約束の地」としての記録がなお生きている。また同時に極端な人種差別主義が生み出した嘗てないユダヤ人の迫害、即ちナチスの強制収容所での民族虐殺計画が実施された地でもある。

現在、世界のユダヤ人は凡そ１５００万人と言われている。そのうち半数がポーランドのユダヤ人と何らかの絆で結ばれていると云っても過言ではない。そして東欧、中欧のユダヤ人は多くの人材を生み出している。

若しユダヤ人の開放がもっと早い時代に行われていたならば、どれほどの貢献を世界文化になしたか計り知れない。しかし、ヨーロッパ社会がユダヤ人にキリスト教徒と対等の権利を認め出したのは、１８世紀末のことに過ぎない。

「中世ヨーロッパのユダヤ人弾圧」

ヨーロッパのユダヤ人は１２世紀以降、土地の取得、耕作、手工業への従事が禁止され、殆どの都市で商業、金融業、金貸業を職業とするしかなかった。又、特別の街路や区域に隔離された。これをゲットと呼んでいる。

中世の君主たちはユダヤ人に法的制約を加える一方、特別の税を課して自らの財源としていた。

十字軍の遠征やペストの流行の時、カトリック教会による異端審問が強まった際、ユダヤ人一掃は神に托された至高の仕事だとする教会によって迫害を受け、ユダヤ人に対する襲撃、略奪、虐殺が続いた。

こうして１２～１５世紀にかけてイギリスやフランス、かって中世ヨーロッパ最大の集結地だったスペイン、ポルトガル、そして遂にドイツからもユダヤ人は追放された。そのユダヤ人たちが辿り着いたのがオスマン・トルコ支配下のコンスタンチノーブルやアムステルダム、そしてポーランド各地や周辺のスラブ諸国であった。この頃ポーランドは世界最大のユダヤ人居住地となった。

「自由の地ポーランド」

１３世紀のポーランドは封建分立の時代で、幾度もタタールの侵入によって国土が荒廃していた。そのとき国王はユダヤ人に特権を与えて商業を発展させ、国の再建に役立てようとした。

この特権によってユダヤ人は通常の裁判でなく、直接、諸侯の裁判を受けることになり、商業活動と信用取引を自由に行う権利が与えられ、生活の安全、個人財産の保護、宗教儀礼の自由が保証された。

ユダヤ法関係の一切の事柄をユダヤ人共同体自身で決定する自治も認められた。そ

のため迫害された国々から大量のユダヤ人が流入することになった。
こうした他の国々と比べて例外的に恵まれた状態は、キリスト教徒の商人や都市住民の反発を招き、散発的な反ユダヤ暴動が１６世紀半ばまで続いた。
１５、６世紀にはハプスブルク家支配下のドイツ、チェコ、ハンガリーから追われたユダヤ人が流入し、１７世紀中頃のポーランドのユダヤ人の人口は、全人口の５％、５０万人にも達した。

「ポーランド分割とユダヤ人の圧迫」
しかし、ポーランドがユダヤ人の「約束の地」であったのは、それまでであった。１６４８年、ポーランド支配者の政治的、経済的制圧に対して起こった反乱によって転機を迎えた。
コザックはポーランドの奥深く侵入し、７００余のユダヤ人集落を破壊し、大掛かりな虐殺が行われた。１６５４年にはロシアもポーランドに侵入し、ユダヤ人を根絶もしくは放逐した。
こうしてポーランドはスウェーデン、ロシアとの戦乱による国土の破壊と都市の経済的疲弊の時代に入り、ポーランド支配層の庇護、それとの協調のもとに繁栄してきたユダヤ人の商業活動も終息した。
その後にやってくるのは、１８世紀末のポーランドの３分割による長い国家消滅の時代であった。
西欧では１８世紀末から啓蒙思想の広がりと共に、それまでゲットに閉じ込められていたユダヤ人に都市への居住を認め、他の国民と対等の市民権を与えようとする傾向が強まり、アメリカの独立、フランス革命を経て、１９世紀までには殆どの国でユダヤ人開放が実現した。
多くのユダヤ人はユダヤ教を離れて居住地の社会に同化し、知的文化的生活の重要な担い手として頭角を現わした。
又一方では、ユダヤ民族の種族的、文化的同一性、帰属意識をもとにしたパレスチナ帰還、そしてユダヤ人国家の復興をめざすシオニズム運動も盛んになった。
ポーランドでも１７９１年の有名な「５月３日憲法」には、ユダヤ人に都市住民と対等の権利を認めることが掲げられ、１８０７年のワルシャワ公国憲法も、ユダヤ人に完全な権利の平等を認めた。
しかしポーランドは列強による分割支配の下にあり、ナポレオンに託した夢もついえ去り、ユダヤ人に対する権利の制限、圧迫は返って一層の強まりを見せることになった。
ユダヤ人に対して極端に非寛容であったロシア支配下では、あたかも中世を思わせる集団虐殺が行われた。プロイセン支配下でもユダヤ人に対する差別とゲルマン化の政策が進められ、オーストリア占領下でも似たようなものであった。
この時期に、オーストラリア、南アメリカ、カナダ、特に、アメリカ合衆国へのユダヤ人の大量移住が見られることになるのであった。

「ナチズムによる悲惨な迫害」
東欧諸国におけるユダヤ人の社会生活、政治生活への参画、同化、そして同時にシ

オニズム運動の流れが強まるのは、１９世紀末から２０世紀にかけてであった。両大戦期には多くのユダヤ人がそれぞれの国の知識人として活躍していた。

戦前のポーランド共和国憲法はユダヤ人にも他の国民と対等の権利を保障していた。だが１９３０年に２９０万であったポーランドのユダヤ人が、１９３３年に３３０万（人口の１０％、都市住民の３０％）に急増したのは異常であった。これはナチズムの迫害によるドイツからのユダヤ人の再流入した現象である。

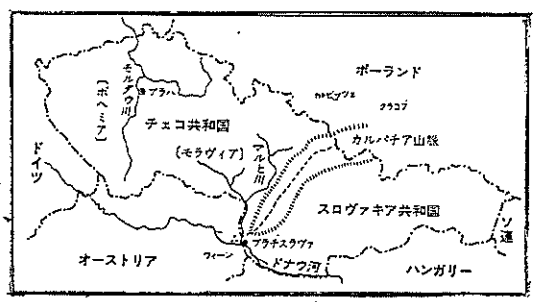
しかしユダヤ民族の皆殺し計画が残した結果は悲惨なものであった。戦前３３５万を数えたポーランドのユダヤ人は、２５万ほどソ連に逃げたとしても、生き残ったのは５万人ほどに過ぎなかった。

チェコ・スロバキアでは３６万から４万人に、ルーマニア、ユーゴスラビア、オランダ、ギリシア、その他ナチス支配下にあった国々のユダヤ人９００万のうち、６００万人が殺されたと考えられる。

ソ連の一都市で１６世紀以来、東欧ユダヤ文化の中心であったヴィルノの５万４千人いたユダヤ人は、僅か６００人しか生き残ったに過ぎない。

こうして西欧から避難場所として移住し、プラハやクラコフ、ワルシャワ、ヴィルノなどの多くの都市に高い文化を築いてきた東欧のユダヤ人社会は崩壊し、アメリカ合衆国やイスラエル移って行ったユダヤ人の記録と伝承の中に、民族は生き延びることになったのである。

7月9日　（土）晴　カトビッツエ～プラハ



驚天動地の言語に絶したアウシェヴィッツ及びビルケナウの収容所に後味の悪い思いを残し、暮色蒼然とした街道を西方５０㎞の「カトビッツエ」へと疾走した。

１９２１年、ドイツ領からポーランド領となったカトビッツエ（右の地図参照）は、良質の炭田を擁すポーランド最大の工業地帯である。しかし工業の過大な集積によって環境は悪く、市街も大きな駅もすべて薄汚い感じがしていた。

一行は２２：１５発のプラハ行の夜行寝台列車に乗車した。まもなく国境通過となって出入国の手続きを済ませ、３段ベッドの下段に脚を伸ばすと、入寂したように心地よい眠りに就いた。

夜明けは薄紙を剥ぐようにしてチェコの大平原の情景を映し出してきた。その時、私の脳細胞に閃いてきたのは何と不思議にもチェコ機関銃であった。

生死を超越して死闘の限りを尽くし、この世の生き地獄を展開した中国戦線で、我々第一線歩兵の将兵を最も悩ましたのは、チェコ製の機関銃であったからである。実に軽快な発射音のチェコ機関銃は、当時の世界では最優秀を誇っていたのである。

奇妙な運命から私は偶然の符合のように、７月９日の朝をチェコ（人口１０００万）で迎え、世界は一つの舞台だと懐かしさを覚えつつ６：１６にプラハ本駅に到着した。

チェコの歴史の概要

第１次大戦後の１９１８年１０月、この国は「チェコスロバキア」の名のもとに独立を達成した。しかしチェコスロバキア人という単一民族は存在せず、新生国家はチェコ人とスロバキア人から構成されていた。（それほどチェコとスロバキアの歴史は切り離すことはできず、一部はスロバキアの歴史も記述しなければならない）

彼等は同じ西スラブ族に属しながら、長い間それぞれ別の歴史の中で生きるうちに、気質から文化や言語にいたるまで、大きな相違を生むようになった。両民族が独立国家に統合された後も真の融和はなかった。

（スラブ民族の移動の歴史は後記する）

彼等の祖先の西スラブ族は５世紀頃からこの地方に定住を始め、９世紀には「大モラヴィア王国」を建設した。その当時はチェコ人とスロバキア人に区別はなかった。

１０世紀にこの王国がアジア系の「マジャール人」に滅ぼされ、東半分がマジャールに併合された。これがチェコ人とスロバキア人の運命を分けることになった。

チェコスロバキアとして独立する１９１８年まで、スロバキアはハンガリー領となり、スロバキア人は長い屈辱と貧困の時代に入った。

これに対して西半分の地域では、その後チェコ人の王国が樹立された。１０世紀に興った「ボヘミア侯国」がその発端である。（現在でもプラハはボヘミアの中心）

この侯国はやがて王国となり、国内に銀鉱が発見されてから富をあつめ、１４世紀初めにはボヘミア王はポーランドとハンガリーの王を兼ねる中世の強国となり、ドナウ川流域を中心に北はバルト海、南はアドリア海まで支配した。

ボヘミア王国の最盛期は１３５５年；神聖ローマ皇帝に選ばれたカレル４世の時代である。その繁栄ぶりはカレル橋など、今なおプラハに残る建築物が遺憾なく物語っている。

首都プラハは当時、中欧文化の中心をなしており、カレル４世はプラハに初の大学を開設した。これはウィーン大学やハイデルベルク（ドイツ）大学が創設される以前のことである。

神聖ローマ皇帝とボヘミア王の位は、その後、ハプスブルク王家に渡った。さらに新教を信じるボーミア貴族が、カトリックのハプスブルク皇帝との戦いに敗れ、１７世紀にはボーミアの栄光は完全に失われた。

（ハプスブルク帝国については後記する）

しかし、この間一貫してハンガリーの支配下にあったスロバキアに較べれば、ボーミアつまり今のチェコはあらゆる点で遥かに先進地域として発展した。

１９世紀半ばになるとチェコでは民族自立運動が燃え上がった。資源の豊かなボーミア地方はハプスブルク帝国の工業の心臓部を形成し、経済的にも重要な役割を果たすようになった。

第１次大戦が勃発してドイツについたハプスブルク帝国は崩壊した。戦局が連合国側に有利に傾くと、チェコ人とスロバキア人は独立して一国家を形成するという考え方が本格化し、遂に独立を達成したのである。

しかし１０００年もの間ハンガリー領であつたスロバキアは、教育水準の低い後進

の農業地帯で、歴史、経済、文化、社会的発展の差を解決するには常に困難であった。
しかしチェコスロバキアは東欧諸国の中では、比較的に安定した道を歩んできた。そしてこの国が独立の際に旧ハプスブルク帝国から、ドイツのルール地方に相当するボヘミアの工業を引き継いだ。
豊富な工業資源と高度な技術水準に支えられた経済力は、独立後の社会的安定に大いに寄与した。ナチスの台頭とともに他の国々が、１９３０年代まで独立制へと傾いていった中で、ひとりチェコスロバキアはナチスの武力侵略までは、西欧型民主主義を守り通したのであった。
第２次大戦後、チェコスロバキアには社会主義政権が樹立し、非能率的な計画経済の下にありながらも東欧一の成果をあげ、最高水準を維持した優等生であった。
しかし社会主義の下で特にスロバキア民族主義は厳しく弾圧された。チェコ人による中央集権の下で、スロバキア人の忍従の時代が続いた。そしてスターリン主義時代にはスロバキア人の粛清も行われた。
１９６８年の「プラハの春」の自由化運動の指導者・ドプチェクは、戦後初のスロバキア出身の第一書記であった。しかし記憶に新しいプラハの春はソ連戦車の下に空しく散ったのである。
その翌年、チェコ人とスロバキア人はそれぞれ独自の共和国をつくり、連邦を形成して一応は形の上だけは平等が実現した。そして実質の平等を要求するスロバキア人の声は更に強まり、相互間の対立感情は容易に克服されるものではなかった。
チェコ人に言わせると、我々はこれまでスロバキアに多額を投資し、生活水準の向上に努力したと言い、一方のスロバキア人に言わせると、我々はチェコ人に支配されてきたという。その不信感は長い歴史に根ざすだけに想像以上に深いものがある。
幸いにも１９９３年１月１日、両民族は和解して「チェコ」と「スロバキア」はそれぞれ独立したのである。

東欧の民族の歴史の概要

スラブ族は最初ポーランドのヴィスワ川からウクライナのドニエプル川にはさまれた地域に住んでいた。５世紀に遊牧民族のフン族【中国史の匈奴（フンヌ）とされているが不確定】がヨーロッパに侵入すると、スラブ族は５～６世紀に四方八方に分散して移動した。
北東ないし南東に向かって移動したのが後のロシア人・白ロシア人・ウクライナ人で、東スラブと称している。一方、西に向かったのが後のポーランド人・チェコ人・スロバキア人とブルガリア人で、南スラブの先祖となった。
こうしてドナウ川流域を中心に北から南にかけてスラブ人が定住するが、９世紀になってその中央部へ東からクサビを打ち込むような形で、アジア系のマジャール族が入ってきた。これがハンガリー人の先祖である。
又、ドナウ川の下流域には今のルーマニア人の祖先のダキア人が、スラブ人が移動してくる前から居住していた。
このような複雑な民族構成は１９８９年の東欧開放後、民族紛争という宿命を新しい形で燃え上がらせている。

プラハの概要

８～９世紀にプラハ城の基礎となる城砦の一帯に、西スラブ系のチェコ人が集落を作って定住した。

ボヘミアを統治したチェコ王朝の君主がプラハの町の発展の基礎をつくり、キリスト教を普及させる中で、９７３年に司教座が置かれた。

１１世紀以降、ユダヤ人やドイツ人が商人、職人として定住し、彼等の活躍によって西欧と東欧の通商路となる基礎ができた。特にユダヤ人は１２世紀に町の一部に壁に囲まれたユダヤ人街（ゲット）をつくり、２０世紀までプラハの商工業界で大きな力を行使してきた。１３世紀にボヘミアを中欧一の大国にのしあげたボヘミア国王は、ドイツ人の入植を積極的に奨励した。

飛躍的に発展したプラハが黄金のプラハの名をほしいままにし、ヨーロッパの経済、文化、政治の中心地となったのは１４世紀半ばである。即ち神聖ローマ皇帝に選ばれたルクセンブルク家のカール４世（ボヘミア国王カレル１世）が、プラハを帝国の都と定めたとき（１３４６年）であった。

町はゴシック式の建造物で飾られ、中欧で最初の大学であるカレル大学（プラハ大学）も１３４８年に作られ、ヨーロッパ全土から学生が集まった。

１５世紀と１７世紀のヨーロッパ史上で重要な宗教紛争は、いづれもプラハを軸にして展開した。即ち１５世紀の「フス」の宗教改革運動の発端はプラハで、教会を非難して聖書と直結する福音を民衆に説いた。

【フスはプラハ大学の学長も務めた宗教改革者（プロテスタント）で、神聖ローマ皇帝と長期の抗戦をしている】

フス派戦争以後、ボヘミアの実権を握ったのは、短期間を除いてオーストリアのハプスブルク家である。この王朝はウィーンに中心をもち、プラハの政治的重要性は徐々に弱まっていった。

１６１８年に始まった３０年戦争の契機となった事件もプラハで起こった。これはボヘミアのプロテスタント貴族が、カトリック信仰を武器に中央集権化を推進しようとするハプスブルク朝に逆らい、ドイツのプロテスタント派のファルツ伯を国王に据えたことが発端であった。

【３０年戦争は１６１８～４８年までドイツを舞台に欧州諸国間で行われた、旧教派と新教派の宗教戦争】

３０年戦争後のボヘミアはハプスブルク家の属領的存在となり、ドイツ化とカトリック化の進行する中で、プラハはドイツ人の支配する町となり、１７世紀の半ば以降は一地方都市に堕落した。

１８世紀に入るとプラハは、オーストリアとプロイセンの戦争で幾度となく戦場となったが、オーストリアはボーミアの産業の育成につとめた。プラハは経済的に活況を呈し、豊かな商人や貴族は著名な建築家や芸術家を招き、町はバロック様式の建造物で飾られた。

殊に１８４５年のウィーン～プラハ間の鉄道敷設後に始まる産業革命で、プラハはハプスブルク帝国内での最大の工業都市に発展した。

１９１８年１０月２８日、プラハでチェコスロバキア共和国の創立が宣言されて首都となり、大プラハが建設された。

１９３８年にはプラハはドイツ軍に占領されたが、４５年にソ連軍によって解放された。６８年の「プラハの春」というチェコスロバキアの自由化運動は、ソ連の率いるワルシャワ条約機構軍の侵攻によって失敗した。

以上のようにフス戦争、ハプスブルク家の支配、３０年戦争、第１次大戦、第２次大戦、プラハの春、そして１９８９年の民主革命といった歴史の波を経験し、その度ごとに街は輝きを増し、魅力的に発展してきたのである。

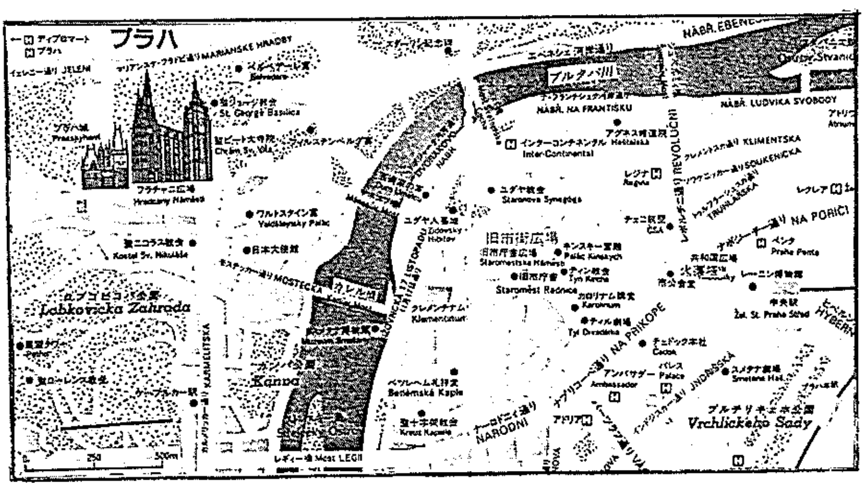
私がプラハを訪れ見聞したことで特記すべきことは下記の通りである。

ベルリンの壁が崩壊して間もなく、チェコ独裁政権は市民の抗議運動によって崩壊した。無血の「ビロード革命」を果たしたチェコで、国営企業の解体などの経済変革も順調に進んだ。自由経済が花開いたチェコに欧米企業が進出し、古都プラハの今は建設ラッシュである。

しかし我が世の春を迎えたはずの変革が、予期しない方向に進んでいるのであった。政治と経済の変革に機敏に適応したのは、共産党独裁に抵抗した「自由に憧れる人」ではなく、共産党官僚たちであると言われている。

彼等は旧経済体制を牛耳ってきたノウハウを存分に利用し、利権を温存していたのである。市場経済が軌道に乗ってみると、民営化された企業の重役は旧国営企業の幹部ばかりで、一般市民の不平の声が聞かれたのである。これはチェコに限らず、これから訪れる東欧諸国も大同小異であった。

プラハ市内観光 (下図参照)



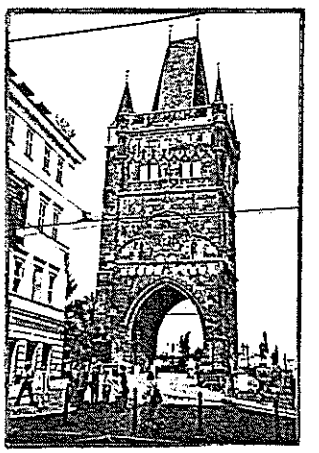
人口１００万のプラハの町を２分するように蛇行するブルタバ川には、幾つかの橋が架っているのが見えていた。

一行は先ずプラハで最も美しくて古いカレル橋の東の袂で下車した。（上の地図の中央より、やや左の橋がカレル橋）

「カレル橋」

プラハの名所の一つであるこの橋は、１３５７年にカレル４世によって造られたため、この名がつけられた。またヨーロッパ最古の石橋として世界的に有名である。

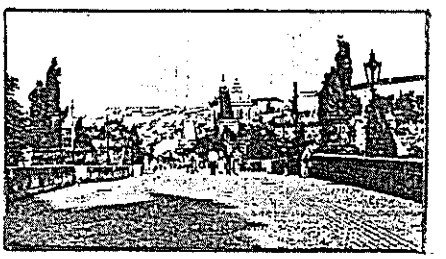
ブルタバ川には１０世紀から東西の両岸を結ぶ木製の橋が架っていたが、その後、石橋に変えられた。しかし１３４２年の大洪水で破壊され、その後に再建されたのが全長５１６ｍ、幅１０ｍの現在のカレル橋であった。



橋の両端にはゴシック風の塔が立ち、橋の景観を一段と美しいものにしていた。橋の上は歩行者天国で車両の通過は一切認められず、観光客も市民も自由に散策を楽しむことが出来るのであった。

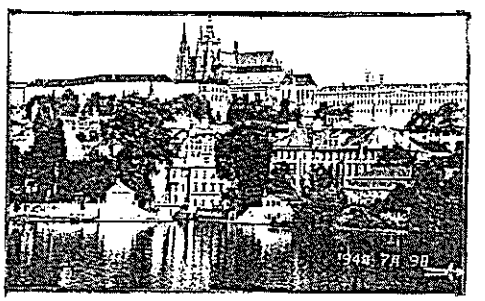
（右上の写真はカレル橋の両袂に立っている門のある塔）

ゴシック様式の建築の粋を結集したカレル橋の両側の欄干上には、後のバロック時代に造られた１５対、３０体の像が飾られていた。



それらは聖書にちなんだ聖像で、聖母マリア、聖ヨセフ、聖フランシスコ・ザビエル、聖ヨハネなどの像で、カトリツクの国らしい景観を呈していた。（右はカレル橋と立ち並ぶ聖像の群）

橋の上からブルタバ川の西側に視線を伸ばすと、向こうの丘の上には建築複合体ともいうべきプラハ城や美しい宮殿が見え、数多くの尖塔や、いろいろな形をした教会の屋根が、一幅の絵のように調和した姿を現わしていた。

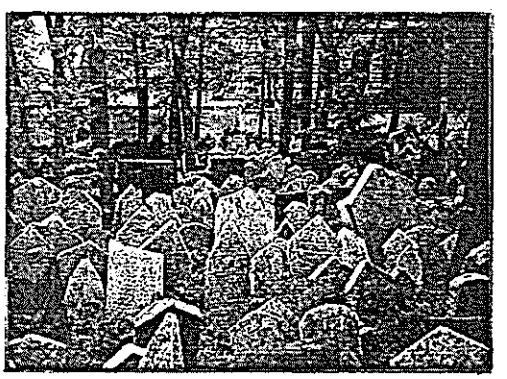


（右の写真はカレル橋の上から眺めたプラハ城一帯の景観）

ブルタバ川に美景を映すプラハ城を眺めながら橋の西端まで歩いた。そこから反転して戻る橋上から眺める旧市街（川の東側）は、中世以来１０００年以上の長い歴史をもつ優美な街並みであった。

ユダヤ人街（４４頁地図の中央河畔）

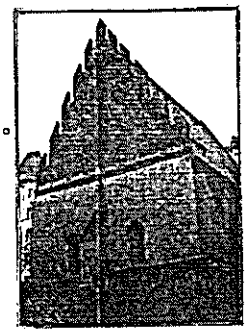
カレル橋から１１月１７日通りを北に進んだところがユダヤ人街で、その一隅にユダヤ独特の墓石が所狭しと林立している、ユダヤ人墓地が見えてきた。



ここには１万２千もの墓石が残り、１３５０年頃の墓石もあるヨーロッパ最大規模のもので、石板が折り重なるように立っており、中にはゴシック様式の見事な墓石もあるらしい。（右は折り重って立つユダヤ人墓地）

墓地を通り過ぎるとユダヤ人街であった。１０９１年には既にユダヤ人の二つの集

落が存在していたと言われ、第２次大戦が終わるまでこの地にユダヤ人が住み続けていたのであった。



ユダヤ人街に入るとゴシック様式のユダヤ教の教会（ユダヤ教ではシナゴーグと呼ぶ）が建っていた。新旧シナゴーグと呼ばれるこの教会は、ヨーロッパに現存する最古のシナゴーグであった。

三角形の屋根は鋸の歯のように切り込まれ、真っ白く塗り潰した教会が、まとまって建っているのも特徴である。

１３世紀に建てられたこの教会は保存状態がよく、当時のままの信仰の様子を窺い知ることが出来るのであった。

（右の写真はユダヤ教の教会「シナゴーグ」の風変りな建築）

回顧すればユダヤ人にはいつも迫害の歴史が付きまとい、このプラハも例外ではなかった。１５４１年と１７４４年には、ボヘミア全体からユダヤ人を追放するという迫害が発生している。

第２次大戦中、ユダヤ人を撲滅しようとしたヒットラーの支配下にあったプラハに、このようなシナゴーグが残っているのも一見奇異な感じを抱かせていた。

この町からも多くのユダヤ人が捕らえられて行った。しかし実はプラハを占領したヒットラーが、ユダヤ人の博物館を計画していたから破壊から免れた。逆にシナゴーグが保存されるという皮肉な結果となったのである。

現在のユダヤ人街は旧市街の様相と殆ど変わらない街並みで、我々はユダヤ人街の直ぐ南に続いている、プラハの歴史の表舞台であった旧市街広場へと向かった。

「旧市街広場」（４４頁地図中央付近）

広場の一角に下車すると、そこには１０世紀頃からプラハの中心として栄えた広場が広がり、ヨーロッパの中でも中世の面影を色濃く残す、美しい町という感じが充溢していた。

神聖ローマ帝国の帝都であった１４世紀後期のゴシック様式の建造物や、１５～１８世紀のルネッサンス、バロック、ロココ様式の建物が櫛の歯のように林立し、天高く突き刺さるように聳える尖塔は、プラハのシンボルのようであった。

この広場はプラハで起こった歴史的な事件の中心となった場所で、１５世紀のフス戦争の指導者のフスの像が中央に鎮座していた。

（フス戦争の記事は４３頁参照）

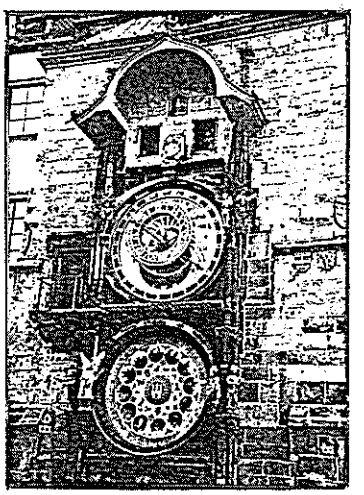
広場にはまた土産品を売っている店や屋台が軒を連ね、観光客向けの馬車がたむろしていた。そしてテラスではビールやワインを傾けながら話に興じている市民の姿もあり、社会主義政権下では見られなかった開放的な雰囲気が溢れていた。

（上の写真は二本の尖塔のあるティーン教会と、手前の塔の建つ市庁舎、及び群衆）

広場の東側にある高さ８０ｍの尖塔が聳えるゴシック様式の教会は、１３６５年に創建された「ティーン教会」であった。１４～１６世紀にかけて幾度か増築され、シ

ンボルの２本の尖塔は１５～１６世紀にかけて立てられ、それぞれアダムとイブを意味していると言う。

広場の西側にある高さ６９、５ｍの尖塔のある建物は旧市庁舎で、ティーン教会とともにプラハ市民を動かした歴史を見守ってきた、由緒ある建造物であった。

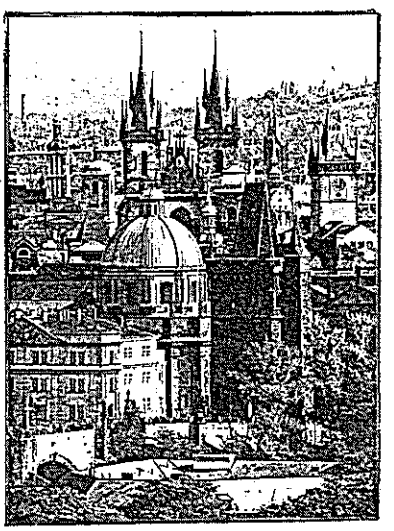


旧市庁舎で特に有名なのは、塔の南面にある２つの円形の天文時計である。１５世紀に作られた天文時計は、天動説をもとにしたデザインで、当時としてはとてもユニークなものであったようだ。

毎正時には上部にある２つの四角い窓から、キリスト１２使徒、死神、鶏などの人形が顔を出す仕掛け時計になっている。ガイドは我々にプラハの名物時計を見せたいと、時間に合わせて案内したのであった。

（右の写真は旧市庁舎の天文時計の上にある四角い窓から人形が顔を出した瞬間である）

天文時計の人形を拝見したのち自由時間となり、石畳の広場をのんびりと散策していた私は、「プラハの春」事件でソ連の戦車が蹂躙する前に立ちはだかった若者たちの姿を思い出し、救国の熱血に対して声援を送ったことを懐古していた。



当時はテト攻勢によってベトナム戦争が新しい局面に入って間もない１９６８年の夏であった。ソ連を先頭にワルシャワ条約機構軍の戦車隊が侵入した事件は、ペレストロイカの発端として我々の注目を集めた。

そのころ中国はソ連とは不倶戴天の敵対関係にあり、中国人民日報はソ連を社会帝国主義と決め付けたことが、昨日のように思い出されるのであった。

典雅な町並みとは対照的に永い歴史の中で征服と支配、戦争と平和が繰り返された土地には、多くの人々の血と涙が染み込んでいると思いながら、我々は別れを惜しむように広場から離れたのである。

旧市街の一角にあるレンガで積み上げられた旧要塞の通路は一段と高くなっており、その城壁の上からの眺望は「黄金のプラハ」「百塔の町」の実感を味わうのに相応しい景観で、中世と現代の建物が混在しながら見事なコントラストを保っていた。（右の写真は旧要塞から眺めた百塔の町の景観）

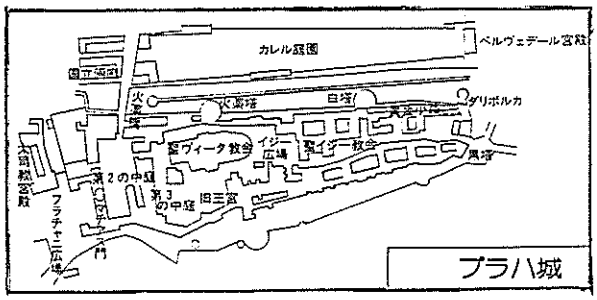
ゴシック、ルネッサンス、バロックの様々な様式が織り成す、中世そのままの百塔の町の光景を堪能しながら東へと進み、石畳の道を降りたところが「火薬塔」であった。

火薬塔はもともと旧市街を守る城壁の一部として、１３世紀に立てられたものであった。しかし１５世紀の終わりにはその機能を失い、１８世紀の中ごろまで火薬庫として使われてきた。そのため現在では火薬塔という名で市民に親しまれ、今もよく保存されている。

高さ６５ｍの火薬塔の尖塔に登り、そこから見下ろす俯瞰はさぞかし百塔の町を実感させるものだろうと想像しながら、旧城壁の名残りとも別れなければならなかった。

「プラハ城」（位置は４４頁地図の左上で、右下地図参照）

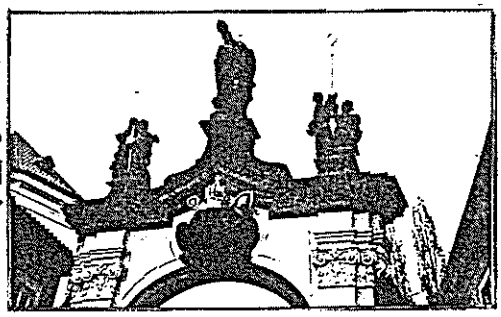
高貴な気品に富んだ絵のように美しい旧市街を離れ、「前人樹を植えて後人涼むを得」という諺のように、先人の恩恵に浴しているプラハ市民の幸福を感じながら、ブルタバ川の西の丘に立つプラハ城へと進んだ。



バスはプラハ城の前にあるフラチャニ広場に停車し、我々はプラハ城の表門であるマチアス門に進んだ。

黄金の王冠を飾った門の上にはカレル４世の像が立ち、彼の業績をたたえていた。（上はプラハ城の配置図）

この一帯は９世紀には貴族の舘があったと伝えられ、１４世紀にチェコの父と呼ばれるカレル４世によって現在のように完成した。



９世紀から１９１８年までは王の居城であった、その後はチェコスロバキア連邦共和国の大統領府が置かれ、現在はチェコ大統領官邸となっている。

（右の写真は王冠を飾ったマチアス門）

マチアス門を通過すると第２の中庭がひらけ、続く第３の中庭の正面が旧王宮で、一目王宮前で行われる衛兵交替の光景を見ようとする群衆が殺到し、広場の内外を埋め尽くしていた。（右は王宮と群衆）

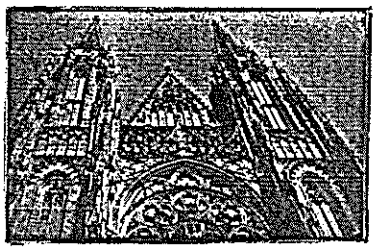
１３世紀から王宮として住居にも使われてきたが、１７世紀に入りハプスブルク家の支配時代以降は、主に執務を行う場所として使われていた。（右の尖塔は聖ヴィータ教会）

このように時の王によっていろいろな利用のされ方があったが、基本的には王宮の重要な催しに利用されていた。また王宮前の広場から百塔の町のプラハを望む展望は素晴らしく、感嘆の声を発したいほどであった。（右は王宮と聖ヴィータ教会）

栄華を極めたカレル４世によって築かれたプラハ城には、王宮の他に聖ヴィータ教会や聖イジー教会が立ち、聖ヴィータ教会は市内で最古のものであった。

王宮の北側の広場に建つ聖ヴィータ教会の尖塔は、他を睥睨するように天高く聳え、写真を撮ろうとしても、ファインダーの中に納まらない。

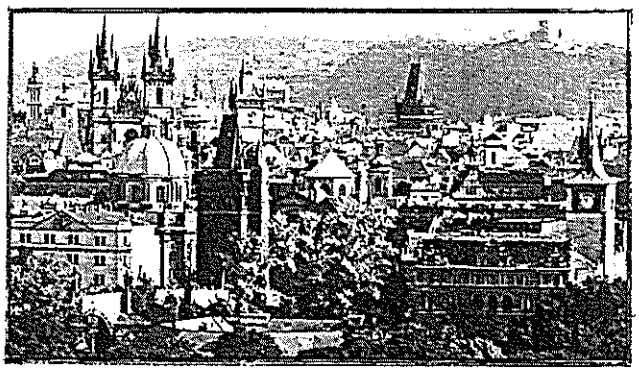
この聖ヴィータ教会はプラハ大聖堂とも称したボヘミア王国の墓所であり、権力の象徴として建てられたボヘミア王国のシンボル的存在である。９２９年に造られた教会を基礎にカレル4世の時、１３４４年にゴシック様式に改築が開始され、２０世紀半ばに完成を見たのである。（右は聖ヴィータ教会の尖塔）



屋根はバロック様式、聖堂の西側はゴシック様式という具合に、完成まで時間が長かったため、随所に様々な建築様式を見せていた。

王冠を飾った宝石のような「百塔の町」「黄金の街」の見学は、プラハ城の見学をもって終了することになった。

（右は王宮前広場より眺めた百塔の町プラハの美観）



ボヘミア王や神聖ローマ皇帝が住んでいた１０００年に及ぶ歴史は、現在もなお歴史的建造物として保存されている。

ここに主な建築様式の特徴を記しておきたい。

① ロマネスク
　１１～１２世紀。厚い壁、太い柱、半円アーチを持っている。

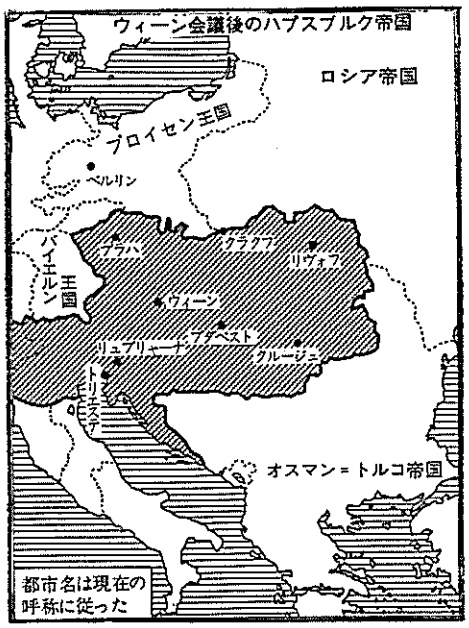
② ゴシック
　１３～１５世紀。尖塔、トンネル型交差天井を持っている。窓格子やステンドグラスが使われているものもある。最初は宗教建築のためのものであったが、都市の発達に伴い市庁舎や邸宅にも使用されるようになった。

③ ルネッサンス
　１５～１６世紀。平面や立体が対象形になっており、各部屋が目的別に配分されている。さらに外部に向かって秩序と威厳を重視した重厚な造りになっているが、中庭側や室内は開放性や快適さを重視している。

④ バロック
　１６～１７世紀。権力と財力を背景に、絵画、彫刻、光線などさまざまな技巧を駆使している。巨大なドームを持っている建築物も多い。

プラハの紀行文の終わりに当たり、訪れたポーランドやチェコ、これから訪れるスロバキアやハンガリーなどの歴史を知る上で、ハプスブルク家（帝国）の歴史は欠くべからざることである。その意味から次に「ハプスブルク帝国」の概要を記しておく。

ハプスブルク家（帝国）（下図参照）



「ドナウ帝国」とは嘗てのハプスブルク帝国（オーストリア帝国））の又の呼び名である。それは第１次大戦の結果、１９１８年に世界地図から姿を消した。

その領域は、その長い歴史の間に絶えず変化したが、消滅時には今日のオーストリア、ハンガリー、チェコ、スロバキアを中核とし、ポーランド南部、ソ連・ウクライナ西部、ルーマニア中・北西部、ユーゴスラヴィア北部、イタリア東北部を包含していた。当時のヨーロッパでは大帝国であった。その領域がドナウ河一帯に広がっていたことから、「ドナウ帝国」と呼んだのである。

それは今世紀の初めには実際に存在していた国である。したがってこの帝国の面影は、ドナウの世界にはまだ様々な形で色濃く残されている。

その遺産は帝国が瓦解した後も、更に、第２次大戦後の社会主義政権下でも死に絶えることはなかった。そして今日解放された旧東欧諸国の間で、長いその歴史の中で育てられた彼らに共通の精神や感情が、新しい生命を獲得して蘇りつつあるようだ。

６００年以上にわたって存在したハプスブルク帝国（家）とは、どんな国であったのであろうか。簡単にその歴史を繙いてみる。

ハプスブルクの名は、スイスの小領主ハプスブルク（鷹の城の意）に由来している。ハプスブルク家は元来、東方の異民族に対する備えを任とする辺境伯にすぎず、彼らの所領のオーストリアとは「東の国」という意味である。

この東方の辺境の国も、ルドルフ（ハプスブルク家の興隆の基礎を確立）の代になつて、神聖ローマ帝国（ドイツ帝国）の皇帝の地位を手にし、更にライバルのボヘミア王オタカルをウィーン郊外のマルヒフェルトの決戦で破ってから、家運が開けた。この勝利の年１２７８年をもって、ハプスブル帝国の歴史の始まりとされている。

ハプスブルク帝国が急速に発展したのは、１５世紀後半から１６世紀前半にかけてであった。これはハプスブルク家が得意とした政略結婚によるところが大であった。王家間に婚姻を結ぶことによって、結果的にヨーロッパの帝国として発展するチャンスを掴んだのは、マキシミリアン１世であった。

ハプスブルク帝国の領域は、スペインとその植民地メキシコとペルーにまで及び、「日没を知らぬ世界帝国」と言われるまでに拡大した。時、恰も大航海時代である。

その後スペイン王家はオーストリア系から分離され、フランスのブルボン王家に帰属することによって消滅した。もともとヨーロッパ東辺の一勢力にすぎなかったハプスブルク家が、西欧文化との接触の機会をもったことは、その後の発展の上に重要な

意味を持ったのである。

結局ハプスブルク帝国は、東でも西でもない中央ヨーロッパの国家として発展するが、その基礎はマキシミリアンによる二重婚姻によって築かれた。即ち彼は孫のカール５世の弟と妹たちを、ハンガリー・ボヘミア王家の王女および王子と縁組みを結ばせたのである。

ハンガリー・ボヘミア王が没したあと嫡子がなかったため、弟のフェルジナント１世は、ハンガリーとボヘミアの王冠を手にすることになった。

さらに１７世紀末には、当時ヨーロッパ制覇を企んでウィーンまで迫ったトルコ軍を駆逐することによって、トランシルバニア（現在のルーマニア中・北西部）を獲得して、ドナウ中流域を掌握し、中央ヨーロッパへの支配を揺るがぬものにした。

１８世紀にはポーランド分割に加わることによってポーランド南部を手に入れ、さらに１９世紀に入りウィーン会議の結果、北イタリアへも領土を拡大した。

しかし１９世紀の半ば、この欧州の大帝国にも転機が訪れた。１８４８年に欧州を吹き荒れた市民革命の嵐はウィーンをも襲い、それが領内の民族運動を燃え上がらせることになった。

さらに１８６６年、オーストリアがプロイセンとの戦いで大敗したことは、国内的には多民族国家存立の基盤が大きく揺るがされる結果をもたらした。

翌年、ハンガリー人に独立的地位を認めた二重帝国が成立するが、これをきっかけにボヘミア人（チェコ人）の間でも、ハンガリー人並みの独立を要求する運動が高まった、

こうしてハプスブルク帝国は、内外の危機が深まってゆく中で第１次大戦の勃発を迎え、敗戦とともに栄光の歴史に終止符を打ったのである。

振り返ってみるとハプスブルク帝国の特徴は、領域内に言語、文化を異にする多くの民族を抱えながら、６００年以上の長きにわたって存続し続けたことであろう。そして帝国の維持が、必ずしも武力や強権のみに依存するものではなかった点である。

１５～１６世紀にかけて帝国が急発展したのは、政略結婚が功を奏したと前記した。１７～１８世紀にかけて、トルコやプロイセンにより帝国が存立の危機に立たされた時代には、フランスを始め内外から集められた逸材が、英知を尽くして国難に当ったからこそ、国の存続を長くさせたのである。

結局、ハプスブルク家特有の超民族的な思考が共同体意識を育て、それが強力な求心力となって帝国を支えたのではないだろうか。

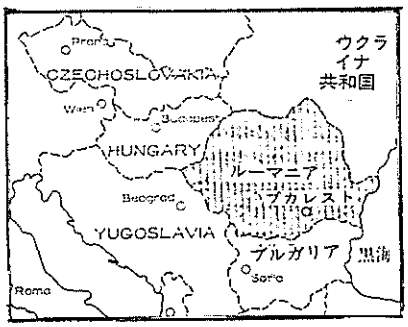
ハプスブルク帝国の崩壊と後継国家の独立は、これらの国民に幸福をもたらしたであろうか。第２次大戦後、これらの国々はソ連による苛酷な支配の下で、４０年以上も自由を奪われ、低い生活水準を強いられてきた。

この間、５６年にはハンガリーで、６８年にはチェコスロバキアで、抑圧からの解放を求める運動が起きたが、いずれもソ連の戦車の下に粉砕された。

ハプスブルク帝国の崩壊と諸民族の独立、ナチスの暴力とそれに続くソ連の支配といった長くて苦しかった時代を経て、現在、東欧の人々は解放という新しい歴史を築いている。

7月10日　（日）曇・小雨

ルーマニアの首都ブカレストへ



中世がそっくり博物館のように保存されていた、プラハの優美な街並みにも別れを告げ、市郊外のルズイネ空港を８：３０に離陸し、いよいよバルカン半島の旅へと飛翔した。

ルーマニアと聞けば連日に亘って日本のテレビを賑わした民主革命の映像が瞼に浮かび、１９８９年のチャウシェスク大統領が失脚したルーマニア革命が思い出されるのであった。

ルーマニアの歴史を繙くと、紀元前から栄えていたダキア人の国家が存在していたが、１０６年にローマ人の支配下に入った。

ローマ人はドナウ川流域を支配するため、紀元前から４世紀に至る約４００年間もドナウを支配した。それはゲルマンの侵入に備えるためであった。

その後、１世紀の間にローマ人が持ち込んだ文化や習慣により完全にローマ化した。これがローマニア、つまりルーマニアという国名の語源となり、東欧ヨーロッパでは唯一のラテン系の民族となったのである。

東ヨーロッパ各国の民族はスラブ系が主流だが、ルーマニア民族は現在でもローマ帝国の末裔という誇りを持ち、ラテン系言語の孤島となっている。だからイタリア語をマスターしていればルーマニア語は理解できるという特殊な国柄で、民族の大移動の時期にも、彼等は山間部に分散避難して小さな公国を作っていた。

中世以降、宗教（東方正教）を始め文化的にはビザンティン文化圏に属していたが、ビザンティン文化圏とカトリック文化圏（ハンガリー、ポーランド）の境界地域に居住していたため、政治的にも文化的にも両文化圏の影響を強く受けていた。

ビザンティン帝国に代わってオスマントルコがヨーロッパを支配するようになると、一時的に貢納国になったが、ギリシアやブルガリアのようにオスマントルコ帝国に編入されなかった。

１８世紀にオスマントルコ帝国が弱体化してオーストリアとロシアが台頭すると、政治的にはロシア、経済的には西欧先進国への従属を強めた。

クリミア戦争ではロシアが敗北したが、１８７７年の露土戦争ではルーマニアはロシア側につき、戦後ルーマニアの独立が承認されて王国が建設された。

２０世紀に入り第１次大戦では当初は中立の立場であったが、オーストリア・ハンガリー内のルーマニア人居住区の併合を条件に連合国側に立ち、オーストリア・ハンガリー、ドイツ、ブルガリアと戦争状態に入った。そしてルーマニアはブカレストを占領された。

オーストリア・ハンガリー二重帝国が崩壊の危機に瀕していた１９１８年１２月１日、ルーマニアの統一を宣言し、第１次大戦の講和条約では戦勝国に加えられ、多年の宿願であった独立が実現した。

第２次大戦では日独伊三国協定に加盟し、１９４１年６月に対ソ戦に参加した。し

かし４４年８月、ソ連軍はルーマニア領土に反撃を開始し、敗戦後はルーマニア人民共和国が誕生したのである。

戦後のルーマニアの共産党は東欧では最もソ連に忠実で、それはスターリンの死まで続いた。しかしその後はソ連への全面的追随はせず、社会主義国に属しながらソ連と一線を画した。

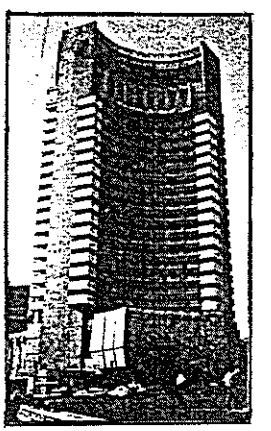
１９６５年に政権の座に就いたチャウシェスク書記長（当時）は、西側諸国から脚光を浴びた。１９６８年のチェコ事件ではルーマニアだけが軍事介入を拒み、ソ連・東欧諸国のボイコットしたのを後目に、１９８４年のロス・オリンピックに参加している。

しかし自主外交に代表されるチャウシェスク路線も、国内の大犠牲の上に成り立っていた。だから西側に接近したことによって共産党が動揺しないように、政治体制を厳しく引き締めたのである。

１９８０年代初めにあった約１００億ドルに及ぶ対外債務は、これを返済するために国民生活は切り詰められ、１９８９年までに対外債務は完済された。

こうした強引な政策が招いたチャウシェスク体制の負の遺産は重く、１９８９年１２月２２日、民主革命によって共産党は崩壊したのである。

飛行すること約３時間、我々の搭乗機は人口２３７万のブカレストのオトペニ空港に１２時丁度に着陸した。人口２３２７万のルーマニアは日本の３分の２の面積で、大陸性と海洋性及び地中海気候の影響を受け、温度計は２１度を指していて真夏ながら涼しく感じるのであった。



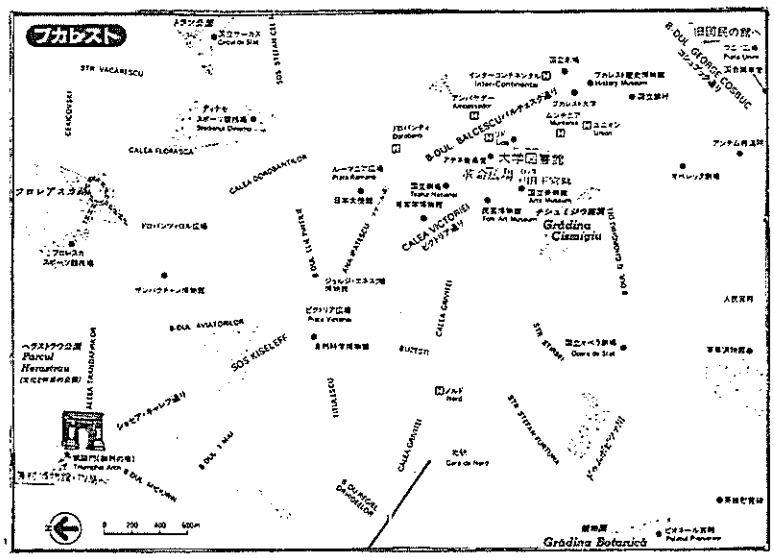
前記したとおりトルコ、ロシア、オーストリア・ハンガリー帝国といった大国の狭間にあった小国ルーマニアは、牧歌的で素朴な感じが満ち満ちていて、ポーランドやチェコと違った風土が漂っていた。

市の中心部までの約１５㎞の街道は濃い緑が生い茂り、人も車の数も少ない町並みは寂れかえり、共産党が古い文化遺産を取り壊した跡が歴然と目に映っていた。

疲弊して人影の疎らな市内の石畳の道路だけが中世の姿を遺すブカレストで、我々は先ず宮殿式の古風なレストランで昼食を摂った。その後、民主革命の中心となったブカレスト大学の前に聳え立つ、２２階建ての国内最高級のインター・コンチネンタル・ホテルに旅装を解いた。（上の写真はルーマニアを代表する宿泊したホテル）

支配されたことはあったが、支配したことのない国のルーマニアに足跡を印し、インター・コンチネンタル・ホテルで休憩したのち、午後４時から市内観光となった。

ブカレスト市内観光（下図参照）



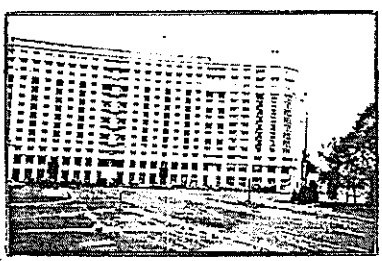
１４世紀の初め頃、この地方の封建領主がブクレシュティに砦を築いたことが知られている。恐らく前から小さな村として存在していたのであろう。

ブクレシュティはブクレスクという人名に由来しており、これがブカレストの名称の由来とされている。それは更にこの土地がローマ帝国に征服される以前の原住民の言葉であった、ダキア語のブクル（美しい意）に由来しているらしい。

「ローマ人の言葉を話す人々の土地」というルーマニアの観光地は、黒海沿岸地帯が主体で、ブカレストの市街は観光資源に乏しく、我々は先ず市北部から半日観光が始まった。

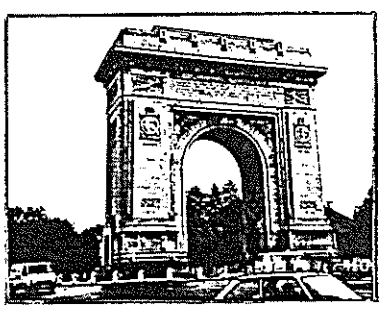
「北部地区」（上の地図参照）

中心街に建つインター・コンチネンタル・ホテルからビクトリア通りを北進し、ビクトリア広場で下車して写真撮影となった。（右はビクトリア広場の景観）



ビクトリア広場からは幾つもの道路が放射状に伸びており、バスは空港から来た街道を北に走って凱旋門の広場で停車した。

ルーマニアは第１次世界大戦では連合国側に参加し、そのために戦勝国の一員となった。この凱旋門は第１次世界大戦の勝利を記念して、１９１９年に建立したのであった。（右は現在の凱旋門）



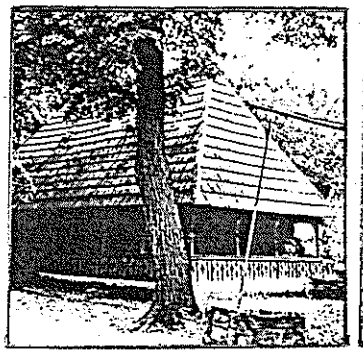
当初は木造の小さなものだったが、１９３６年に現在のような白い石造りの門に改築され、表面にはルーマニアを代表する彫刻家による彫刻が施されていた。

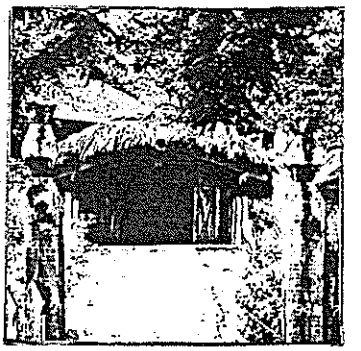
凱旋門のあるロータリーから伸びる通りには、緑の美しい菩提樹やマロニエの並木が続いていたが、繁華街から遠く離れているためパリの凱旋門のシャンゼリゼのような賑わいは見られない。

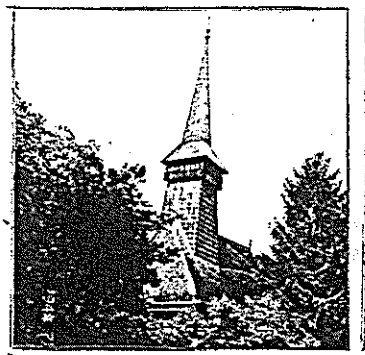
勝利の塔である凱旋門から広がる北側一帯は市民の憩いの場として緑が青々と茂り、一種の自然公園となっていた。

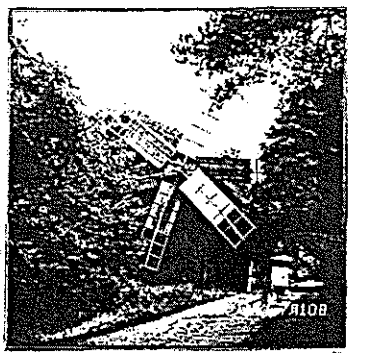
その中でも最も大きく緑が広がっていたヘラストラウ公園（文化と休息の公園という意）の中に、「村落博物館」があり、三々五々と観光客の姿が見えていた。

１９３６年に完成した農村博物館とも言われる村落博物館は、鬱蒼とした森林や湖沼のある広大な敷地の中に広がり、日本の明治村や江戸村のような野外民族博物館であった。





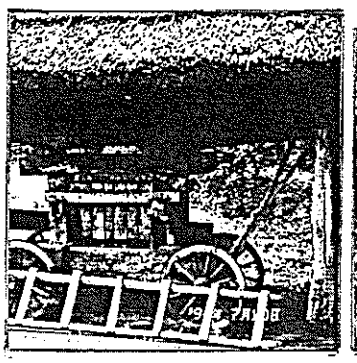


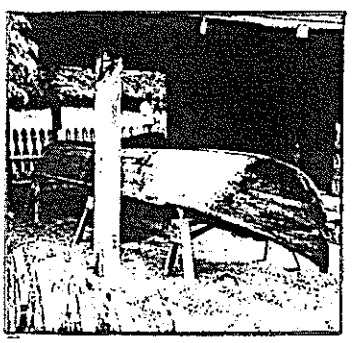


生憎の降雨のために泥濘となった広い公園の中を歩いて行くと、ルーマニアの各地方、各時代の農家や教会、風車小屋などの古い建造物が２００棟以上も集められていた。

（右上の写真２枚は農家の代表的な住居で、下の写真は教会と風車小屋、いずれも１７７２年の創建である）

よく保存されている家屋の内部には、当時使用されていた伝統的な家具や調度品から装飾品などが展示され、各時代の生活様式が興味深く想像されるのであった。





この野外民族博物館を巡回していると、隣国ブルガリアの古都タルノボで見たエトラ民族野外博物館が思い出され、バルカン半島は何れも似ている生活様式であった。（上はブドウ酒の圧搾機と小舟）

数多く生えている樹木の中でも、アカシアの木とサクランボの木の合木は珍しく、強く印象に残っているが、館内には絵葉書も売っていないのは矢張り後進国であった。

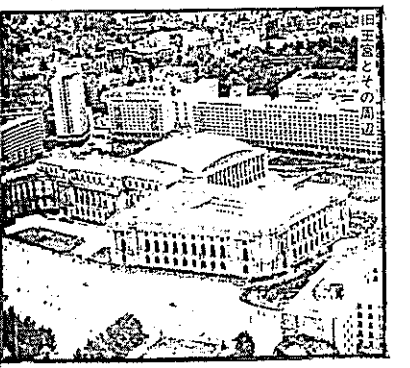
地図を拡げてみると村落博物館の直ぐ北側が、チャウシェスク独裁政治打倒に大きな役割を果たした、ルーマニア・テレビ局であった。

革命の中心となった救国戦線はこのテレビ局を本部として指令を流し、全国民に呼び掛けたのである。放送局を革命派が占領したことによって市民は何が起きているのかを知り、内戦も大きな混乱もなく収拾したのであった。

遠く離れた日本の茶の間でも刻々変化する光景が衛星放送を通じて放映され、チャウシェスク大統領とエレナ夫人の裁判から処刑までの一連の画像が思い出された。

「革命広場」（旧共和国広場）周辺地区（５４頁地図の中央よりやや右上）

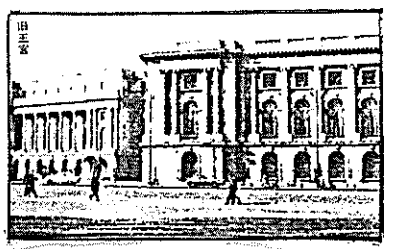
村落博物館の見学を終えた我々は再びビクトリア広場を通り、市の中心部にある「旧共和国広場」と称される「革命広場」へと進んだ。



今世紀の初めに整えられたという現在の街並みには酒落（シャレ）た建物が点々と残り、広々とした並木通りや公園の緑が優しく目に映ってきた。するとそこに、がらんとした石畳を敷きつめた広場が現われた。

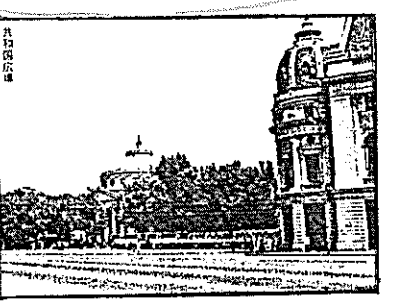
これが１９８９年１２月、世界中に報道された広場で、激しい銃撃戦が行われた場所であった。あの冬の日に群衆が押しかけ、叫び続けていた革命の舞台は今は静まり返り、我々は当時の映像を瞼に浮かべながら降り立ったのである。（上は旧王宮とその周辺の景観）

広場の西側には旧王宮（現在は大統領府）があり、その王宮の一部がルーマニア最大の国立美術館となっていた。広場の東側には治安部隊が立て籠もり、猛火に包まれた大学図書館（現在修理中で３００万冊の蔵書が焼失）や、旧共産党中央委員会の建物も見えていた。（右は旧王宮の建物）



かつての王宮は第２次世界大戦後は共産党政権の政庁となり、１９８９年の革命でチャウシェスク大統領が最後の演説を行った有名な場所で、革命後は観光名所の一つになっている。

１９１８年生まれのチャウシェスクは、なまけものの靴職人出身で、１９４６年にロシアに行き政治学を学んだ。スターリン時代に大統領が亡くなると、軍を掌握して実権を手中にしたという経歴で、社会主義国家の頭領はどこも似たり寄ったりである。



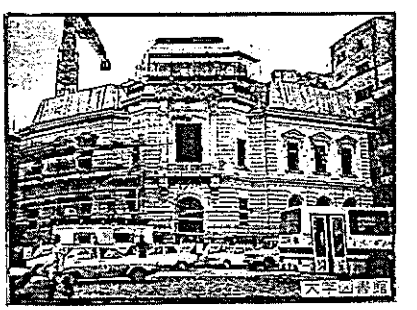
〔右は旧共和国広場（現革命広場）の景観〕

旧共和国広場から我々が宿泊しているインター・コンチネンタル・ホテルの前を通り過ぎると、１８６５年創立のブカレスト大学と大学広場であった。

この大学広場も１９８９年の革命では、最初の大規模な反チャウシェスク集会の舞台となり、軍の発砲で多くの若者が命を落とした所であった。

現在でも中国の天安門事件にちなんで「天安門」という落書きが残っていると伝えられている。

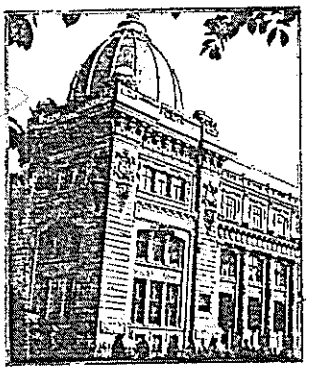
（右の写真は戦禍を修理中の大学図書館）



ブカレスト大学を最後に数々の流血の舞台となった場所を去り、新しい町造りが進められている市街地区を離れて、バスは雨上がりの中を市南部の郊外へと疾走した。

「南部郊外」（５４頁地図の右上）

我々日本人の意識の中には、市街というものには丘があり谷があり、川もあって起伏が多く、坂道とか川辺の風景が欠かせないものだという気持が強い。しかしブカレストの町は広々とした平原の真っ只中にあり、日本のような情緒に乏しいようである。

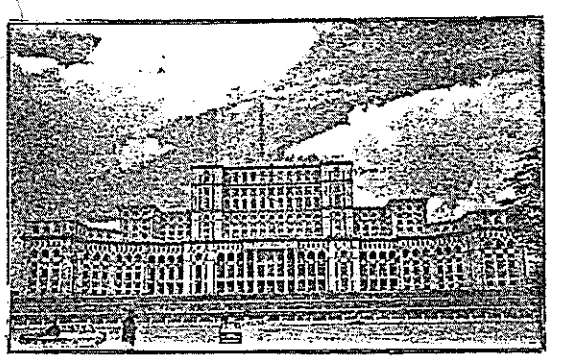


（上はブカレスト大学）

特に町の中に川が流れていないのは、町の景観にとって致命的だと思っていると、バスはブルガリアの陸軍士官学校の前で停車した。校門の傍らに立っていた陸海空の樫の像は三軍の協力を求めており、日本の旧軍のような縄張り争いを戒めていた。（樫は勝利を意味していると言われている）

第１次世界大戦中はドイツ軍の本部として使用されていたという陸軍士官学校を通過すると、直ぐ目の前に大きな広場が展開し、前方の奥深くに巨大な建築物が白く霞んで見えていた。

この建物が「国民の舘」とか「人民宮殿」と称される殿堂だが、実質的にはチャウシェスクが自分の棲む宮殿として造らせたものであった。



（右は旧国民の舘の絢爛豪華な全景）

遠くから眺めてもなお巨大に見える白い建物は、バッキンガム宮殿やフランス大統領府のエルゼ宮殿も遥かに凌駕する規模であり、我々は驚異の眼で見なければならなかったのである。

部屋の数は２０００とも３０００とも言われ、一説では７０００とも言われている。そして大きいものは一つの部屋の広さが７００坪もあり、米国のペンタゴン（国防省）に次ぐ世界第２位の建造物は、見る人を唖然とさすばかりであった。

地上１１階、地下６階の内装は、目映いばかりのルーマニア特産のピンクの大理石や、金銀のシャンデリアで飾りたて、地下にはチャウシェスク大統領夫妻や側近用の核シェルターまで設備されていると言われている。

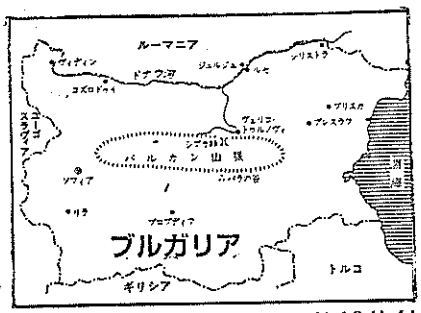
工費はルーマニア経済を揺るがすほどの破天荒なもので、革命後は建築が中止され、現在は未完成のまま放置されている。新名称も定まらず、将来の使用法は如何なっているのであろうか、と他国のことながら案じられるのであった。

巨費を投じた宮殿の完成を待たずに独裁者は倒れた。広場に面した高いテラスの上から演説をして喝采を浴びることも、すべて夢の跡となった。荘厳な落日は権力者の見果てぬ夢であり、洋の東西を問わず終わりを完うできる者は少ないようである。そして私は評価の基準は結果だと眺めていた。

因果応報、驕（オゴ）る者は久しからずと思いながら、栄華の夢を極めようとしていたチャウシェスクの舘を去った。都市の形成はローマ人の得意であったが、ルーマニア人がローマ化されて独特の伝統をもつと言われる市内は極端に疲弊し、半日観光で私の印象に残ったものは、素朴な自然と革命の傷跡だけであった。

7月11日　（月）雨のち曇

ブルガリアの首都ソフィアへ（下図参照）



ブカレストの夜は真夏とは思われない寒さで、早朝の４時に起床して風呂を浴び、ルームサービスの朝食を済ませて、インター・コンチネンタル・ホテルを暗闇の５時３０分に出発した。

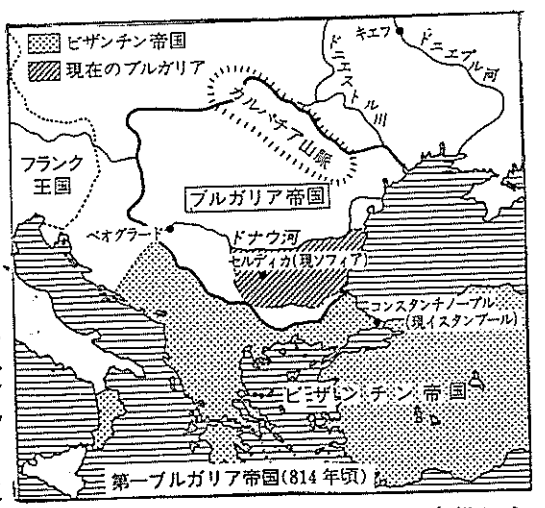
一行が搭乗した小型のプロペラ機は降雨をついて７時２０分に舞い上がり、ブルガリアの首都ソフィアに向かって飛行を始めた。

機上の人となった私は社会主義時代のブルガリアには建国１３００年記念の１４年前に一周し、バルカン山脈やバラの谷、民族博物館、そして黒海沿岸の素晴らしい景観などが、昨日のように懐かしく思い出された。

あれから誰にも束縛されずに自由に外遊を楽しんで暮らしてきた。今は体力の衰えを感じるものの、気力の若さだけは失っていないという気概には未だ余裕があり、再びブルガリアに足跡を残す機会を得た悦びは格別であった。

泣いても笑っても人間の一生は一生である。生きることは年齢ではなく意欲であり、今日を楽しく生きることに集中すれば、その他のことは些細なことだと考えていると、機は雨上がりのソフィア空港に早や着陸していた。

ブルガリアの概要（下図参照）



「ブルガリア」の語源は、「鋤（スキ）を持つ人」を意味する「ブルガル」に由来すると言われており、ヨーロッパでも有数の古い歴史をもつ国である。

紀元前５世紀ごろにはトラキア人が定住して国家を形成していた。その後、マケドニア人、ケルト人、ローマ人の侵攻があり、５世紀末にはスラブ人が南下してきた。

７世紀になると中央アジアからトルコ系の遊牧民族である「ブルガリア人」が侵攻してきて、スラブ人と混血合体した。これが今日のブルガリア人の起源である。

ブルガリアはトルコの侵略をうける前には、バルカン半島に君臨する大国であり、彼等は二度にわたって自ら帝国を建設した。

先ず７世紀にはプリスカ（後にプレスラフに移る）を都とする第１ブルガリア帝国が誕生した（上の両地図を参照）。この国はビザンチン帝国（東ローマ帝国）に滅ぼされるが、やがて１２世紀になると、トゥルノヴォを都とする第２ブルガリア帝国が

樹立された。

しかし間もなくオスマン・トルコの勢力がバルカン半島を侵食し始めた。そして１３８９年の決戦でバルカン連合軍が敗れた後、ブルガリア人は他のバルカンの民と同じ運命を辿り、もろくも潰え去った。

その時以来５００年間、トルコの支配が始まった。しかし１８７０年代になるとブルガリアの独立気運が高まり、１８７６年４月、国内各地で一斉蜂起が決行された。

当時全土で虐殺されたブルガリア人の数は３万人にも上った。この事件はヨーロッパ各地でごうごうたる非難が巻き起こり、ブルガリアのキリスト教徒（ブルガリア正教徒）を、異教徒から救えという国際世論が高まった。

１８７７年、バルカンへの南下の野心を抱くロシアは、好機到来とばかりトルコに宣戦した。この露土戦争の勃発で結局、トルコ軍は敗北してブルガリアの悲惨な歴史は、ひとまず終止符が打たれた。

東ヨーロッパの各民族はロシア・ソ連に対し強い嫌悪感をもっているが、ブルガリアは５００年間のトルコの支配から解放されたのは、ロシアがトルコを破った露土戦争のお陰だと感謝している。

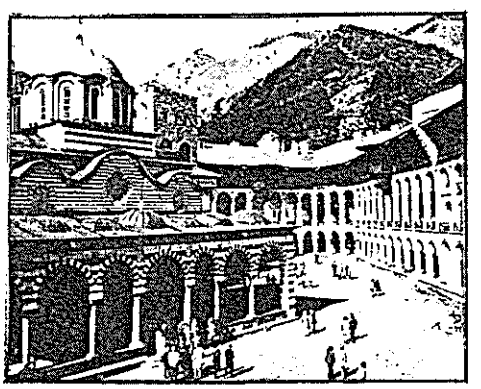
１９１４年、第１次世界大戦が勃発すると、国論は親独派、親露派、非戦派に分裂したが、中欧同盟（ドイツ、オーストリア・ハンガリー）側からマケドニア（バルカンの一小国）の領有の密約を得た政府は、中欧同盟に参加して参戦した。しかし結果は連合国の勝利に終わった。

１９３９年、第２次世界大戦が起こると初めは中立を守っていたが、４１年３月、日独伊三国同盟に加盟して英米に宣戦した。しかしソ連に対しては中立を守った。

しかし４４年９月５日、ソ連はブルガリアに宣戦を布告し、８日にはソ連軍はブルガリア領内へ進撃を開始した。（日ソ中立条約を信奉する日本政府はこのような前例があるのにかかわらず、ソ連の真意を予知できなかったことは慚愧に堪えない）

ブルガリア国内のパルチザンと祖国戦線は、ソフィアその他の都市で権力を握り、祖国戦線による社会主義政権が樹立して１９４６年９月、国民投票によって王制は廃止された。

リラの僧院の見学（５８頁の上の地図参照）



ブルガリアの面積は日本の関東・東北地方を合わせたほどで、人口約８７０万のブルガリアの観光はリラの僧院から始まった。

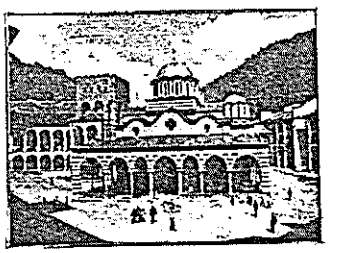
雨上がりの中に映ってくる首都ソフィア郊外の景観は１４年前と打って変わり、アパート群が櫛の歯のように林立して今昔の感がする。

ソフィアの南１２８㎞にあるリラの僧院は、山奥深く静かに眠るビザンチン文化の華で、私の記憶の中には鮮明に刻まれていた。ソフィア盆地からリラ山系に入ると空間の広がりは全く

変化し、幽邃という表現がぴったりの光景は日本の深山幽谷を思わせる。

空港からリラの僧院へと直行するバスは清流が流れる山間に入り、万丈の山と千仞の谷間を走ること約３時間、歴史と文化を遺す修道院を囲んだ城壁の前で停車した。

人里を遠く離れて如何にも孤高といった印象的な風情が眼前に展開し、郷愁の思いを私に抱かせたのであった。



リラの僧院は１０世紀にイワン・リルスキー僧正によって創建されたブルガリア最大最古の修道院で、１３３５年当時のこの地方の領主によって増改築が行われ、皇帝の保護のもとで栄えた。

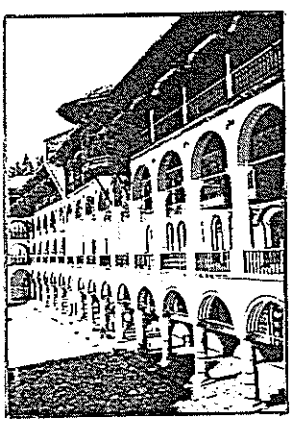
１４５３年、コンスタンチノーブルがオスマン・トルコによって陥落し、ビザンチン帝国（東ローマ帝国）は滅びた。勢いにのったトルコはバルカン半島を北上し、ヨーロッパ東部の国は殆どトルコの支配下に入った。そして前記した通りブルガリアも５００年の長きにわたり、トルコに支配された。（前頁と上の写真はアーチと柱列の美しいリラの僧院の景観）

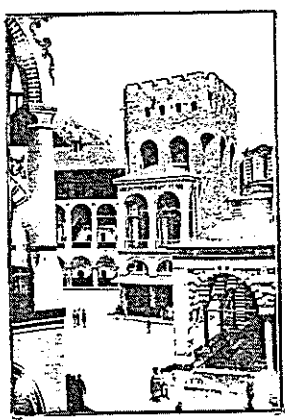
トルコ（イスラム教）の支配下ではブルガリア正教は厳しい弾圧を受け、多くのキリスト教会がイスラム教の寺院に改築された。その中で、人里離れた山の中でひっそりと信仰を守り通してきたのがリラの僧院であった。

〔ブルガリア正教はギリシアからバルカン諸国、ロシアにまで広がった正教会の一派で、国民の８割が信仰している〕.

トルコの支配下ではブルガリア語での読み書きは公式には禁止されていたが、唯一リラの僧院だけはブルガリア語の使用が許されていた。屈辱的な苦難の時代の中で、この僧院は人々の心の古里であり、文化を守る砦となっていたのである。

修道僧たちは信仰の導師であると同時に、反トルコ運動のリーダーでもあった。そして反トルコ運動は先ず伝統文化を復活させようという運動から始まった。これをブルガリアではブルガリア・ルネッサンスと称し、国民の意識の中では、イスラエルのエルサレム的な存在となった。





１８３３年の大火で焼失し、現在の建物は１８３４～６０年の間に再建されたもので、門前の左側は黒々と茂った大樹が覆いかぶさるように枝を寄せ合い、右側は渓谷となっていた。

標高１１４７ｍの敬虔な雰囲気に包まれた山門をくぐると、緩やかな勾配のある石畳を敷きつめた中庭が迫ってきた。城壁の内側は中庭を取り囲む回廊となっていて、そこに僧房が並んでいた。（上の左側の写真は回廊の光景、右側の写真は僧院最古の建造物である塔）

一行はアーチの柱列の美しい３～４階建の回廊に上り、最上階の修道僧の部屋から僧院の全景を眺め、ガイドから詳しい説明を受けたが、１４年前と少しも変わらぬ厳粛な光景は、私の心を洗うような感じであった。

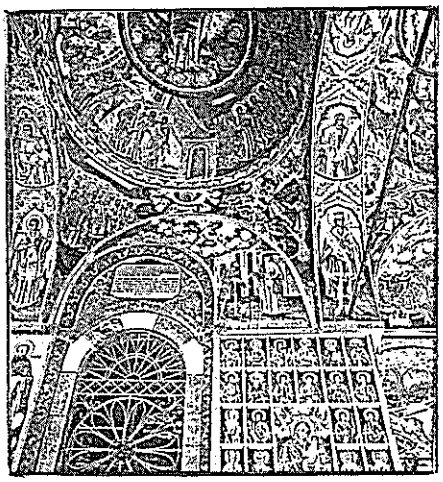
中庭にはアーチとドームで作った聖マリア教会（前頁の写真）があり、その左側に

領主のフレリョの塔が見える。この塔の高さは２３ｍ、１３３５年に立てられたもので焼失を免れ、内部には当時の壁画が遺っている。（前頁下の写真の右側の塔）

ビザンチン風の円屋根の聖マリア教会に足を運び、先ず我々の目を引き付けるのは、白と黒で塗り分けた横縞模様のアーチの列柱であった。そしてアーチをくぐって奥に見える宗教画に接近すると、誰しも足を止めて暫く立ちすくまなければならなかった。

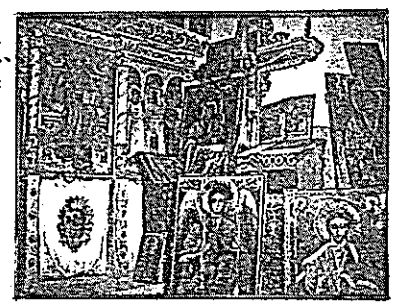
壁一面に描かれた彩りも鮮やかな壁画は聖書の世界であった。字を知らない人々に教えを説くために、教会の内壁も外壁も凡て宗教画で埋めつくされている。

聖母子の像、聖人像、聖書の各場面、最後の審判、天上の色とされていた青、炎の鮮やかな赤、これらを惜しみなく使ったカラフルな宗教画は、訪れた人々の魂を揺さぶるようであった。



（上の写真は教会の壁画の一部）

物音一つ聞こえない沈黙の中を博物館へと進んだ。ここには古いコイン、フレスコ、領主フレリョの王座、フレリョの古い小さな教会で用いられていた木彫装飾の扉、小十字架、古文書などが展示されていた。



（右は博物館の展示品の一部）

見学を終えて中庭の石の上に腰を下し、自然の厳しい試練に耐えてきた屏風のような山を眺めながら、喧騒の世界から遁世する楽しみを味わっていると、文化の息の長さを感じるのであった。

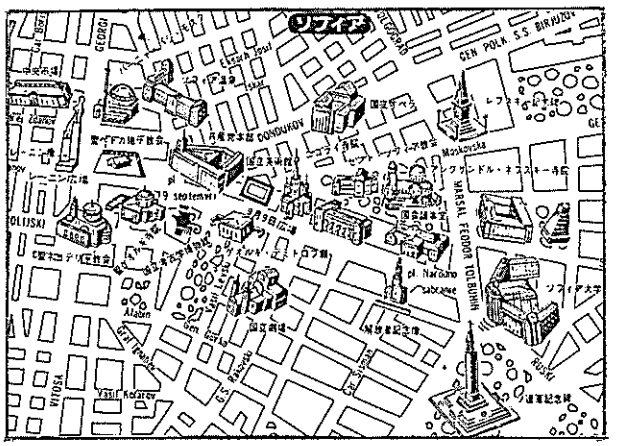
トルコの長い支配下で、山中のこの僧院こそがブルガリア人の心の支えであった。一方のトルコも亦、この僧院の活動と価値を認めて手出しをしなかったことにも意義があり、身と心を清める祈りが今日まで続いていることは、世界の財産である。

リラの僧院を去った一行は山間の古風な田舎レストランに入り、白樺に囲まれた山里の景色を眺めながら鱒料理の昼食に堪能した。そのレストランの前に俄かに店を開いた現地の女性たちが、手編のレースや敷物を売っていた光景も印象に残り、私も彼女等にサービスの積りで買い求め、ソフィアへと急いだのである。

山間僻地の街道の各所に、解放を記念する塔が立っている光景を目にすると、自由を享受している我々には考えられないような、自由の尊さを感じさせられるのであった。

我々が今回の旅でソフィアに宿泊することになったニューオータニは、黒川紀章氏の設計によるホテルで、前回宿泊した市中心部のブルガリア・ホテルを思い出しながら、旅の疲れを癒すことになった。

7月12日　（火）晴　ソフィアの歴史と市内観光



ソフィアの歴史は古く、ヨーロッパでも最古の都市の一つに数えられている。

紀元前５世紀にはトラキア人によって「セルディカ」という町が形成されていた。「セルディカは私のローマだ」と言ったのは、ローマ帝国のコンスタンチヌ帝（３０３～３３７）の言葉で、一時はローマの都をセルディカに移すことも考えていたと伝えられている。

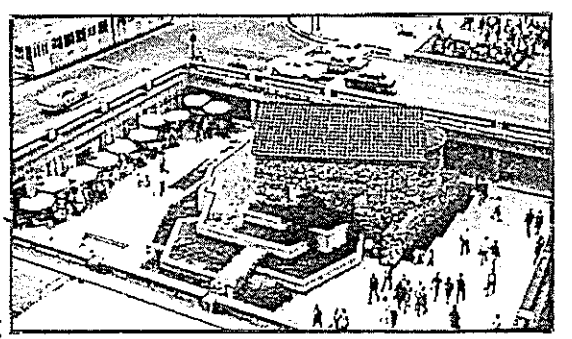
７世紀にはスラブ人によって、この地はスレデツ（スラブ語で中央の意）と名付けられ、１１世紀には東ローマ帝国の支配下に入り、トリアデッツアと呼ばれた。ソフィアの名が使われるようになつたのは、１４世紀のことであった。

古来、交通の要衝であったため、ゲルマン系のゴート、東洋系のマジャール、フン族や、十字軍の侵略を受け、１３８２年からは５世紀にわたってオスマン・トルコの統治下に置かれた。それ以来、町はオリエント調（東洋）に塗り替えられ、教会は回教寺院とされたため、半地下式の小さな教会が建てられるようになった。

ソフィアがブルガリアの首都に定められたのは１８７８年、トルコの支配から解放された後のことで、今の人口は約１００万である。

現在の市街の中心部は、１８７８～１９４４年９月に至る第３ブルガリア王国時代に造られた。更にその後の社会主義政権下で新しい部分が建設され、ソ連・ロシア風の建物や町並みが目立っている。これはブルガリアとソ連・ロシアとの伝統的に密接な関係を物語っている。

朝食後の市内観光は先ず市の心臓部ともいうべきレーニン広場（上の地図左側中央）から始まった。東欧に吹き荒れた民主革命によってレーニン像は撤去され、見覚えのある光景は姿を消して時代の変化を物語っていた。



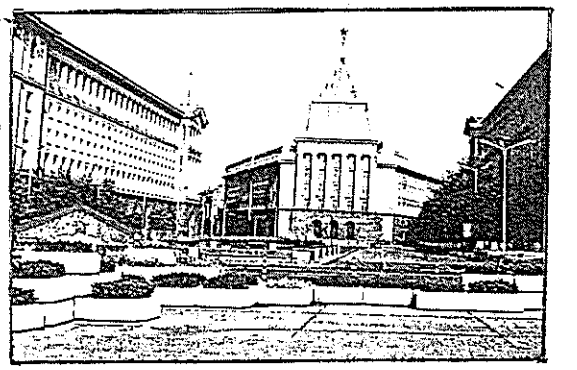
懐かしく思い出されるシェラトン・ホテルは昔のままで、その左手のレーニン広場の端に建つドーム型のネデリア教会は蔦に覆われ、次々と私の脳裏の中の微かな記憶が蘇ってきた。この教会は１８５６年のトルコの支配下時代に破壊され、６３年に再建されたのであった。

その反対側にある聖ペとか地下教会も昔のままの姿を留めていたが、よく注意

して見ないと存在が分からないぐらい周辺が変貌していた。

赤煉瓦造りの小さな半地下教会の周りの広場には露天商が並び、地下道が四通八達して昔の面影はなく、考えられない民主化の波は名所旧蹟をぶち壊していた。

（前頁の下の写真は聖ペトカ半地下教会とその周辺の光景で、地図の中央左上）

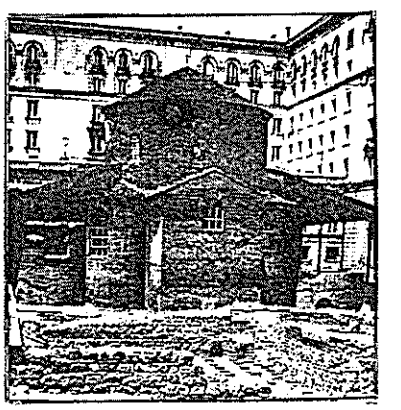


屋根だけしか見えなかったこの教会は、イスラム教のトルコの支配を受けていた１４世紀、キリスト教の教会は、トルコ人の身長より低く建てなければならなかったため、写真のように半地下式教会となった。ブルガリア人にとつて反トルコの屈辱の象徴であと言えるだろう。

半地下教会から東に伸びる大通りを眺めると、右にシェラトン・ホテル、左にツム百貨店の高層建築が延々と伸びており、正面には昔ながらの共産党本部の尖塔が天に向かって聳えていた。

（上の写真の正面は共産党本部、左側はツム百貨店、右側はシェラトン・ホテル）

続いて一行は半地下教会北側の１８７６年にトルコ人によつて建てられた、独特の尖塔をもつ回教寺院のバーニャ・バン・モスクを訪れ、ソフィアがトルコの支配下にあったことを証明する数少ない建物を、興味深く眺めていた。



次いで我々は共産党本部前の大通りを散策しながら歩き、シェラトン・ホテルの中庭に遺っている２～３世紀古代ローマ時代の、聖ゲオルギ教会の見学となった。

これは市内で最も古い遺跡の一つで、トルコの支配下では回教寺院として使われ、「バラの教会」と呼ばれていた。

ホテルの中庭の敷地内には聖ゲオルギ教会の他に、ローマ時代の浴場跡や会議場跡の遺跡も保存されている。私が１４年ぶりにこれらの遺跡と再会したことは感慨無量で、歳月は流れても想い出は消えず、実に美し財産と言わなければならない。（上の写真はローマ時代の遺跡と聖ゲオルギ教会）

しかし残念ながら今回のツアーは強行軍で時間の余裕がなく、他の一つの地下にあるローマ時代の遺跡の見学が出来なかった。それは共産党本部前の地下道にある「セルディカ遺跡」である。

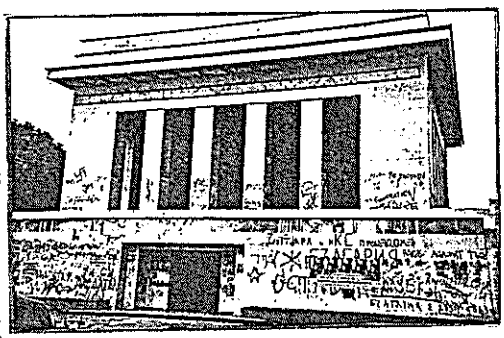
教会ばかり廻る観光よりは、古代遺跡の見学の方に興味をもつ私にとっては不満が残り、ここに前回訪れた時の写真を掲げて慰めることにした。

（右は地下のローマ時代のセルディカ遺跡）

ソフィアはかってトラキア人によって「セルディカ」（２～１４世紀）と呼ばれていた。ローマ時代、コンスタンチヌス帝は「セルディカは私のローマだ」と言って、

この町をこよなく愛したことは前記した通りである。

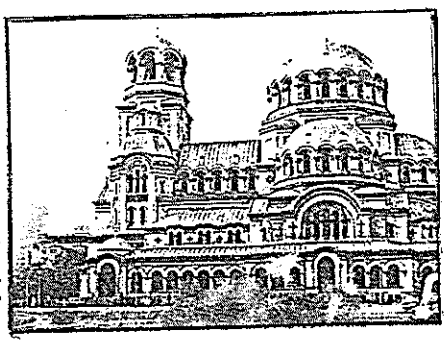
当時の城壁と２つの塔が地下道工事の際に発見され、セルディカの東門であることが確認された。地下道を通りながら発掘された壷類や、発掘当時の写真、城壁の模型などが見ることができたが、今回はこの遺跡と再会することが叶わず、悔いが残ったと言わなければならない。



バスに乗車した一行は、１５世紀に回教寺院として建立された国立考古学博物館の前を通り、９月９日広場（６２頁地図の中央）に立つ白亜の壮麗な建物の前で停車した。

ここは第２次世界大戦後、ブルガリア人民共和国の初代の首相で建国の父と言われる、「ゲオルギー・デミトロフ」の遺体を安置する廟であった。

時代が移り変わり冷戦構造が崩壊して民主化された今日、昔は入口に制服姿も凛々しく立っていた衛兵の姿も消え、反対に白亜の建物は落書きで埋め尽くされていた。（上は落書一杯のゲオルギー・デミトロフ廟）



再び乗車したバスは９月９日広場にある国立美術館（旧王宮）や、１９１２年に創建されたニコライ寺院（ロシア）、１４世紀にコンスタンチヌス帝によって創建されたソフィア寺院を通過し、アレクサンドル・ネフスキー寺院の広場で停車した。（位置は６２頁地図の中央から稍々右側）

これはブルガリアをトルコの支配下から解放するために戦った（露土戦争）、ロシア人兵士の慰霊とロシア帝室への感謝の意を表すために建立した、記念の教会であった。（上の写真はアレキサンドル・ネフスキー寺院の美観）

当時のロシアはブルガリアにとっては、さながら救世主のような存在であった。そのために共産主義時代にも親ソ派で、現在も新生ロシアとの仲は悪くないようだ。

ソフィアのシンボル的存在であり、１２のドームをもつこの寺院は１８８２年から４０余年の歳月を費やし、当時のロシアとヨーロッパの技芸の粋を集めて建造したものであった。

金色に輝く高さ６０ｍのドームを頂くネオ・ビザンチン様式は豪壮華麗で、総面積１３００㎡の寺院は、一度に５０００人を収容できるバルカン半島最大のものである。又、地下博物館には歴史的に貴重な名作が展示され、聖画で飾られている。

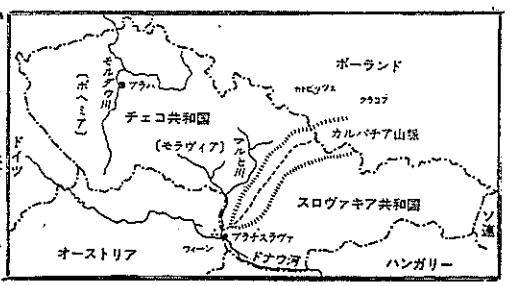
ここまで派手な寺院を造ったのは、新しい支配者であるロシアの威厳を誇示するためであろうか。内部にある３つの祭壇は中央がロシア、向かって左がブルガリア、右が他のスラブ諸国に捧げられたものであった。

１４年前の思い出を新たにした観光は以上で終了したが、寿命は天からの授かりもので、年齢は数字であって中身とは関係ないと思うのであった。人生２５年と言われた戦争に明け暮れた時代に生きた私が５０年も長生きをして、再びブルガリアを訪れたことは、生きることは年齢でなく意欲であるとの結論に達したのである。

スロバキアの首都プラチスラヴァへ

前回のように本場のブルガリア・ヨーグルトも賞味できず、森の都に未練を残しながら、田舎臭い小ぢんまりとしたソフィア空港を１６：２０に離陸し、ヴィトシヤの山並みを眺めながら、オーストリアの首都ウィーンに向かって飛行した。

搭乗機のオーストリア航空は清潔で乗り心地もよく、先進国の飛行機に乗りなれた我々は、東欧にきて初めて快適な空の旅を経験したのであった。



設備の完備した照明の明るいウィーン空港に１７時（ソフィアと時差１時間）に到着し一路、スロバキアの首都・プラチスラヴァへと疾走した。

ブルガリアの地形と違って平坦な大自然が延々と開け、空間の広がりまでが違っている感じである。何処までも果てしなく伸びる一面の耕地には、妖精のように開いた向日葵（ヒマワリ）や黄金の麦畑が拡がり、我々の気分までが明るくなってくるようであった。

オーストリアとスロバキアの国境検問所で出入国手続きを終えた途端、一天俄かにかき曇って稲妻が光った。間もなく天空に架った橋のような虹を見上げると、異国情緒に刺激されて旅心までも踊る感じであった。

葡萄畑の続く中に一条のレールが走っていた。これはウィーンからプラチスラヴァに通じる鉄道線路である。第１次世界大戦後、オーストリア・ハンガリー帝国が崩壊し、チェコとスロバキアはオーストリアのハプスブルク家の支配から離れ、念願の独立を果たした歴史が思い出されてきた。

チェコやスロバキア、オーストラリア、ハンガリーの歴史は複雑で、ハンガリーの首都・ブタペストがトルコ軍の手中にあった間、都はスロバキアのプラチスラヴァに移っていたことも脳裏に浮かんでいた。

チェコスロバキアの歴史は前記した通りだが、東欧諸国の抱えている問題は民族問題、民族自決の問題であり、我々日本人はその点は幸いだと喜ばなければならない。

チェコスロバキアは、チェコ人とスロバキア人が結合して生まれた国である。両民族は言語の面では極めて近いが、１９１８年に両国が結合したとき、その隔たりは決して小さいものではなかったと前記した。

チェコは独立前から既に工業が発達し、その経済力、教育レベルなど多くの面で西欧の水準に近く、むしろ東欧では例外的な存在であった。

それに対しスロバキアは、それまでハンガリーの支配下にあり、遅れた農村がその大半を占める地域であった。そのため新生国家ではチェコ人が優位に立ち、チェコ人の中央集権化政策に失望して、スロバキア人は自治を求めて対立した。

１９１８年の独立国家の形に至るまでの１０００年の間、西スラブ族のスロバキア人は、ボヘミアを中心に形成されたチェコ人とは異なった歴史を歩み、スロバキア人として固有の民族性を形成したのだから、仕方のないことであろう。

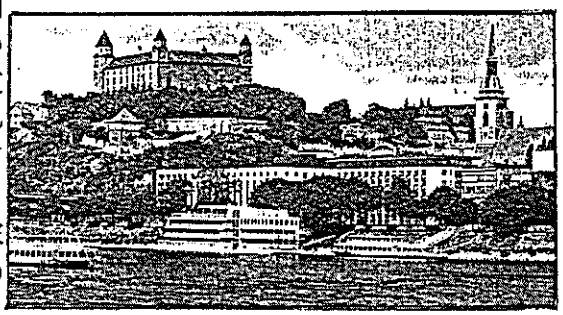
以上述べたような問題が現在、旧ユーゴスラビア内で行われているのセルビア人とクロアチア人の闘争である。両者は言語の点では近い関係にあったが、その歴史的な伝統は全く異なっている。

セルビア人は長いあいだオスマン・トルコの支配下にあった経験があり、宗教的にキリスト教でも正教徒であったのに対し、クロアチア人は独立以前はハプスブルク家（帝国）の一部であり、宗教的にもキリスト教でもカトリックが多数を占めている。

１９８９年、冷戦構造が崩壊して民族自決の問題が世界の世論となり、１９９３年１月１日、チェコとスロバキアは和解して、各々独立したことは幸いである。

ウィーン空港を出発して約３時間を経過したころ、多くの歴史を秘めて悠然と東に向かって流れるドナウ河が見えてきた。ドナウ河はウィーンを後にしてゲルマンからスラブの地へと入り、そしてマジャールの地ハンガリーに向かっている。

ドナウ河北岸に見えてきたスロバキアの首都・プラチスラヴァの町は、ゲルマンとスラブとマジャールの三つの民族の接点に当たり、同時にドナウという交通の要路に位置するため、宿弊の民族紛争という波乱の歴史を経験してきたのであった。



今ではオーストリアはアルプスの小国となり、かっての大帝国は見る影もない状態である。ハプスブルク帝国を分割支配していたハンガリーも、帝国から離れて独立国となったが、それまで支配していた地域の三分の二を失った。

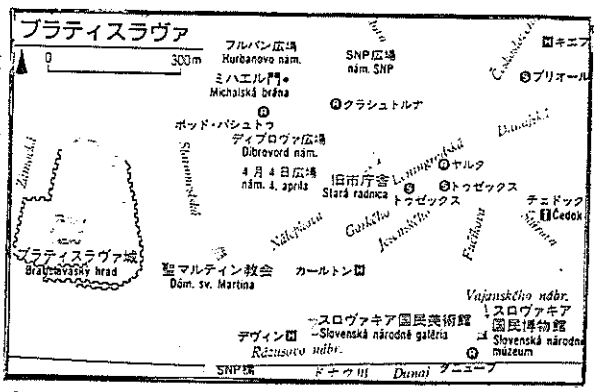
スロバキアとチェコはハプスブルク家の支配から離れて一つの国を作ったものの、今回ようやく各々独立したという、東欧ならではの経緯を思い浮かべていると、プラチスラヴァの象徴ともいうべき城砦の威容が網膜に映ってきた。（上の写真はプラチスラヴァ城とドナウ河の景観）

我々の乗車したバスは石畳を敷きしめた曲がりくねった街路を通り、中世の雰囲気が漂う町の川辺に建つ「ダニューブ・ホテル」に到着し、悠久のドナウの流れを眼下に見降ろしながら、旅の疲れを癒すことになった。

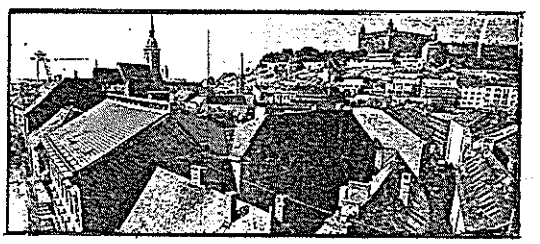
7月13日　（水）快晴　プラチスラヴァ市内観光

東欧の旅に出て以来、初めて快晴の朝を迎え、早朝から気温が上昇して本格的な夏の到来を肌に感じた。

久しぶりに半袖シャツに着替えて食事前の朝の散策に出掛けた。ドナウ河に架ったＳＮＰ大橋の中央部には円形の展望台のある塔が聳え、首都として新しい名所造りに懸命のようである。



大橋の袂から高架となった街道が市街地を走り、そこに上って四周を眺めるとプラチスラアァ城が大きく眼前に迫ってきた。（上はプラチスラヴァ市街図）



城下町の眺望の中には中世さながらの城壁が延々と走り、それと調和するように聖マルティン教会の尖塔が天空高く伸びていた。（右の写真の右上はプラチスラヴァ城で、中央左側の尖塔は古い町並みに立つマルティン教会、一番左側にＳＮＰ大橋と展望台が小さく見えている）

マルティン教会は１４世紀から１５世紀にかけて建てられた由緒ある教会であった。塔はもともと城の濠に沿って造られた防御施設であったが、それを教会に転用したものであった。

聖マルティン教会は多くのハンガリー王が戴冠式を挙げた教会で、見えているプラチスラヴァ城の四隅に立つ塔も、ハンガリー王家の宝物殿として使用されていた。

早朝の短時間の散策は歴史探訪の一時となった。人口４４万人のプラチスラヴァは、ハンガリーがトルコ軍に占領された１６世紀から１７世紀にかけて、ハンガリーの首都となった歴史がある。

又、スロバキア全体がチェコスロバキアとして独立するまでの１０００年もの間、ハンガリーの支配下にあったことは前記した通りで、旧市街にはハンガリーの大司教やハンガリー貴族が住んでいた宮殿も残っていた。

ところがこの古い町で１９９１年３月、スロバキア人による激しい自立要求のデモが起こった。歴史的なチェコ人対スロバキア人の対立感情が、民主化革命の自由化が進む中で爆発したのである。

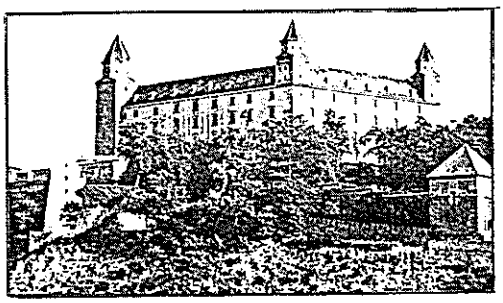
もともと民族対立は、社会主義政権下ではブルジョワ民族主義に根ざすものとして厳しく弾圧されてきた。しかし東欧諸国では民族対立や民族自立への嵐は吹き荒れ、現在でも旧ユーゴスラビアでは続いているのである。

チェコスロバキアでも両民族の摩擦は民主化革命の翌年に表面化した。１９９０年にこの国は「チェコスロバキア社会主義連邦共和国」から、「社会主義」を削除した。

それと同時に「チェコスロバキア」と一括して呼ぶのを止め、「チェコとスロバキ

ア共和国」と両者を分けて呼ぶ国家に変更した。民族平等を叫ぶスロバキア人の強い要求が通ったのであった。

続いて１９９３年1月1日にチェコ共和国とスロバキア共和国となり、９３年１月１９日に国連に加盟した。しかし市場経済移行にともなう混乱と不安定な政局、自治を要求するハンガリー系少数民族との確執など、この新生国家は前途に大きな難題を抱えているようだ。現在のスロバキアの総人口は５４２万である。



ダニューブ・ホテル（前頁地図の右下）の朝食を終えた一行は、先ず象徴的存在のプラチスラヴァ城へと丘を上った。

「逆さテーブル」のような形をしたこの城の歴史は１０世紀に遡り、何よりもこの町が守りを固めなければならない、ドナウ河の要衝の地であることを想い起こさせた。

（右はプラチスラヴァ城の景観）

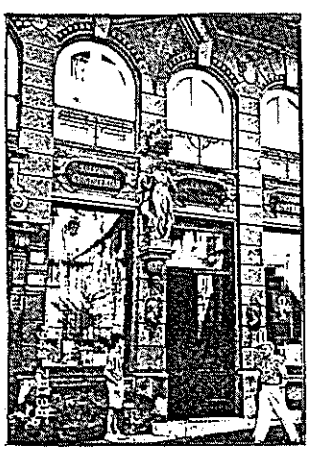
１２世紀にはロマネスク様式の石造りの城がこの地に建てられ、１５世紀にゴシック様式の城に建て替えられた。この時には四つの塔はなかったが、１７世紀になってトルコ人の侵入に備えて付け加えられた。

最後の改築は１７５１年～１７６６年の間で、オーストリアの女帝「マリア・テレジア」によって進められ、現在の形になったのである。

その後、対ナポレオン戦争最中の１８１１年に大火で焼け、以後１５０年間は廃虚のまま放置されていた。修復がなったのは漸く第２次世界大戦後の１９６０年代のことである。

高さ８５ｍもある外観は、町全体を睨み付けるような近寄り難い印象を与えているが、城内は広々として芝生を敷きつめた公園で、格好の市民の憩いの場であった。建物は現在、博物館や政府機関として機能し、我々は内部の見学が割愛されて去らねばならなかった。

城の丘から素晴らしい景観のドナウの流れや旧市街を展望し、再び前記した城下にある聖マルティン教会の前でバスは停車した。高さ８５ｍの尖塔の頂にある直径１ｍ、重さ８kgの金の王冠は、贅を尽くしたハンガリー王家の遺物であった。



中世の石畳を敷き詰めた旧市街の城壁を眺め、市内で最も古い１３世紀時代の街並みを通り、４月４日広場でバスは停車した。（前頁地図の中央）

人口は稀薄であり産業の発達が遅れているプラチスラヴァの町は、百塔の街と称されるチェコの首都・プラハと比べると雲泥の差で、全く活気に乏しい田舎町に過ぎなかった。

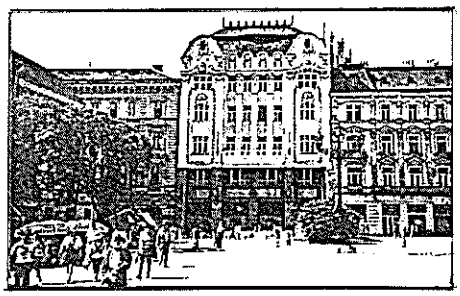
広場の近くに「聖サルバードル薬局」という古い薬局の建物があり、我々は歩きながら現在「薬学博物館」として保存されている薬局跡に案内された。

（右の写真は薬学博物館として保存されている建物）

しかしガイドは旧薬局の内部を案内することもなく素通りして、モーツァルトが6歳で演奏したという建物の外観を眺めながら、人影が疎らで寂しい感じがする広場正面に建つ旧市庁舎へと歩いた。

旧市庁舎は１４世紀～１５世紀に建てられたゴシック様式の建物と、１８世紀に立てられたバロック様式の塔から出来ていて、現在は全体が幾つかの博物館として使われていた。

（右の写真は旧市庁舎の建物）



歴史博物館、司法博物館、ワイン博物館などの何れの博物館も小規模で、歴史博物館の玄関の壁には珍しく、ナポレオン軍の発射した弾丸の残骸（不発弾だと思われる）が、今でも貴重品のように填め込まれていた。これはプラチスラヴァでの数少ない印象の中で、私の眼底に鮮やかに残っている。

現在、大統領の執務室となっている新市庁舎の前からバスに乗車し、直ぐ近くにある「ミハエル門」へと移動した。（位置は６７頁地図の中央上部）

ミハエル門は旧市街に入る時に通る門の一つで、門の手前には城壁の外濠の跡が明瞭に残っているのが見えていた。１４世紀に造られた門が、現在のようなルネッサンス様式の高い塔を伴った門になったのは、１６世紀のことである。

それ以前は旧市街全体は、このような門をもった城壁に囲まれていたらしく、現在のミハエル門は武器博物館となっていた。

（右の写真はミハエル門の景観）

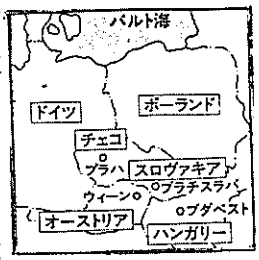
それらを眺めていると、長い歴史を秘めた素晴らしい城門や城壁があった中国各地では、現在すべてを取り除いてしまった愚が思い出された。あらためて「賢者は歴史を遺す」という格言を、目捷にしたのであった。

これまで東欧５ケ国を訪れ、その中で感じたことの一つは、ポーランドのワルシャワ、クラコフ及びチェコのプラハには「旧市街市場広場」が残っていたことである。

市場広場のある町は中世以来、発展していたことを証明する広場を遺して今も繁栄していた。このような遺産を保存し切れなかったスロバキアの貧困さを、ひしひしと街全体から感じられるのであった。

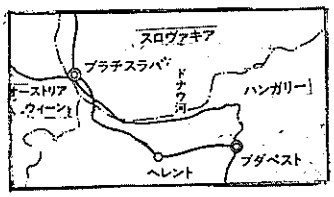
プラチスラヴァの市内観光は以上で終了し、昼食は市郊外にある小高い丘の上に聳え立つ、高さ８５０ｍのテレビ塔の展望レストランで摂ることになり、蓊蒼と大樹の生い茂った急坂を上って小さな首都を瞰下し、名残を惜しんだのである。

ハンガリーの首都・ブダペストへ（下図参照）



人口５４２万のスロバキアと人口１０５０万のハンガリーの国境線は、プラチスラヴァの直ぐ東方を走り、その国境検問所を通過すると世界が一変した感じがしてきた。それはスロバキア側の粗悪な道路に比較して、ハンガリー側のブダペスト街道は片道２車線の高速道路が走っていたのである。

この国境線が今日のような姿になったのは第２次大戦後のことである。１９１８年、つまり第１次大戦が終わった年よりも前まで遡ると、この国境線は無くなってしまう。それは何れの国もハプスブルク帝国の中にあったからである。



又、今は比較的にのんびりしているハンガリー～スロバキアの国境は、二つの世界大戦にはさまれた時代、即ち両大戦間には国際緊張の場所であった。

スロバキアとハンガリーは何れも第１次世界大戦後に独立したが、スロバキアの領有をめぐって激しい対立関係にあり、１９１９年には両国間で戦闘が起こっている。

ドナウ河を渡ってハンガリー領内に入ると刈り入れ時が間近い麦畑が黄金色に輝き、走行する自動車の数も何十倍に増え、良好な経済状態が一目瞭然であった。

過去２回に亘るソ連ロシア旅行で経験したことは、乗車した観光バスの殆どがハンガリー製であった。そのように産業の発達していることは理解していたが、目の当たりに見ると想像以上のものがあり、スピード違反を取り締まるネズミトリも各所で実施され、先進国並みの光景が見られるのであった。

国境から内部に入るに随って丘の数が一段と増え、雪深いせいか農村の屋根は三角屋根が多く、緯度は北海道の北、サハリン南部に当たるため、冬期には零下２０度以下になるとのことであった。

向日葵畑が真っ黄色に染まって少しも無聊を感じさせず、その中をアウトバン式の立体交差する道路が延々と続き、大型のコンバインの刈り取り光景に注目していると、反対側には葡萄畑の濃い緑が現われて自然がワインの特産を宣伝していた。

街道の丘の中腹に立っていた大きな鷲の像は、ヘレント（上の下図参照）の町のシンボルといわれ、アジア系マジャール人のハンガリーは、現在も遊牧民族時代の素朴な生活が息づいているような感じがしていた。

プラチスラヴァを出発して約３時間を経過したころから、暫く見えなかったドナウの大河が再び現われ、流れの両岸に跨る２１０万の大都市・ブダペストの町並みが目に映ってきた。

その時、旧制中学時代の地理の先生が冗談まじりに、「ブタ」が「ペスト」にかかったと教えてくれた６０数年前の言葉が思い出されてきた。床の間の掛け軸のような存在になった私モ何の巡り合せか、ブダペストに足跡を残すことになったのである。

憂愁を秘めたハンガリーの歴史を回顧していると、波乱に富んだ圧政と反抗の歴史の中で、ハンガリーはヨーロッパでは唯一のアジア系民族の国家であり、何とかなく

自然に近親感が湧いてくるのであった。

東洋系のマジャール人がハンガリー平原に侵入してきたのは９世紀で、土着のスラブ系民族を平定する一方、ヨーロッパの農耕文化とカトリック信仰を受け入れた。

１３世紀にはモンゴルに侵入されて国土は荒廃し、１６世紀以降はオスマン・トルコの圧迫を受け、それ以来１５０年余りもトルコの支配を受けて３分割された。

即ち西部と北部はハプスブルク家の支配するハンガリー王国となり、東部はオスマン帝国の保護下の公国となり、中央部はオスマン帝国の占領下に置かれた。

その後、オーストリアのハプスブルク家が勢力を拡大し、１７世紀までにハンガリー全土は同家の支配下に入り、この時に都がプラチスラヴァに移った。しかしマジャール人は次第に民族意識を高め、１８６７年には自治を獲得して「オーストリア・ハンガリー」の二重帝国が成立した。（ブダペストが首都を回復）

第１次世界大戦が始まると、ドイツ側に立ったハプスブルク帝国は民族運動の高まりとともに崩壊した。１９１８年にはブダペストで革命が起こり、ハンガリーはオーストリアからの独立を宣言した。

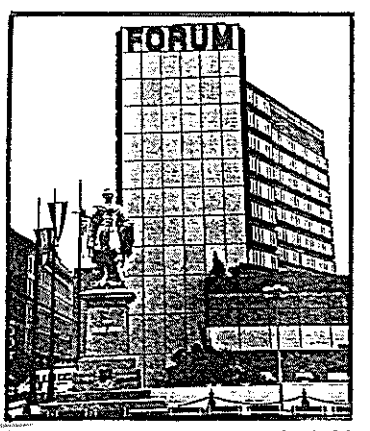
しかし第１次世界大戦の戦後処理によってハンガリーは領土と人口の多くを失い、失地回復を求める動きが、第２次世界大戦での枢軸側参戦となった。１９４４年５月にハンガリーはドイツ軍に占領され、４５年４月にはソ連軍が全土を制圧した。そして戦後はソ連の指導下で社会主義の道を歩まなければならなかった。

しかしソ連型社会主義に対する国民の反発は強く、１９５６年には改革派の指導者ナジ・イムレ首相の復位を求める国民運動が巻き起こり、ハンガリー動乱となってソ連軍が侵入した。

このような歴史の経過を辿ったハンガリーが、１９８９年の東ヨーロッパ革命で先導役を果たしたのは不思議ではない。そして１９９０年３月に実施した自由選挙では社会党は敗退し、市民勢力の「民主フォーラム」が躍進して政権を握った。

プラチスラヴァから２００㎞を快走してきたバスは、ドナウ河に架った幾本かの中の一本の橋を渡った（後刻クサリ橋と判明）。眼前に迫ってきたのは由緒ある歴史的建築物と近代的な町並みで、調和のとれた重厚で華麗な景観は東欧随一と言う印象であった。

ドナウ河を渡った対岸を右折すると、道路は自動車が輻輳して遅々として進まず、漸く銅像の立った河畔の公園の前でバスは停車した。ここが３連泊することになったホテル・フォーラムであった。



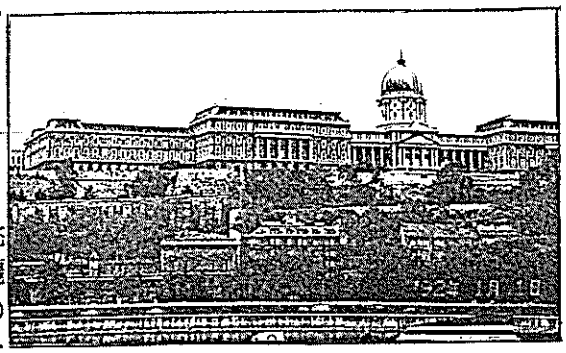
（右はドナウ河畔に建つホテル・フォーラムの景観）

ホテルの従業員はドア・マンからボーイに至るまで日本語で「いらっしゃいませ」と歓迎の言葉を連発し、徹底して日本語でもてなす応対は東欧では初めてのことである。これはハンガリー人の祖先がアジア系という誇りと、日本人の頭脳明晰、勤勉、発達した経済力に対する尊敬の態度であった。

ホテルの個室から眺める大河は何人にも永遠を思わせ、悠然とした流れは更に成長してやがて大海に流れ込み、その繰り返しに知らず知らず私の心は引かれてしまい、

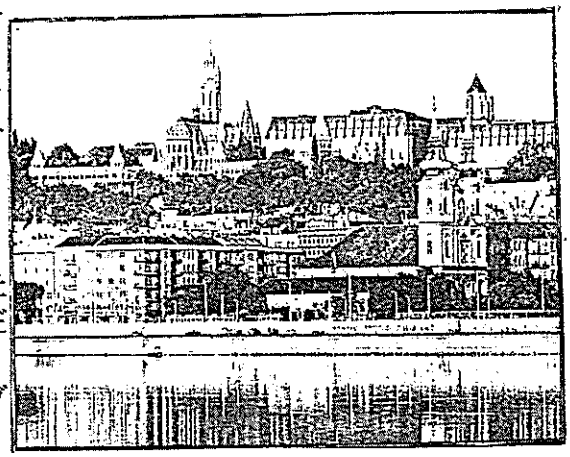
夕食までの一時は私を河畔に誘って連れ出した。

町の中心を貫くドナウの対岸はブダ、私の立っているホテル側はペストで、８つの橋が両岸をむすび、船はたえることなく川面を航行していた。



川辺の遊歩道のベンチに腰を掛けて眺めた光景は、絵に描いたような荘厳華麗な眺望である。古都に相応しい街並みの古い伝統と新生の息吹きに最大の賛辞を贈り、忘我の表情で陶酔しながら釘付けにされていた。

（右上の写真はブダにある王宮とドナウ河、下の写真は同じくブダにあるマーチャーシュ教会とドナウの流れ）



「ドナウの景観とブダ」

ドナウ河の右岸（西側）は川辺から丘陵地帯がせり上がり、昔はこの丘陵地だけが都であった。

前世紀の後半にブダに隣接するオーブダ（古いブダという意）と左岸（東側）のペストの３つの町が一緒になり、首都・ブダペストとなったのである。

ホテル側から見る正面の丘の上には巨大な宮殿（上の写真）のほか、マーチャーシュ教会や漁夫の砦（下の写真）が建ち並んで優美な姿をドナウに写し、その調和は絶妙な都市景観であった。

ブダの丘に建つ王宮はドナウ河が辿ってきたハンガリーの歴史がまつわっている。即ち１３世紀半ばのモンゴルの来襲により、それまでのエステルゴム（明後日に観光する町）から都はブダに移ったのである。

前記したように一時はプラチスラヴァに居城が移されたこともあったが、１４世紀から１５世紀初めにかけて、ブダにゴシップ様式の宮殿が建てられてから、この地が最終的に都となった。

宮殿はその後、マーチャーシュ王によってルネッサンス様式による増築が行われ、華麗な装いを整えた。そのマーチャーュ王の下でハンガリーは学問や芸術の黄金時代を迎えた。ブダの宮殿は正にその象徴であった。

しかしマーチャーシュ時代を頂点にしてハンガリーは波乱の時代に入った。それはドナウ河を北上してきたトルコ軍に、ハンガリー軍はモハーチの決戦で大敗したのであった。その戦いはドナウが血で真っ赤に染まったと言われるほどの、壮絶な戦いであったと伝えられている。

１５４１年にはブダも陥落し、以後この町は１４５年間もトルコの支配下に入った。漸く１６８６年に都が異教徒から解放された時、この宮殿は完全に瓦礫と化していた。

受難の時期は去ったもののモハーチの戦いの後、ハンガリーはハプスブルク王家の兼ねるところとなっていた。そして１８世紀後半に再び丘の上に宮殿が蘇った。

更に前世紀末から今世紀初めにかけて大規模な拡張工事が行われ、今日みるネオ・バロック様式の巨大な王宮となった。しかしこの宮殿も第２次世界大戦で又も破壊され、それが復興されたのは戦後の８０年代になってのことである。

ドナウの丘に見える宮殿は実に偉観の一語に尽きるが、この王宮は決してウィーンのシェーンブルンや、ヴェルヴェデーレの宮殿のような栄光の遺産ではない。

そして又、この王宮の歴史はブダペストの歴史の総てではない。ブダペストの輝ける時代は丘の上のブダから始まったのではなく、ドナウ河の対岸のペストからやってきたのであった。

ペストは商業で早くから栄えていた。ドナウの女王と言われるブダペストは、１９世紀後半に台頭してきたこの市民階級の富なくしてありえなかった。

折しもハプスブルク帝国は１８６７年、オーストリアとハンガリーが実質的に平等の二重帝国へと生まれ変わったが、これがブタペストに豪華な首都造りを促すことになったのである。

６年後の１８７３年には、それまで別々の町であったブダ、オーブダ、ペストが結合され、新都ブダペストが誕生したことは前記した通りである。

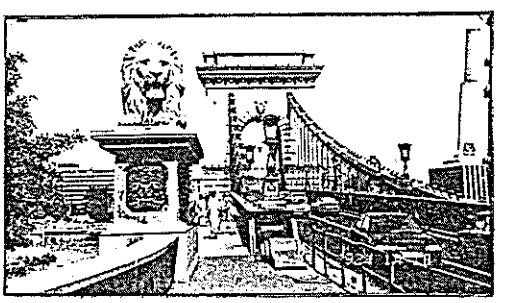
二重帝国の成立は政治的のみならず、経済的にもハンガリーをオーストリアと対等にした。それと共に大量の資本がブダペストに流入し、帝国の各地から夢を追う多くの人が都に殺到してきた。

当時のハンガリーは、ハプスブルク帝国全体をオーストリアと二分していた。その領域はクロアチア（旧ユーゴスラビア領）からトランシルバニア（現ルーマニア領）まで及んでいた。

今やブダペストはオーストリアの首都・ウィーンと同様に活気の溢れる都となり、ドイツ人、ボヘミア人、ユダヤ人、ポランド人等が集まる国際都市に変わった。

こうして蓄積されたブダペストの活力は前世紀末から今世紀初頭にかけて、急テンポの建設ブームとなって爆発した。ウィーンに較べればドナウの田舎町に過ぎなかったブタペストも、華やかな世界都市へと変貌を遂げたていった。

現在ドナウ河を跨ぐ８つの橋のうち、先ず３つがこの時代に完成した。そしてハンガリー建国１０００年の１８９６年には、欧州大陸最初の地下鉄が走ることになった。

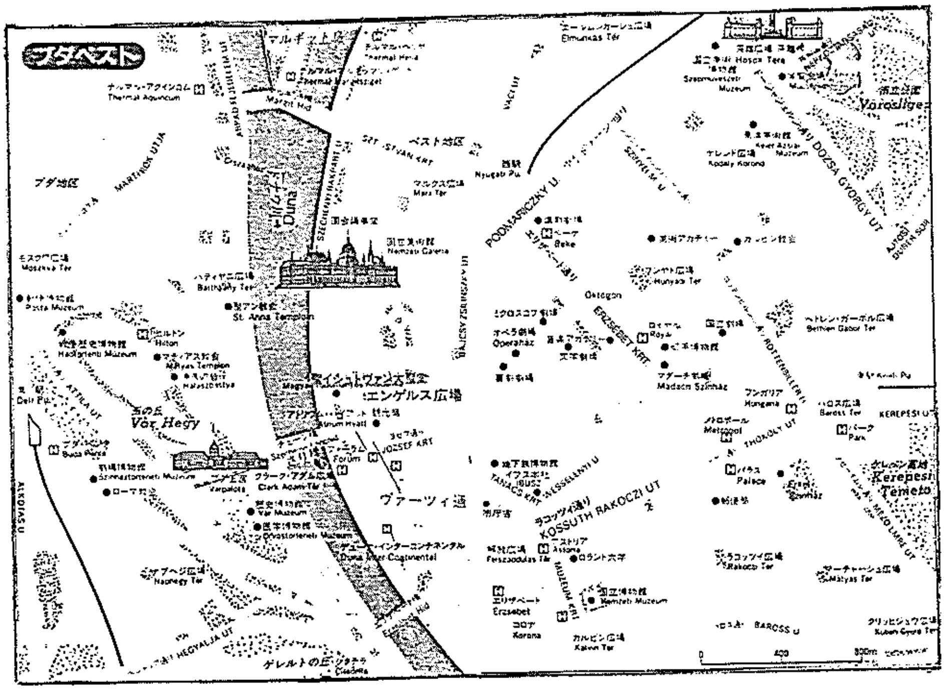


〔右はくさり橋（チェン橋）の景観〕

ドナウの女王とまで称されるブダペストはこのようにして誕生した。いま私が朝の散策で川辺のベンチに腰をかけ、華麗な景観を目にしていると、現在生きている市民に素晴らしい遺産を残した過去の人々に、感嘆の言葉を贈らなければならなかった。

心地よい夏の川風の涼風を浴びながらドナウを上下する船を眺め、興奮を覚えながら一時を過ごし、夕食の時間を迎えたのであった。

７月１４日　（木）晴　ブダペスト市内観光（下図参照）



「ゲレルトの丘」

我々一行はホテルの従業員から温かい日本語の挨拶を受け、快適な気分で古い歴史をもつ華麗なブダペストの市内観光に出発した。

先ず最初に触れ合う場所となったのはブダ（ドナウ西側）の南、標高２３５ｍのごつごつとした岩山がドナウに突き出しているゲレルトの丘（上の地図の下部）であった。

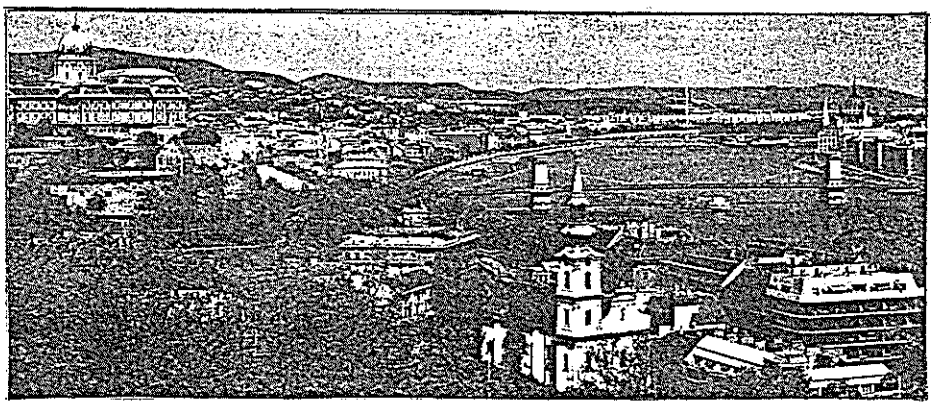
ドナウ河に架った橋を渡って行くと、ゲレルトの丘の麓に古風な温泉（トルコ風呂）の建物が見えてきた。曲がりくねった急坂の中腹に立っている伝導者・ゲレルトの像を車窓から眺め、バスは石山の頂上に向かい、嘗て要塞であった跡地の広場で停車した。（上はゲレルトの像）

丘の名称はイタリア生まれの司教・聖ゲレルトに由来している。伝説によるとその昔、箒の柄に跨った魔女達がここに集り、１０４６年、ヴェニスから来たゲレルトが、キリスト教への改宗を受け入れない異教徒（マジャール人）のために、樽詰めにされてドナウ河に突き落とされた。それがこの丘の上であったと言われている。

ゲレルトは、ハンガリーの初代王・イシュトヴァーンがキリスト教に改宗してハンガリーをキリスト教国家にする際に、王の力となった人である。

丘は全体が公園になっていて丘の頂には要塞の跡が見えていた。ハンガリーの対オーストリア独立戦争（１８４８～４９）は成功しなかったが、独立を望むハンガリー人に恐れを抱いたハプスブルク王家は、ここに要塞を築いてブダペスト市民を監視したのであった。

市民の憩いの場となっている要塞の広場には、第２次世界大戦で勝利した解放記念として、棕櫚の枝を持った高さ３２ｍの巨大な女人像が立っていた。



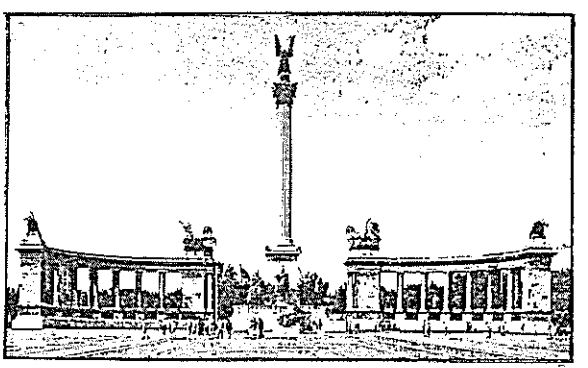
ゲレルトの丘からブダペスト市街を臨む眺望は「絶景哉」の圧巻で、ドナウの真珠と称賛される夜景を想像しながら、何時までも我々は釘付けにされていた。

遠くアルプスに源を発したドナウの大河の流れが、ゆっくりと曲がった両岸の河畔に、王宮やマーチャーシュ教会（前頁の河の左側）、国会議事堂（同、右側）などの絢爛豪華な堂々としたゴシック様式の建造物が俯瞰され、世の人達がこの景観を「ドナウの華」と呼んでいる実感を味わっていた。（上の右の写真が両岸の美景）

「英雄広場」

ゲレルト丘の上からの展望でブダペストの概要を掴んだ我々は、麓のエリザベス橋（前頁の一番下の橋）を通過し、何度も破壊と再建が繰り返されて今日のような華麗になった街の中を走った。

市街には濃い緑の公園や美しい広場が多く、一行はその景観に眺めるのに忙しく応対し、東駅（前頁地図の右端）の前通りから市民公園の北端に広がる「英雄広場」へと進行した。（前頁地図の右上）



この広場は１８９６年のハンガリー建国１０００年を記念して創建されたもので、国内の建築家たちが総力を結集して１９２９年に完成した。

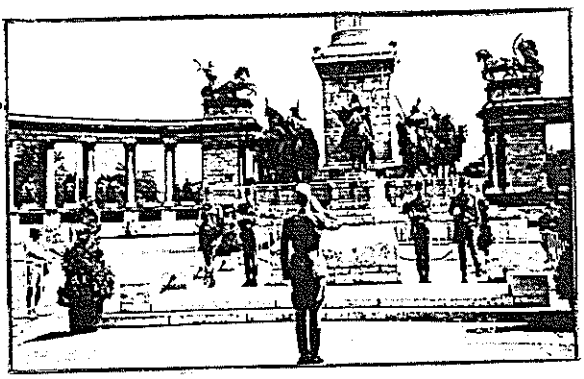
広場の中央には高さ３６ｍの塔が天高く聳え、塔の最上部には王冠と二重の十字を手にした大天使ガブリェルの像が立っていた。

（右の写真は広場中央に立つ塔）

伝説によると、ハンガリー初代国王・イシュトヴァーンを王位に就けるため、大天使ガブェルが力を貸したと言われている。当時のローマ法王・シルヴェスター２世は、どの国に王冠を授けるか迷っていた。（当時ヨーロッパではローマ法王から戴冠することになっていた）

そこで大天使ガブリェルは、夢の中でハンガリーのイシュトヴァーンに王冠を授けるように告げたと言われている。

ハンガリーの歴史を象徴している塔の足下には、東洋的な外貌の７騎の勇壮な騎馬像が回りを取り巻いている。これらは８９５年にこの地に定住したマジャール７部族の「７人の族長」たちである。（右は塔の下部の７人の騎馬像）



マジャール人は彼らに率いられて、それまでの居住地であった黒海北岸のステップ地帯から、家畜の群れを追いながらこの地方に入ってきた。内アジア平原からの何世紀にも亘る西方への移動の果てに、ヨーロッパの民族分布を決定する最後の民族移動の波として、ここに定住したのであった。

定住１０００年を記念して作られた７騎馬像の先頭に立ち、兜をかぶった誇り高き姿は勿論、部族連合の長・アールパード王で、キリスト教国家としてのハンガリー初代の王家、アールパード家の祖先である。イシュトヴァーン１世も彼の後裔として生まれたのであった。（上の写真の中央の騎馬像がアールパート王の像）

族長たちの騎馬像の両横に半円形に列柱が並び、各柱の間には聖イシュトヴァーンから１８４８年の独立戦争までの、英雄１４人の像が並んでいた。（右の写真は英雄１４人の像の一部）

塔と騎馬像の前には、ハンガリーの独立戦争で命を落とした人々を慰霊する英雄記念碑が安置され（低い石碑）、外国の要人がブダペストを訪れた時には必ず参詣するところであった。我々が訪れた際には丁度、衛兵交替の時に遭遇し、印象深いものがある。（上部の写真が衛兵交替）

元々は像の列の最後には、ハンガリーを支配したハプスブルク家の王達の像が立っていたが、１９４８年になって初めてそれらに代わり、ハンガリーが幾度も戦った独立戦争の指導者の像が配置されたのであった。

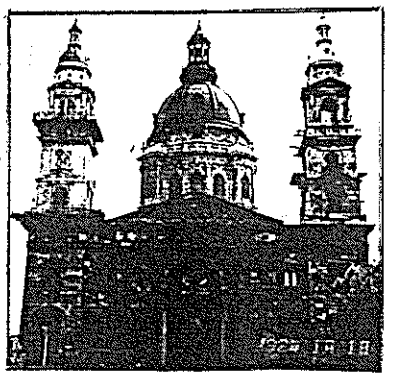
死者に対する何よりの供養は哀悼の情だと一礼して左右に視線を移すと、広場に向かって左側には国立美術館、右側には現代美術展覧館が見え、広場の後方は市民の憩いの場の市民公園が広がり、市内最大の広場となっていた。

この広場は少なくとも５０万の人々が集まることができる。そのため幾つかの転換期には何時もこの広場で集会や示威行進が行われ、１９５６年１０月２３日に倒されたスターリン像もここに立っていたと云う。

広場から市内に通じるアンドラーシ通りは（７４頁地図の右上）、かって貴族と上流階級の人が住んでいたところで、魅力のあるルネッサンス様式の家々が軒を並べ、今世紀初めの好みと豊かさを今に伝えていた。地下鉄もこの広場から通じており、ブダペストで最も美しい通りであった。

「聖イシュトヴァーン大聖堂」

英雄広場から一直線に伸びるアンドラーシ通りは、１８８０年代に急速に発展した街並みで、１９世紀はブダペストの都市計画の奇跡だと称賛されている眺めを留めていた。



大通りの交差点には形によって八角広場などと呼ばれる公園が設けられ、各種の劇場などのある通りではオペラ劇場が一際目だった威容を誇っていた。

エンゲルス広場の北の空に陰欝として重厚に見える屋根が聳えていた。このルネッサンス様式の建築がブダペスト最大の大寺院・イシュトヴァーンである。

１８５１年に着工されたが、６１年にドームが崩壊して７３年に再建され、内装まで完成したのは１９０５年で、半世紀の歳月を費やして建造している。

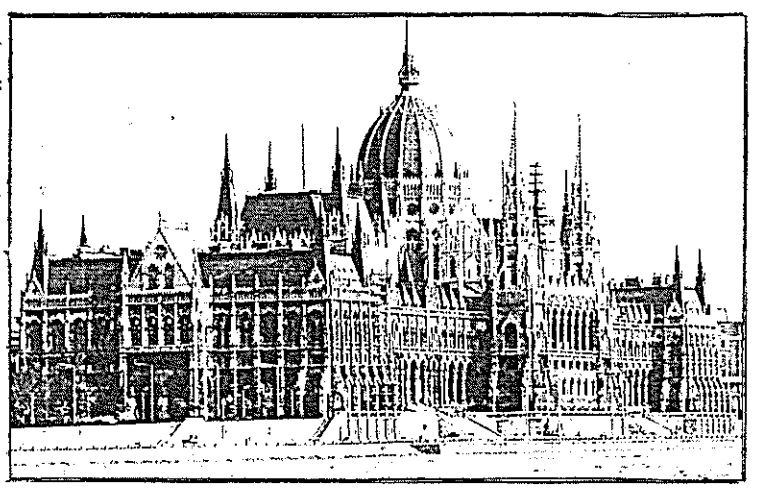
ドームの高さ９６ｍは、ハンガリー建国の年である８９６年の９６に因んだもので、ドームの直径は２２ｍ、収容人員は８５００人である。異例のことだが祭壇にはハンガリー初代の王・イシュトヴァーンの大理石の像が祀られていると言う。

王はクリスマスの日に、ローマ法王から贈られた王冠を戴いて王位に就いた。苛酷にも峻厳な意思で強引に、マジャール人のキリスト教化をやり遂げた王の時代は、日本では藤原氏が栄華を極めていた時代である。

自分で頑張るのも生き方であるなら、信仰に帰依するのも一つの生き方だと教会の尖塔を見上げていると、祈りと願いを混同するのは邪道ではないかと言う疑問が、我が脳裏の中を走っていた。（上の写真は聖イシュトヴァーン大聖堂の外観）

「国会議事堂」（位置は７４頁地図の中央やや左の河畔）

大聖堂から自由広場を通り抜けたところは瀟洒（ショウシャ）な官庁街となっていた。



そこにはテレビ局や国立銀行もあり、ドナウ河に沿って少し北に上るとペスト地区の観光の目玉である国会議事堂が見えてきた。

ゲレルトの丘の上からの遠望で、イシュトヴァーン大聖堂と共に目立っていた国会議事堂は、ゴシック様式の壮麗豪華な姿をドナウに影を映していた。

この豪壮な建物も建国１０００年を記念して、１８８５～１９０２年間の１７年もの歳月をかけ、国の象徴として建造されたものであった。（上は国会議事堂の偉観）

これらの都市計画は他の都市のように、既存の市を時代の要求に合わせて改造したものではない。即ち砂埃の道や片田舎の町、河原の草原や畑の上に夢みた大都会の地

図を描いたもので、何時かは町の建物が周りを取り巻くであろうという期待だけで建て、近くのマルギット橋（７４頁地図の一番上の橋）も同様であった。

絢爛で壮観な議事堂は全長２６８ｍ、ドームの高さ９６ｍ、尖塔の数は３６５本、左右対称で、内部には大統領府、及び政府機関を含んで２００室があり、議員の数は３６８人である。国会図書館はまたヨーロッパ第５番目の規模で、蔵書は４０万冊を誇っていると言われている。

英国議会を模して造った国会議事堂が威容を水面に投影するドナウを北上し、ブダとペストを結ぶマルギット橋へと向かった。

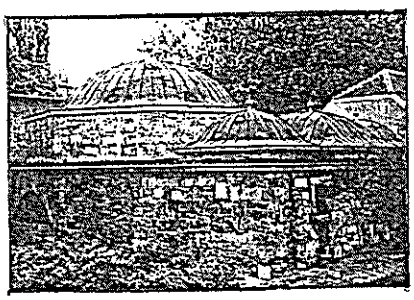
「マルギット島とトルコ風呂」

国会議事堂を外見した我々はペスト地区と別れ、ドナウに架ったマルギット橋を渡ると、その橋の下に全長２、５㎞、幅０、５㎞の緑の公園となっているマルギット島が見えていた。島全体は市のスポーツ、リクリェーションの場となっていて、日本庭園までも設備されていると言われている。（７４頁地図の左上）

１３世紀にモンゴル人がハンガリーに侵入して人口の半分が殺戮された時、「もし自国に帰ることが出来るなら、我が娘のマルギットを神に捧げてもよい。彼女は永遠に神に仕える修道女になろう」、と語ったのは、逃亡の身であったベーラ４世であったと伝えられている。

後刻、モンゴルの侵入者たちは帰還し、ハンガリー王家は国に戻って国王は修道院を建てた。そしてマルギットはそこに住み、２８歳で死去するまで離れることはなかったという。

聖人の列に加えられたマルギット王女に因んで名付けられたこの島には、今もなお女子修道院が残っていると聞く。そして欝蒼として繁っている島影は、河の氾濫に備えて植樹したのだとガイドは説明していた。



マルギット橋を渡ったブダ地区は、緑の大樹が多い静かな丘陵地帯と変化し、高級住宅地が拡がる光景はペスト地区と正反対の性格を見せていた。ペスト地区の住民は常に「ブダに住むことが夢」だと、上流社会の生活を羨望しているらしい。

ブダ地区の一部には古いバロック様式の町が面影を残し、その中に丸い屋根をのせたハンガリー最古のトルコ風呂が見えてきた。これはオスマン・トルコ時代に建てられた正真正銘の東方建築であった。（上は丸屋根のトルコ風呂）

いよいよ一行は昨日のブダペスト到着以来、そして先ほど、ゲレルトの丘から瞰下した市の最大のシンボルである王城の丘へと、胸の鼓動を躍動させながら丘陵の急坂を登っていった。

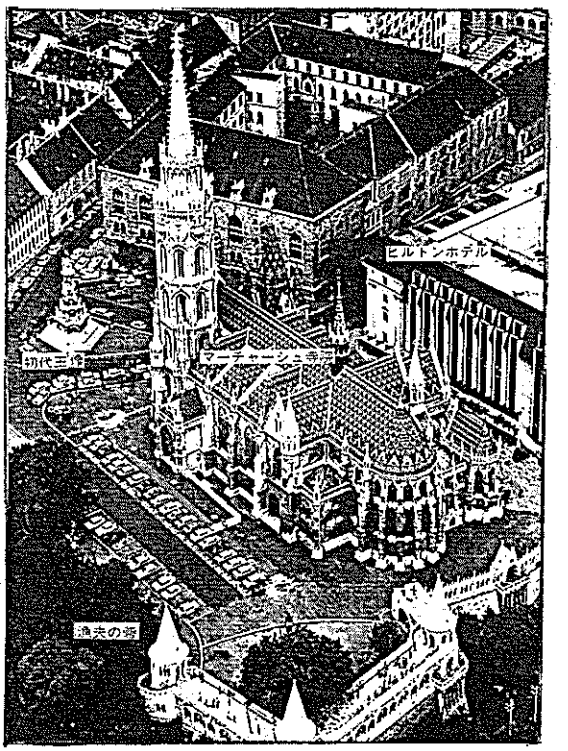
「王城の丘へ」

ブダの王の丘に入った途端、石畳の道に建つバロック様式の民家や舘の壁、それに漆喰の下がりゴシックの窓枠や門、石のアーチなどが見えてきた。

ブダの丘は古来、ハンガリーの政治の中心であったところで、アルバート王朝のベーラ４世がモンゴールが撤退した１２４９年に築城し、以来トルコの占領時代を通じて王城となった所である。

中世以来、この小さな地区が幾度となく攻撃を受け、ブダの歴史は終わることを知らない建て替え建て直しを繰返し、今日のような歴史と文化の重みを遺す美しい景観となったのであった。

丘の麓で下車した我々は高い石段を踏みつけながら登った。そこの緑に囲まれた広場には、幾つかの先の尖った白い塔が立ち並び、その北側に見上げても見られないような教会の尖塔が聳えていた。



（王の丘は７４頁地図の中央左側）

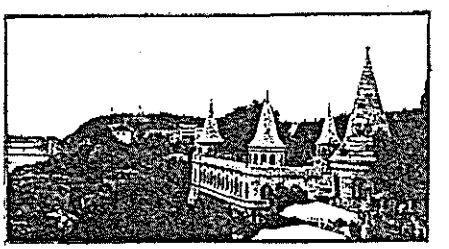
〔右上写真の中央の尖塔は「マーチャーシュ教会」、下部の白い塔は「漁夫の砦」〕

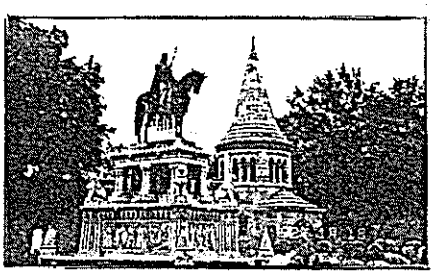
「漁夫の砦」

丘の広場の端に立っている白い尖った塔が、１８９６年に完成した「漁夫の砦」で、そこからの眺望は時の経つのも忘れさすほどの絶景である。

「漁夫の砦」の名称は何に由来しているのだろうか。昔ここに魚市場があったからだという説もあれば、又１９世紀に市民軍が王宮を守った時、ここが漁夫たちの守った城門であったから、その名称が生まれたという説もあるようだ。

真相は不明だが一般には後者を指しているらしく、現在、目にしている砦は１９０３年に建立したものであった。





７つの尖った屋根のある塔は、８９６年にこの地に東洋からやって来た、マジャール人の７つの部族を表わしている。塔の形は当時のマジャール遊牧民の包（テント）を模したもので、東洋系といわれる民族意識を醸し出していた。

（上の写真の上段は漁夫の砦の尖った塔、下段はイシュトヴァーン王の騎馬像）

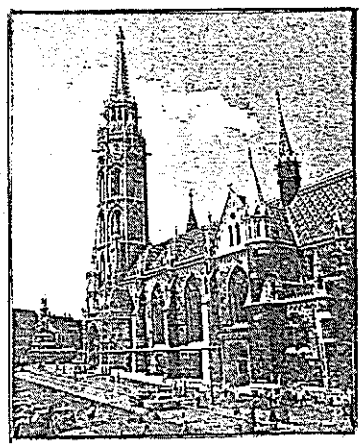
王城の丘は観光客に最も人気のある名所であった。カタツムリのような回廊から尖塔に上ると、左にマルキット島と橋、正面に国会議事堂と聖イシュトヴァーン大聖堂

のドームが目に映り、右手に王宮の華麗なドームが見え、他を睥睨して息を飲むような美観が拡がっている。

白い尖塔が立った城砦上から下りた広場には、初代王・イシュトヴァーンの騎馬像が東洋人の我々を迎えるように立ち、背景にはヒルトン・ホテルの窓ガラスが光を反射していた。

敵の包囲攻撃に漁夫たちが団結して守った砦は、当時とは一変して素晴らしいロマネスク建築美を表現し、広場の周りには押し合う観光客を相手にした露天商が並び、今では民主化の波は王城の丘にまで届いていた。

「マーチャーシュ教会」



旧城門であった漁夫の砦に守られるように建っているマーチャーシュ教会は、１３世紀以来のハンガリーの歴史の証人で、これを見ないでブダペストを語ることは出来ない。

先ず１２５５～６９年にベーラ４世によって創建され、次いでハンガリーを中欧最強の国家にしたマーチャーシュ王が、アンゴラ王家のベアトリーチェ姫（スペイン）との結婚式を挙げるため、１５世紀に尖塔を建設して教会を完成させた。

さらにカーロイ１世が戴冠式を行って以来、歴代の王の戴冠式を挙げるようになったため、戴冠教会という呼び方もされている。

１４５年間にわたるトルコの支配の間はモスクとして使用されたが、１８７３年から１８９６年にかけて大幅に改装され教会では、３人の王の戴冠式が行われている。

現在のゴシック様式の寺院を含めた建築は、第２次世界大戦で戦火を被ったが、１９６０～６３年の間に殆ど原型に修復された。（上はマーチャーシュ教会の景観）

ぎざぎざした装飾を施した荘厳な尖塔は、我々見る人の眼を磁石のように引き付け、見上げるようにカメラを覗いたがファインダーに収まらない。丁度その時、教会の鐘の音が鳴り響いてきた。

これはローマ法王・カリクストゥス３世が、１５世紀の戦闘でハンガリー軍がトルコ軍に勝利したことを祝い、正午に教会の鐘を鳴らすように命じたからであった。そしてこの習慣は現在でも続けられていたのである。

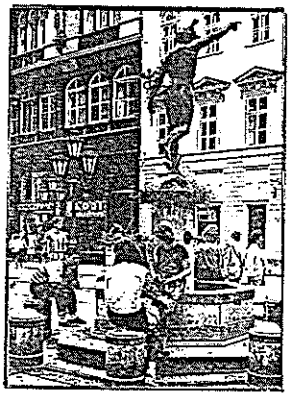
以上で豪華絢爛な王城の丘の見学は終了した。回顧すると今次の旅で深い印象を残したことは数々あったが、ブダペストは水を得た魚のように生き生きとして脂が乗り切った感じであった。歴史も景観も私に最高の想い出を与えてくれたことを悦びながら丘を下り、ペスト下のレストランで昼食を摂ることになった。

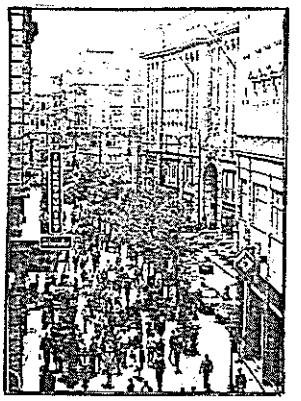
「ブダペストの繁華街ヴァーツィ通り」

昼食を終えてバスに乗車した一行はヴルシュマルティ広場で下車した。この広場は１９世紀のハンガリー文学を代表する詩人・劇作家の「ヴルシュマルティ・ミハーイ」を記念した広場であった。

この広場から「くさり橋」まで伸びる「ヴァーツイ通り」がブダペスト最高の繁華街で、午後２時、我々はここで自由解散となった。（位置は７４頁地図の中央左下）

１００年も前からファションの街だったヴァーツィ通り、その終りにはヴァーツィ門があった。門の前の干し草市場の跡が今のヴルシュマルティ広場で、市民の憩いの場となっていた。





ドナウに沿ったヴァーツィ通りにはイタリア・ルネッサンス様式や、古代エジプト風から中世フランス式のものまで、色とりどりの建物が軒を連ねていた。

第２次世界大戦で灰燼となるまで、この辺りは市民の散歩や恋の語らいの場だった所だろうと想像しながら、劇場、高級ホテル、ブティック、レストランなどが櫛比する歩行者天国を歩いた。

国の人口約１０００万人の５分の１、約２００万人が集中している街だけあって、ブダペストの流行の発進地のこの通りには、群衆の押し寄せる波は途切れることなく続いていた。（上の写真の左はヴルショマルティ広場、右はヴァーィ通りの人波）

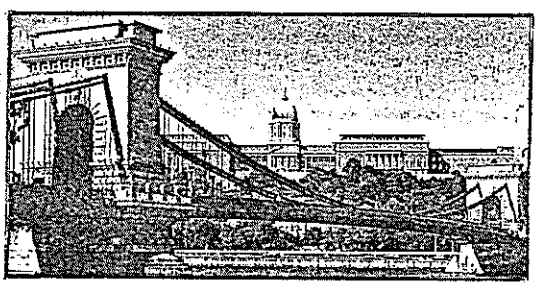
通りを北に抜け切った所にある「くさり橋」（鎖橋）が見えてくると、その前に我々の宿泊する「フォーラム・ホテル」が聳えていた。（７４頁地図の中央稍々左下）

早速、個室のベッドに横臥して疲れを癒し、自由時間は終りを告げた。

「くさり橋とブダペストの感懐」

歴史に富んだブダペストの中でも、最も美しい景観は王宮の丘とドナウ河であった。浅い眠りの夢から覚めたような思いで、もう一度あの美観を眼底に焼き付けておきたいと、自然に私の脚は「くさり橋」に引き付けられていった。

１９世紀初めまでは、ドナウ左岸のブダと右岸のペストの間には橋はなかった。自由主義者で大金持ちの貴族たちは両市の統合を願い、１９世紀に造られた橋がくさり橋で、重厚で優美な姿を見せていた。



チェーン・ブリッジ正面のブダの丘に緑色のドームが燦然として聳え、このバロック様式の気品のある建物が王宮であった。

（右の写真の手前がくさり橋、河の向う側の丘に建つのが王宮の建物）

ブダは１２４１年のモンゴルの来襲で破壊され、改めてベーラ４世が南に隣接する丘の上に強固な王城を築き、首都としたのが眼前の宮殿とブタの丘である。

王宮は１５世紀のマーチャーシュ王時代に、王妃の故郷のナポリを通じて、中欧で最も華麗な宮殿として造ったものであった。短期間ながらウィーンまでも支配下におき、ハンガリーが神聖ローマ帝国と並ぶ広大な版図を持ったのもこの時期である。

夜毎、酒宴が繰り広げられ、各国の大公使をして「楽しきかなブダの宵」と感嘆させ、目を瞠らせたこの宮殿もマーチャーシュ王の没後、わずかにして強大なアスマン・トルコの来襲で瓦礫と化してしまった。

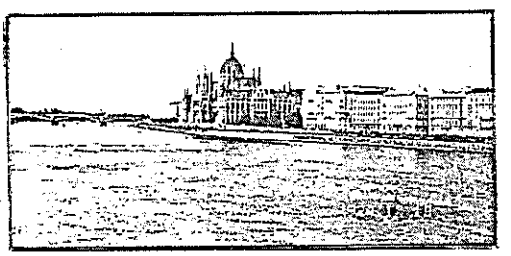
今くさり橋の上に立って眺める宮殿は１８世紀に再建されたものだが、第２次世界大戦でも大半が炎上し、再度、見事に修復したのである。

「瓦となって全うするよりは玉となって砕けよ」という古訓の通り、刀折れ矢尽きても立ち上がったハンガリー人の強固な意思に絶大な敬意を表しながら、橋の欄干に寄り添い見詰めていた。

残念ながら王宮の参観の時間はなかったが、現在の王宮は国立美術館、博物館として使用され、くさり橋の裾から丘の斜面を王宮に向かって一直線に、ケーブルカーが通じていた。

歴史のパノラマを見るような王宮の右側に、先刻おとずれたマーチャーシュの荘厳極まる教会を始め、さらに上流にはマルギット島が眺望されていた。

（上の写真はライオンの像のある「くさり橋」からマーチャーシュ教会を望んだ景観）



一方、振り返ると王城の反対側には相対するようにして、国会議事堂や聖イシュトヴァン大聖堂の尖塔が聳え、それらは正に中世の雰囲気を今に伝えている一大絵巻であった。

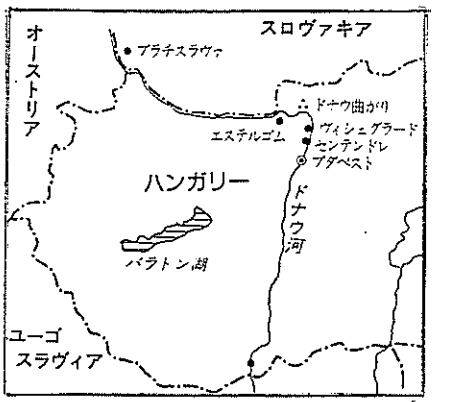
（右はドナウ河に面した国会議事堂）

ドナウの静かな流れの上を走る舟は、「有るに任せよ」といった自然体を表現しているように映っていた。自分の力ではどうしょうもないのが人生であり、時には流れに身を任せるのも良いのではないだろうか。私の死闘戦場の体験から、そのような考えが生ずるのも自然で、確かにそうであったと記憶している。

ハンガリーの数々の悲劇は私の心情を高めていた。そのような状況から英雄が生まれたポーランドなどの歴史を顧みると、「戦争は奇妙な技術」だと言ったナポレオンの言葉が思い出されたのである。

第２次世界大戦後、社会主義陣営に組み入れられたハンガリー人は、東欧で初めて反ソ蜂起に立ち上がった国民である。そして自分で選んだ生き方を如何なる困難に遭遇しても克服し、その道を進んだ偉大な民族だと感じながら、感慨無量でホテルに帰舘して今日を終えたのである。

7月15日　(金) 晴　ドナウ・ベンドの見学（下図参照）



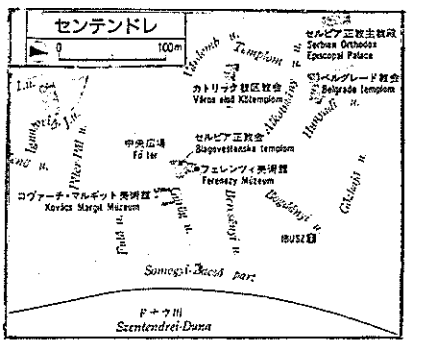
今日は終日、自由行動の日であった。希望者だけがドナウ・ベンドの見学に参加することになり、ハンガリーの歴史探訪のためにも私は参加することにした。

ドナウは北のスロバキアと南のハンガリーの間を国境をなして東に流れ、まもなく両岸ともハンガリー領となるが、その少し手前のところで有名な「ドナウの曲がり」に差し掛かっている。

景色のよいこの曲がりを「ドナウ・ベンド」と称している。しかし「曲がり」を意味する英語の「ベンド」を何故に使っているのだろうか。当然ハンガリー語で呼ぶ方が良いと思いつつ、９時に出発したバスはドナウに沿った街道を快走して北上した。（上図参照）

ドナウの曲がりは風光明媚と共に遺跡の名所で、そこにはローマ時代の遺跡があって円形劇場跡や水道橋を見ることが出来る。

「センテンドレ」（上図参照）



ブダペスト北方約２０㎞の所にあるドナウ・ベンドの南口に当る町がセンテンドレであった。１７世紀に大挙して移住してきたセルビア商人（旧ユーゴ）によって、エキゾチックで瀟洒な街並みが築かれた。

バスを降りて緩やかな坂道を少し歩くと、不正十字路となっている町の中心部であった。一般にここを中央広場と呼んでいた。

広場の中心というか道路の交差点に、ペストの疫病からこの町を守ったことを記念して、１７６３年に創建されたセルビア正教の小さな十字架をのせた塔が立っていた。

広場の一隅には広場で最も重要な正教が建ち、この教会を中心にして嘗ての商人が競って建てた商店が広がっている。バロック風、ロココ風、ルイ１６世風など、思い思いの様式のカラフルな街並みは小さいながら印象的である。

バロック風の尖塔がよく目立つセルビア正教会は、１７５２～５４年にかけて建てられた教会で、後方の丘の上にはカトリック教区教会などの教会の塔が聳え、古い町の雰囲気を醸し出していた。（上の地図参照）

（右は中央広場に立つ十字架の塔と、セルビア教会）

一行は広場から南に下った坂道を歩き、コヴァーチ・マルギット美術館の見学となった。女流陶芸家のゴヴァーチ

・マルギットの作品が集められた美術館は、ハンガリーの民族芸術と現代的なものをミックスしたユニークなものだと説明された。しかし知識のない私には当然わからない。帰国後、ＮＨＫでこの美術館が放映されていたことを考えると、見る人には価値があるのであろう。

ただ門にあった石の飾りやロココ様式（１７３０～８０年代）の窓、小さいながら美しい中庭などは美術館に相応しく、素人の私にも建物全体が美術品のような感じを受けていた。

１時間の自由時間を与えられた私は丘の上にある２つの教会を廻り、小さな町全体を眺めた後、ドナウの川辺へと急いだ。平らに大きく開けた大自然の中をドナウはゆったりと流れ、河畔にも所狭しと露天が並んでいた。

ブダペストから近い距離にあるために観光客は多く、露天街を通り抜けて要塞跡へと向かった。丘の中腹に最初の城が築かれた時に造った要塞の跡は、ドナウの船着場のすぐ隣に見えていた。これはモンゴル軍を迎撃するための要塞であった。

自由時間は瞬時に終わって広場のレストランで昼食を摂り、次の観光地のヴィシェグラードへと出発した。

「ヴィシェグラード」（前頁地図参照）

センテンドレから北に１０㎞程のところにある小さな町・ヴィシェグラードは、１４世に都となつたこともある。ドナウの改造計画では３番目にダムの建設が予定されていたが、建設半ばで工事が中止された跡が明瞭に残っていた。

若しダムが完成していたら、このドナウの曲がりの景観は台無しになっていたことであろう。ドナウの景勝を命をかけて守ろうとしたハンガリー人の執念に、あらためて感動したのである。

歴史を繙くと、４世紀にローマ人が丘の上に要塞を築いたのが町の始まりで、９世紀と１０世紀にセルビア人が移住し、ここをヴィシェグラード（高い城の意）と呼ぶようになった。次いで１１世紀にマジャール人がこの地を占領して都としている。

１２４１年にモンゴル人の侵入後、都は次に訪れる上流のエステルゴムからブダに遷都した。やがてマジャール族の定住以来つづいていたアルパート家は途絶え、フランスのアンジュー家から王が迎えられた。

新しい王のカーロイ・ローベルトは、ブダでの王位争いを避けて１３１６年にヴィシェグラードの丘に王宮を建てた。その王宮跡の石積みの館が丘の麓に見えていた。

彼はここに１３３５年、ポーランド王、ボエミア王、それにドイツの諸侯を集め、今で言う「ドナウ・サミット」を開催した。ドナウでこのような王侯会議が開催されたのは史上初めてであろう。

王侯たちは東西を結ぶ新たな交易路を開く取り決めを交わした。会議は２ケ月も続いたといわれるが、王侯たちはきらびやかな騎士の集う華やかな町を想像し王宮を眺めていたのであった。

（右の写真は川辺にある王宮の遺跡）

夏の宮殿として造営した王宮の部屋は３００にも及び、ここを通る商人たちか

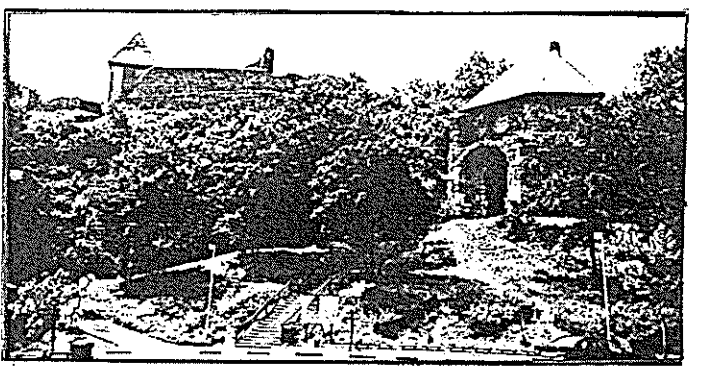
ら税を取って栄え、ドナウの絶景は旅人の心を和ませていたという。

都が再びブダに移された後もヴィシェグラードの居城の造営は続けられ、イタリア・ルネッサンス風の華麗な宮殿へと仕上げられた。しかしこの宮殿もトルコ軍に占領され、さらに長い年月の間に山からの土砂に埋もれ、忘れ去られていたのである。

１９３４年、たまたま農夫が地下の物置から、宮殿跡らしいものを見付けたのが切っ掛けとなって発掘され、今もなお発掘は続けられている。

当時のエステルゴム大司教は、この宮殿について有名な記録を残している。それは「花咲き乱れる芝生の園」、「菩提樹がずらりと植えられ、春になると甘い香りを漂わせていた」など、と記されているのである。

マーチャーシュ時代はハンガリー王国の最後の輝ける時代であったと前記した。しかし１５２６年にハンガリー軍はトルコ軍に大敗し、王位はオーストリアのハプスブルク家に渡たり、更に都のブダが陥落した。以来、ドナウの曲がりから南の流域は凡そ１５０年間、トルコの支配下に入ったのである。



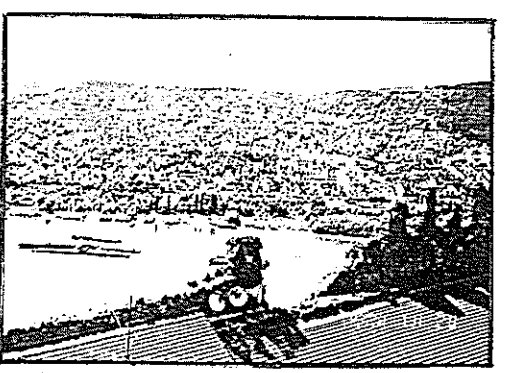
ヴィシェグラードの最大の見所は、王宮の上にある要塞の跡であった。

１５世紀にマーチャーシュ王は丘に頂上にルネッサンス様式の豪華な城を建て、モンゴル軍を迎え撃った。これがこの要塞の跡であった。

その後、トルコ軍によって破壊されたが今は良く整備復元され、内部には要塞の歴史を展示するコーナまで設備されている。

王宮の跡から乗車したバスは急坂のパノラマ道路を登りつめ、丘の上の平らな広場で停車した。そこから石で高く積み上げた城砦を青息吐息で登らなければならなかった。（上の写真は城門と城砦の一部の光景）

喘ぎながら辿り着いた場内は実に広大で、そのうえ階段に次ぐ階段を登っての見学は疲労が重なって容易ではなかった。汗びっしょりになって回って見た要塞は、当時としては難航不落を誇っていたと考えられ、ヨーロッパの他の城に比較して最も実戦的に築城されていた。



城壁の厚さ３～５ｍもある砦の周りを更に城壁で囲んだ二重の要塞は、その規模と言い堅固さと言い、当時のヴィシェグラードが交通の要衝、戦略上の拠点として重要視されていたことが窺われる。

栄華を極めた名残をのこす城砦も今は崩壊が甚だしく、往時を偲んで城の上から四周りを展望すると風光明媚な「ドナウの曲がり」は、ハンガリーの歴史を凝縮しているように見えていた。（右は城砦から眺めたドナウ）

「エステルゴム」（８３頁地図参照）

ヴィシェグラードから「ドナウの曲がり」を眺めて快走すること約３０分、教会の尖塔が聳えるエステルゴムの町が車窓に見えてきた。

ドナウの曲がりの起点であるエステルゴムは、ハンガリー初代の王・セントイシュトヴァンが生まれ、王座に就いたところで、ハンガリー王国誕生の地であった。

再びここでハンガリーの歴史を繙いてみると、この王国以前は前記した通り興味深い前史があり、ハンガリー人の先祖はアジア系民族であった。ドナウ流域をめざして東方からアジア系の民が９世紀までに３回にわたって侵入し、最初は５世紀にやってきたフン族であった。

彼等はこの地域に住んでいたローマ人の堅固な防衛線を突破し、ドナウの曲がりと今のハンガリーを征服してローマ帝国をうかがったが、やがて滅ぼされてしまった。次に７世紀にやってきた遊牧民・アヴァール族も、フランク王国のカール大帝に敗れて姿を消した。

最後に入ってきたのは、アルパート公に率いられたマジャール族ら７つの部族であった。そして彼等騎馬民族は８９６年にドナウ流域を征服して定住した。彼等の呼び名「マジャール」はやがて民族全体の名称となり、国名ともなった。ハンガリーと言うのは英語の呼び名で、ハンガリー人自身は「マジャール」と呼んでいる。

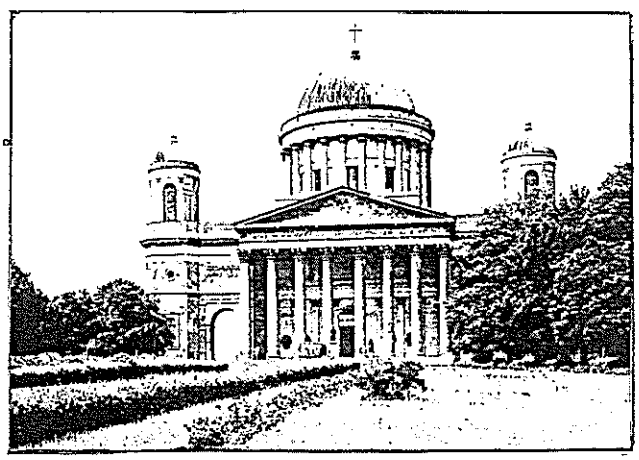
彼等はやがてドナウ流域で漁業、狩猟、牧畜、農耕を営むようになった。この騎馬民族の後裔たちは時には同盟軍として、時には戦利品を目当てにして屡々ヨーロッパ各地に遠征した。

しかし彼等は９５５年に神聖ローマ帝国軍に敗れ、これが一つの転機となった。時の支配者ゲーザ公は、ハンガリーが生き延びるためにはキリスト教に改宗し、ヨーロッパの一員になるより他に道はないと悟ったのである。

こうして彼の息子・ヴァイクは「エステルゴム」で洗礼を受け、ローマ法王から王冠を戴いてキリスト教を国教とした。これが初代王・イシュトヴァーン１世である。

エステルゴムは日本でいえば奈良か京都である。イシュトヴァーン１世が戴冠式を挙げ、この町を都としたのは１００１年であった。

それ以来エステルゴムは１３世紀半ばのモンゴルの侵入まで、凡そ２４０年間ハンガリーの首都であった。

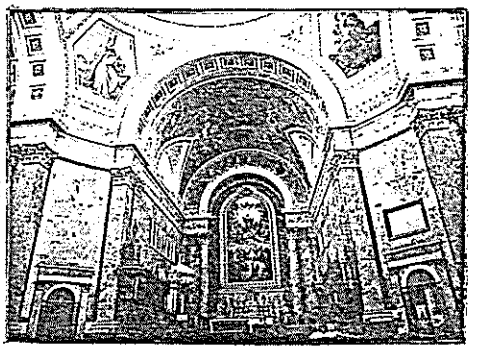


一行はこの町の象徴である小高い丘の上に立つ大聖堂の庭園の入口で下車した。その第一印象は美しさを強調していた古典様式の列柱で、ドナウ河畔という場所が一段と教会を引き立てていた。（上は大聖堂の全景）

エステルゴムはイシュトヴァーン以来、この国のカトリック教の総本山で、都がブダペストに遷都した後も引き続いている。元々ここにはイシュトヴァーンによって建てられた聖堂があったが、トルコの支配時代にひどい破損を受け、１８２２年から現

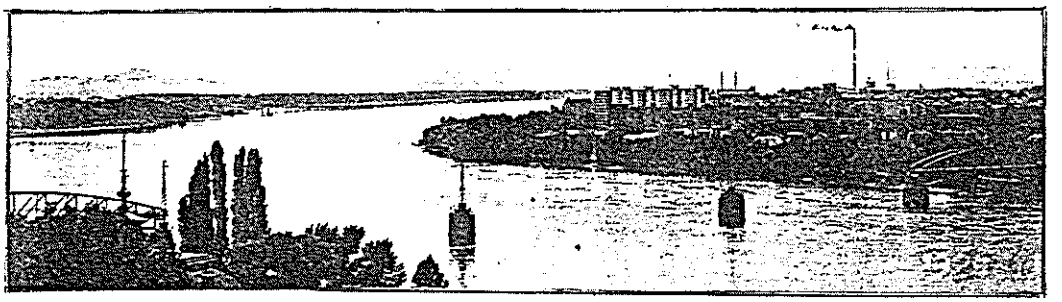
在の新しい聖堂に建て直しが行われて１８６９年に完成した。

２４本の円柱によつて支えられた丸屋根のドームの高さは１００ｍあまりで、勿論ハンガリーでは第一番である。大聖堂の内にはキリスト教の儀式に使われた数々の宗教用具を集めた博物館も設けられていた。



（右の写真は荘厳な大聖堂の内部）

大聖堂の建つ広大な丘は地形を利用した旧要塞のあった処で、聖堂裏側の真下にドナウ河が悠然として流れ、風光は明媚で対岸のスロバキア領には工場の煙突が見えていた。



ドナウ河に架っていた橋梁は第２次世界大戦で破壊され、今は無残な橋脚のみを残していた。前記した歴史の通り、長らくスロバキアはハンガリーの支配下に置かれていた経緯から、戦後５０年も経過した今もなお友好が結ばれないのか、再建されていない状態であった。

過去の支配関係と民族の違いは復興にも及んでいる光景を眺めると、日本の置かれている立場を考えさせられるのであった。（上の写真は再建を見ない橋梁の橋脚）

河畔を離れて聖堂の庭園の入口に戻ると、そこに建っていた古い煉瓦造りの建物は旧トルコ軍の兵舎で、複雑な民族闘争の跡がここにも遺されていた。

エステルゴムの観光が終わった一行の帰路は、往路のドナウ河畔の道路は通らず、ブダペストに直通するバイパスを疾走した。街道には日本のススキ自動車の工場もあり、わが国の海外進出の姿に見惚れていると、そこにソ連軍大基地の跡が現われた。

ハンガリー動乱の経験からであろうか、膨大な基地はおそらく兵舎の数から判断して、優に１ケ師団以上が存在していたと思われ、戦後の歴史を物語っていた。

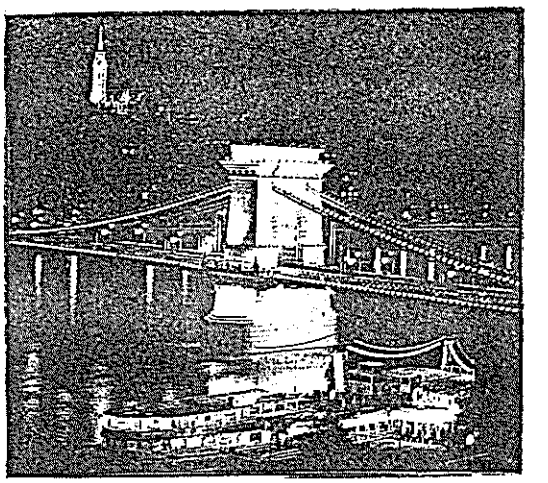
向日葵の黄色い花が美しく咲いた街道の集落には商店が並び、芥子やにんにくを山のように積んでいた。これは東洋系の民族の子孫の証拠かも知れないと、近親感の眼でもって眺めていた。

豊かな大自然に感動したドナウ・ベンドの小旅行は価値あるものであった。そして僅かな時間でドナウの美観と由緒ある歴史を学べるブダペスト市民は、何と幸福なことだろうと思いながらホテルに向かって快走した。

ブダペストの夜景・ドナウの真珠

辺りが薄暗くなった暮色蒼然としたドナウの橋を渡り、バスは晩餐会場となっていたブダの街へと進行した。ここでもルーマニアヤブルガリアと同じく、民族衣装を纏った舞踊を観賞しながらのお別れパーティは、老いも若きも盛り上がっていた。

ドナウ流域の民族は河の流れに沿って、スラブ系、ラテン系、アジア系の民族衣装は少しずつ変化し、その多彩な色合いを興味深く見詰めていた。猛虎のような強い感じの踊りが一変して処女のような弱々しい踊りになり、やがてフィナーレとなった。



真っ黒な街道に見えてくるブダの家々のライト照り出された家壁は、過去の歴史を語りかけているようで、想い出が尽きないドナウの河畔をバスは走った。

その時、運転手の好意によって我々はゲレルトの丘に登り、「ドナウの真珠」とか「ドナウの女王」と称賛される、夜景見物に案内されることが告げられた。

到着したゲレルトの丘の駐車場は観光客と市民で大混雑を呈し、「この夜景を見なければブダペストを語るべからず」と言う喧騒した雑踏は、足の踏み場もない状態であった。

眼下にはドナウ両岸に広がる雄大なパノラマが真珠のように輝き、星光のように瞬き、王宮を始めマーチャーシュ教会、国会議事堂などの歴史的建築物はライトアップされ、数多い橋は悉くイルミネーションが灯されていた。

（上の夜景は、くさり橋と観光船、左上はマーチャーシュ教会の尖塔）

その光のレリーフをドナウの漣（サザナミ）が、きらきらと照り返しながら流れていく夜景を、私も誰もが忘我陶酔の心で眺めていた。これこそ誰が命名したのか将に「ドナウの女王」「ドナウの真珠」の絶景である。

ウィーンにもプラハにも感じなかった情緒が漂い、自然と人工の街とがこれほど見事に調和して、絶妙な都市景観を写し出しているところは私は知らない。人生は出会いと別れの連続だが、この美観は我が生涯の中でも遁世を覚えさせる地であった。

７月１６日～１７日　帰途につく

東欧７ケ国の旅は心の保養を始めとして耳目の保養、それにもまして歴史探訪は意義は深く、数々の想い出を作りながら会者定離の諺の通り離別の時を迎え、アジア系民族のハンガリーには特別な愛着を感じ、ブダペスト空港を１１時に離陸した。

途中、再び悪いイメージのモスクワ空港で３時間も待機させられ、成田到着は１７日の午前１１時であった。

あとがき

希望は生きる「張り」である。幾つになっても希望のあるところに喜びが生まれ、それが充実した人生だと言えるのではないだろうか。希望を失った人生は惨めであり、年老いても希望は捨ててはならない。

人生で問題なことは内容である。いたずらに年齢を重ねても生きたことにはならない。張りのある充実した人生を過ごした人こそ長生きしたと言うべきで、今次の東欧の旅は「学ぶのに年を取り過ぎたということはない」、と教示してくれた。

東欧は民族の坩堝でモザイクの様相を呈し、各民族は明日の我が身を案じながらさ迷ってきた歴史をもっている。、前記した通り神聖ローマ帝国（ハプスブルク家）や、オスマン・トルコ帝国の支配を経て、第２次世界大戦後に漸く現在の状況に落ち着き、世界の火薬庫と言われたバルカンにも平和が到来した。

戦乱の絶え間のなかった奇妙な運命も天の采配だと言えばそれまでだが、、古い歴史を繙いてみれば、総て汚い歴史の連続であったと称しても、決して世迷言ではない。

東欧の諸民族は過去の歴史から、漸く戦争の無意味と熱い血の通った平和の尊さを自覚し、かっての支配民族や敵対国に対して謝罪を要求したこともなく、過去の怨念を根にもって復讐するという馬鹿げた思想を反省していた。

マレーシアのマハティール・モハマド首相は戦争責任問題について、「日本が５０年前に起きたことを謝り続けることは理解できない。過去は教訓とすべきだが、現在から更に将来に向かって進むべきである」と言明した。けだし明言である。

５０年前のことを言えば１００年前２００年前のことも問題になる。世界各地の植民地であった国々が西欧の植民地宗主国に謝罪を要求し、補償問題になったことは私の記憶にはない。

しかし日本の政治家やジャーナリストは過去というカードだけで、中国や朝鮮半島などと政治ゲームをやっている。過去よりも現在というカードを混ぜ併せた政治ゲームを目指すべきで、その点は東欧紀行の成果であった。まことの真実は歴史によって中々得られ難く、大抵の場合、まことの真実は真に重要なものとして見られるよりは、むしろ利己的な対象になっている。真実は唯一つだと言えるのだ。

歳月は忘却の良薬で、自然に苦しみも悲しみも風化する。しかし世界平和のためにも、人間の心の中で進行する風化を阻止しなければならない問題もある。

「アウシュヴィッツ」の正視できないような残虐悲惨な収容所は、千軍万馬の私にも百雷のような衝撃を与え、この収容所だけは民族の隔てなく、世界平和の教訓として永久に保存すべき所であった。

人生は一寸先は闇である。死にたくても許されないこともあり、死にたくなくとも死ななければならないこともある。これが私の体験した血も涙もない戦争の実相であった。戦争は自分というものがない幽鬼の世界で、戦争防止のためにもアウシュヴィッツの教訓は絶対に風化させてはならない。

人生の総決算として私は「無用の用」を信じている。それは軍事学を通じての人間学であった。旅は依然として私のエネルギーの教師で、床の間の掛軸的な落葉期を迎えた私は、これからも益々気楽に旅から学んでいきたいものである。

明窓浄机の上で迷論愚説の「あとがき」を書くことも旅の再現と反省で、これからも「年間わんより世を問え」と「日々是好日」でありたい。